

# 2025年度 千年村プロジェクト

## 佐渡島疾走調査報告書



### 千年村プロジェクト・メンバー

金盛晋也	田熊隆樹
川井操	永井朝樹
木下剛	中谷礼仁
小林千尋	林憲吾
近藤真	福島加津也

(五十音順)

### オブザーバー

稲田玲奈

### 参加大学

慶應義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科 川井操研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース環境造園領域

都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京大学生産技術研究所 林憲吾研究室

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 福島加津也研究室

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

立正大学 奥村敦至

(五十音順)

2026年2月



## 千年村プロジェクトについて

〈千年村〉とは、千年を基準として、自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が存続してきた土地をさす。

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の蒐集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構想された。2011年に発生した東日本大震災後に、優れた生存立地を発見しその特性を見出す必要性を感じたことがその発端である。関東と関西にその研究拠点を持ち、環境・地域経営・交通・集落構造という4つの要素を重要視し、それらに関する諸分野の研究者・実務者によって運営され、2014～17年度文部科学省科学研究費助成事業「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」に採択された。様々な圧力を受け、変容を受け入れつつも、長らく存続してきた歴史を持つ地域には、生産性や防災性、経済的交流の基盤などが構築され、持続可能な土地固有のシステムが育まれてきたと考えられる。山際の集落、その眼下に広がる水田、集落を護る鎮守の森、他所へ通じる峠道、異国へ向かう海原。日本における地域の多くにはこうした共通する特徴が具備されている。しかし、これらの特徴は突出した文化財的指標というよりは、むしろ健全な国土を日常的にささえるものとして評価されるべきであろう。

千年村プロジェクトは、そのような地域に実際に赴き、環境・地域経営・交通・集落構造の各視点から、地域が存続してきた要因の分析を行っている。そしてその地域が良好な生存条件を保っていると確認できた場合、その地域を〈千年村〉として認証する。認証によって、当該地域の存続要因を理解していただくとともに、これからの千年に向けた存続可能な地域づくりの支援を行うことを目標としている。

### 凡例

#### [本書の構成]

1. この調査記録は2025年10月11日～13日にかけて行った佐渡島疾走調査の記録として、①調査前に事前に用意したものと②調査で獲得した諸情報を記す。具体的には①は第1,2,5章で、②は第3,4章である。

#### [執筆者名、図版出典、参考文献]

1. 執筆者名は一つの項目には付さず、巻末に一覧として明記する。
2. 図版出典、参考文献も同様に巻末に一覧として明記する。

#### [表記方法]

1. 引用文献は、著者名（発行年）の形式で本文中に記載し、詳細は巻末の参考文献リストに記載する。
2. 図表は、図1、表1のように通し番号を付ける。
3. 年号は西暦を基本とし、必要に応じて和暦を括弧書きで付記する。例：2023年（令和5年）
4. 史料の表記：史料名は『』で囲み、刊本や写本の別を明記する。
5. ヒアリングによる情報はヒアリングで得た情報であることを明記する。

## 目次

<b>第1章 地図プロット編</b>	3
1-0. はじめに	3
1-1. 『和名類聚抄』記載地名の現在比定による千年村候補地の発見 (2011)	3
1-2. 同様の手法でその他資料を活用した千年村候補地の発見	3
1-2-1. アイヌ語地名による北海道・東北地方の千年村候補地の発見 (2015～)	4
1-2-2. 『おもろそうし』による沖縄地域の千年村候補地の発見 (2015)	4
1-2-3. 荘園地研究を活用した古代・中世における〈千年村〉の発見 (2020)	4
1-2-4. 国外における〈千年村〉(歴史的生存環境) 候補地の発見 (2018～)	4
1-2-5. ハザードマップをレイヤーに追加	5
1-3. 登録千年村制度の開始	5
<b>第2章 調査および報告書の目的</b>	7
2-1. 調査の目的	7
2-2. 報告書の位置付け	7
2-3. 調査の基本概要	7
<b>第3章 2025 年度佐渡島疾走調査 各村の報告</b>	10
<b>第4章 2025 年度佐渡島疾走調査 考察</b>	31
〈千年村〉候補地からたどる佐渡の歴史的生存環境の類型	31
加茂郡久知郷について	38
島の開かれと閉じられ 2025 年度佐渡島疾走調査	51
村の安定装置としての台地	54
真野の入江	58
「2つの島」の住まい方	60
佐渡の千年村は都市的に見える気がした	65
ふたつの環境セット 2025 年度疾走調査	70
トキと港と千年村	73
佐渡初来訪の所感	77
生態系保全の取り組みは、千年村：佐渡にどのような影響を与えるのか	80
<b>第5章 付記</b>	85
5-1. 謝辞	86
5-2. 巻末資料	87
5-3. 成果物ポスター	97

## 第1章 地図プロット編

### 1-0.はじめに

千年村プロジェクトは、全国に存在する〈千年村〉の収集・調査・公開・認証・交流を目的としたプラットフォームとして、2011年に構想され、現在に至るまで運動体として更新を続けてきた。本プロジェクトは、「みつける」「まなぶ」「つづける」「たたえる」の四つの研究プロセスを軸に、学術研究から一般参加型のワークショップまで、幅広い層を巻き込みながら展開している。

本報告書では、本年度の活動実績を踏まえ、これらの研究プロセスのうち、特に基盤的段階である「みつける」に焦点を当て、その研究の展開を整理する<sup>1</sup>。「みつける」は、長期持続集落を全国規模で把握するための方法論を構築する段階であり、主に歴史文献に記載された地名を現在地へ比定し、地理的にプロットする作業を中心として進められてきた。本章では、早稲田大学中谷研究室を中心に行われてきた代表的な研究成果を紹介する。

#### 1-1.『和名類聚抄』記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見(2011)<sup>2</sup>

千年村候補地をひろく全国から発見するために、平安期辞書『和名類聚抄』に記載される古代地名と、それらを現在地へと比定した既往研究の成果を用い、地理的にプロットし、それらを千年村候補地とした。主要参考文献は『角川日本地名大辞典』である。ここには『和名類聚抄』記載地名の現在地比定に関する先行研究がまとめられている。その比定精度は、以下の7つに分

類される。

1. 単一の大字に比定される
2. 複数の大字に比定される
3. 市域に比定される
4. 河川流域などの複数の市域にまたがる範囲に比定される
5. 比定に関する説が異なる
6. 比定地は未詳とされる
7. 比定地に関する記述がない

本プロジェクトでは、以上のうち現在の行政区画・大字領域に比定されるものをプロットしており、その数は『和名類聚抄』記載郷名4020個のうち1994箇所である。

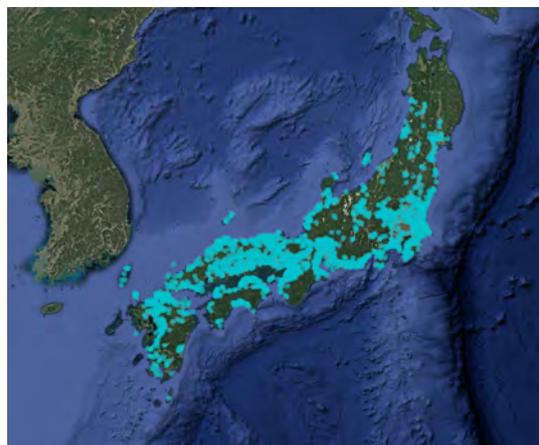


図1-1 『和名類聚抄』による千年村候補地プロット  
(千年村 HP より引用)

#### 1-2.同様の手法でその他資料を活用した千年村候補地の発見

『和名類聚抄』は、制作当時に朝廷の実効支配が及んでいなかった北海道、青森県、沖縄県を含まない。そのため、これらの地域では別史料を用いた候補地発見が試みられてきた。なお詳細は2024年度調査

報告書を確認されたい。

### 1-2-1.アイヌ語地名による北海道・東北地域の千年村候補地の発見(2015～)<sup>3</sup>

北海道においては、アイヌ民族が生活の場に付したアイヌ語地名に着目し、既往研究による現在地比定をもとにプロットを行った。記載地名 1032 個のうち、和名類聚抄と同条件で 620 箇所を抽出し、千年村候補地とした<sup>4</sup>。また、アイヌ語地名は東北地方にも分布することから、東野友紀は『和名類聚抄』による東北地方の欠落を批判的に検討し、プロットの補填と妥当性検証を行った。流域断面図を用いた集落連続性の視覚化は、後続研究にも重要な示唆を与えている。

### 1-2-2.『おもろさうし』による沖縄地域の千年村候補地の発見(2015)<sup>5</sup>

沖縄地域については、古琉球時代の歌謡集『おもろさうし』に記載された地名を用い、現在地比定にもとづくプロットを作成した。記載地名 228 個のうち 98 箇所を千年村候補地として整理している。

### 1-2-3.荘園地研究を活用した古代・中世における〈千年村〉の発見(2020)<sup>6</sup>

さらに、通時的視点からの研究として、国立歴史民俗博物館「日本荘園データベース」を用いた荘園地プロットが行われた。古代から中世にかけて全国に分布した荘園 5306 件を抽出・分類することで、古代郷に加え、中世に至る土地開発と集落形成の連続性を検討する研究基盤が形成されつつある。

### 1-2-4.国外における〈千年村〉(歴史的生存環境<sup>7</sup>) 候補地の発見(2018～)

さらに、日本国外を含めた俯瞰的な視座から国内〈千年村〉の位置付けを捉える試みも実施している。中国雲南少数民族村落調査(2018-2019)は国外において〈千年村〉調査を展開した最初の事例である。同調査ではプロットの新規作成は行わなかったものの、コロナ禍の影響によって中止されるまで、計2回の調査を通じて国内〈千年村〉との比較を行った。



図 1-2 雲南調査での学生ポスターセッション  
(2018/11/12 甲斐撮影)

また 2024 年度からは、漢字文化圏であり国内の〈千年村〉候補地の抽出方法を応用可能である「東アジア」地域へ研究・調査地域を展開し、人間集団の生存と環境との関係をより広域的・普遍的に捉えることを試みている。その端緒として、2024 年度より韓国において『三国史記』プロット<sup>8</sup>を利用した調査を実施している。日本の隣に位置し、地理・文化などの側面から日本との反証的な分析が可能である韓国を皮切りとし、今後も「東アジア」諸地域に研究を展開していく予定である。

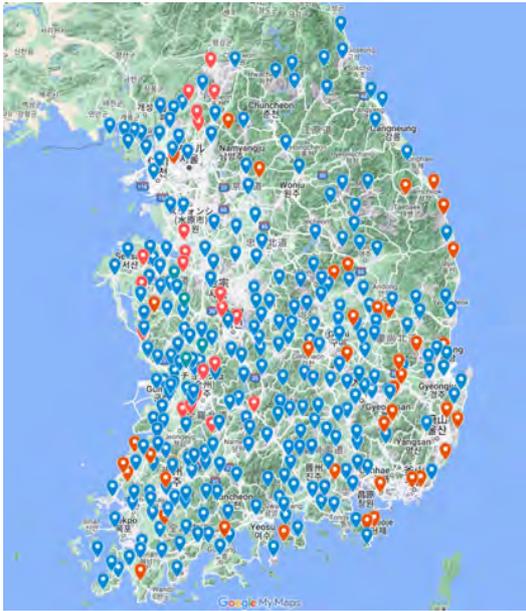


図 1-3 『三国史記』「地理志」による  
朝鮮古代地名プロット  
(犬伏の論文(注 7 参考)をもとに、早稲田大学中谷礼仁  
研究室作成)

#### 1-2-5.ハザードマップをレイヤーに追加

これまで千年村の基礎研究に沿って紹介を行った。以降はプロジェクト全体のプロットを用いた活動について述べてみたい。2024 年度には、千年村プロジェクトのホームページにてハザードマップのレイヤーが追加され、現代における環境アセスメントが千年村の立地と直接的にどう関係しているかを一覧することができるようになった<sup>9</sup>。

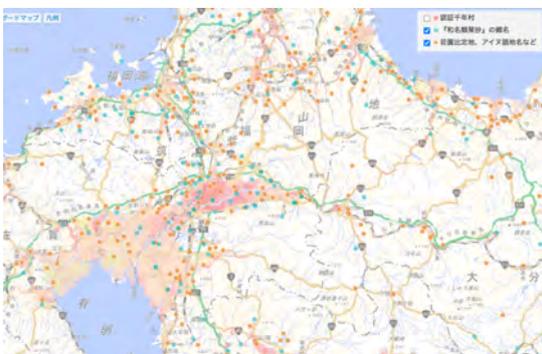


図 1-4 千年村 HP より、プロットに洪水浸水想定地域を重ねる(佐賀県)

#### 1-3.登録千年村制度の開始

2024 年度より、千年村を「みつける」以外の「まなぶ」「つづける」「たたえる」にも関わる包括的な活動フレームの展開として、「登録千年村」を発足した<sup>10</sup>。地域史にかかわる客観的事実と千年村評価基準による判断を必要としている点は認証千年村と同じであるが、申請者が地域に深く関係していることが必要だった限定を外し、誰でも申請可能となった。



図 1-5 登録千年村申請用 google form

こうした新しい千年村プロジェクトのフレームワークが提示・更新され続けることで、「みつける」の後続にあたる「まなぶ」「つづける」「たたえる」領域の活動が活発になることを期待する。

- 1.本報告書で調査対象に選定した地域は、千年村研究で 2011 年に検討された『和名類聚抄』を活用した千年村プロットと 2020 年の「荘園データベース」を活用した荘園プロットによって発見された地域の両方が含まれている。この両プロットについての概要を述べるため、本章では過去の報告書による文言を参照しながら千年村研究の歴史を整理し、説明することを試みたい。
- 2.中谷礼仁・庄子幸佑・鈴木明世「〈千年村〉研究その 1：平安期文献『和名類聚抄』の記載郷名の比定地研究を用いた〈千年村〉候補地の抽出方法と立地特性に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第 87 巻 791 号 pp.221-231,2022 年
- 3.鈴木明世『北海道 1300 年間における空間構成の変化と連続性

# 千年村プロジェクト 2025年度 佐渡島疾走調査 第1章 地図プロット編

集落の発見方法ー阿仁川流域における集落分析を一例にー』早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室 2021年度修士論文

5.木村真拓『古琉球と現代沖縄の空間的連続性をもつ集落地域に関する研究ー『おもろさうし』による古地名の現在地比定を通してー』早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室 2015年度卒業論文

6.中谷礼仁「『日本荘園データベース』の比定地をもとにした国内荘園地プロットの紹介と古代郷プロットとの比較分析の一端ー千年村研究その11ー」、『2021年度大会学術講演梗概集』、p527-528、2021年参照。特に本報告書で対象地域として選定されている「荘園プロット」について細かく見るため、その作成プロセスについて以下に本文からの引用を載せる。

まず、大字単位で荘園の位置を地図に示すという目標のために、「日本荘園データベース」に記載された情報のうち比定情報を抽出し、プロットの種類を以下のように分類した。

00：参考市町村+明治村字名が現在の住所に一致

01：参考市町村名を変更（合併による名称変更）

02：参考市町村名を変更（隣接する市町村）

03：明治村字名を一部変更（同音異字等）

04：明治村字名を一部変更（上下/東西南北/町村宿等）

05：明治村字名を一部変更（合併等による固有名詞付与）

06：地名辞典で大字レベルに比定

10：施設名等に明治村字名が残る

20：明治村字名・大字レベルで比定されていない

21：比定の説が複数ある

22：比定が推測の域を出ない

**本プロジェクトでは、上記の分類のうち 00～10、現在の大字（または大字単位以下の地域施設名）に関連付けられるものを大字単位での比定可能地とし、プロットを行っている。**

7. 2024年度より展開した東アジアにおける調査においては、〈千年村〉を「歴史的生存環境」と新しく名付け、「長期に持続する（歴史的）」「人間の生産・経済・生活（生存）」を「自然や地質（環境）」という観点で分析することを明示している。

8. 朝鮮三国時代の古典『三国史記』巻37「地理志」（高麗において金富軾らが1145年に編纂。古代地名が記載。）を用いて2024年度に中谷礼仁研究室の韓国調査チームが作成したプロットのこと。朝鮮半島において339の候補地を抽出することに成功した。（『韓国における歴史的生存環境の発見に関する基礎研究 - 『三国史記』「地理志」記載地名の現在地比定の分析を元に -』、碓井颯、早稲田大学中谷礼仁研究室修士論文、2024年）を参照のこと。

9.千年村プロジェクト「千年村をみつける」<http://mille-vill.org/>

10.千年村プロジェクト「登録千年村」<http://mille-vill.org/>

## 第2章 調査および報告書の目的

### 2-1.調査の目的

本報告書は2025年10月11日から13日に行われた佐渡島疾走調査にて得られた知見および考察の報告を目的としている。

### 2-2.報告書の位置づけ

本研究は今後の集落調査の存続のための評価手法の開発を目的としている。千年を超えて生産と生活が持続していると考えられる地域を千年村候補地とし、持続要因に関する調査を行う。そしてその地域が良好な生存条件を保っていることを確認した場合には、その地域を〈千年村〉として認証する。〈千年村〉は日本の国土の土地利用と景観の基層をなしてきたと考えられ、これらの正当な評価手法が必要である。そのため以下の3つの段階を達成していく。

(1)平安期文献『和名類聚抄』をはじめとする諸史料に記載された比定地によりプロットした全国の千年村候補地のデータベースの作成および公開

(2)千年村候補地を「環境」「地域経営」「交通」「集落構造」の視点から調査し、それらの関係性および持続要因を解明

(3)各地域の存続に関する普遍的要因と歴史的要因を元にした〈千年村〉の認証基準と存続手法の開発

上記の実現のためには、より多くの千年村候補地を網羅的に調査することが必要であり、本報告書で報告する佐渡島疾走調査はそのひとつとして位置づけられる。

### 2-3.調査の基本概要

【調査日程】2025年10月11日(土)～13日(月)(2泊3日)

【参加者】

■千年村プロジェクト・メンバー(氏名五十音順)

金盛晋也

川井操(滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科)

木下剛(千葉大学大学院 園芸学研究科)

小林千尋

近藤真

田熊隆樹

永井朝樹

中谷礼仁(早稲田大学 創造理工学部 建築学科)

林憲吾(東京大学 生産技術研究所)

福島加津也(東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科)

■オブザーバー

稲田玲奈

■学生(所属大学五十音順)

慶應義塾大学(井庭、兼井、木村、富樫、中村、萩原、原田、三宅、渡邊)

滋賀県立大学(上紺屋)

千葉大学(岩本、齋藤、佐藤、成田)

東京大学(橋口、堀米)

東京都市大学(池田、大谷、倉田、嶋田、杉浦、鈴木、珍田、萩谷、深澤、宮地、森部、安江)

立正大学(奥村)

早稲田大学(飯原、碓氷、金、笹島、長山)

【調査地域】佐渡島中央および南部（都道府県・市町村：新潟県佐渡市）  
詳細は第三章 各村報告にて後述する。



図 2-1 2025年度佐渡島疾走調査 該当集落

千年村プロジェクト 2025年度 佐渡島疾走調査  
第2章 調査および報告書の目的

【調査行程】2025年10月11日(土)～13日(月)(2泊3日)

表 2-1 2025年度佐渡島疾走調査 予定スケジュール

	日程 Schedule	詳細 Details
<b>10/11(土)</b>		
	9:04~11:29 新幹線移動(新宿発、新潟到着)	
	11:35~11:52 バス移動(新潟駅発、佐渡汽船着)	
	12:00 新潟港集合	※ <b>学生代表は一本早めに集合</b> 。各代表と遅刻者の有無の連絡。
	12:30 ときわ丸乗船	12:35 ときわ丸出発
	15:05 両津港着	
	15:15 両津港ターミナル	※ <b>学生代表・メインドライバーのみ、レンタカー一屋集合</b> 、レンタカー手続き。
	15:15~15:30 班合流	学生代表・メインドライバーは手続き終了後車をターミナルのロータリーに移動、班合流。事前に連絡担当が班をまとめておき、車がターミナルに来たら順次乗り込み調査開始。
	15:30~18:30 疾走調査	01~03のうち2つの郷を実見する。
	18:30 旅館着	ふれあいハウス 潮津の里
	19:00~ 夕食	
	自由時間	
<b>10/12(日)</b>		
	7:00 朝食	
	8:30 宿出発	
	9:00~16:30 疾走調査	04~07のうち3つを実見する。 宿根木・佐渡金山史跡・棚田・能舞台などの見学も班にて検討。
	16:30 旅館着 <b>※発表班のみ</b>	ふれあいハウス 潮津の里
	休憩	
	16:30~17:00	※発表班のみ16:50~会場集合、設営
	17:00~18:00 ポスターセッション準備	1時間の準備 <b>※発表班のみ</b>
	17:30 旅館着 <b>※発表班以外</b>	ふれあいハウス 潮津の里
	18:00~19:00 夕食	
	19:00~20:10 ポスターセッション	各班10分*7
	20:10~20:30 ポスターセッションまとめ	まとめ20分
	20:30~20:40 撤収作業	10分
	自由時間	
<b>10/13(月)</b>		
	7:00 朝食	
	8:30 宿出発	
	9:00~14:00 疾走調査	08~10のうち2つを実見する。 佐渡金山史跡・棚田・能舞台などの見学も班にて検討。
	14:00~14:15 レンタカー返却 <b>※全班</b>	担当者がレンタカー屋に残り、領収書発行・精算作業
	14:15~14:30 会場集合、設営	
	14:30~15:30 ポスターセッション準備	1時間の準備 <b>※発表班のみ</b>
	15:30~15:45 撤収作業	15分
	15:45~15:50 両津港へ移動	
	16:00 ときわ丸乗船	16:05 ときわ丸出発
	16:00~16:10 会場集合、設営	乗船後すぐに会場の確保
	16:10~16:40 ポスターセッション	各班10分*3
	16:40~16:50 ポスターセッションまとめ	10分
	16:50~17:15 1日目2日目3日目振り返り	25分(大人メンバーひと言11名*1分)
	17:15~17:30 撤収作業	15分
	18:35 新潟港着	
	18:43~18:56 バス移動(佐渡汽船発、新潟到着)	
	19:42~22:21 新幹線移動(新潟駅、新宿着)	

## 第3章 2025 年度佐渡島地疾走調査 各村の報告

第3章では2025年度佐渡島地疾走調査において  
悉皆的に調査を行った12村の概略を以下の5つの視点から示す。なお雑太郡雑太郷と竹田  
郷、羽茂郡菅生郷と星越郷はそれぞれ隣接関係にあるため、一体的に扱い報告する。

- 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報
- 2) 実見によって得られた客観的情報(環境・地域経営・交通・集落構造等)
- 3) 考察
- 4) 集落を象徴する風景と名前
- 5) 断面ダイアグラム

### 【対象集落】

- 1 賀茂郡賀茂郷/新潟県佐渡市加茂歌代・潟端・秋津・横山・長江・夷
- 2 加茂郡久知郷/新潟県佐渡市久知河内・下久知
- 3 雑太郡雑太郷・竹田郷/新潟県佐渡市竹田・真野
- 4 雑太郡岡郷/新潟県佐渡市吉岡
- 5 羽茂郡大目郷/新潟県佐渡市吉岡真野
- 6 羽茂郡菅生郷・星越郷/新潟県佐渡市羽茂町羽茂本郷
- 7 羽茂郡駄大郷/新潟県佐渡市多田
- 8 雑太郡八田郷/新潟県佐渡市畑野町畑野
- 9 賀茂郡殖栗郷/新潟県佐渡市栗野江
- 10 賀茂郡大野郷/新潟県佐渡市新穂大野

かもぐん かもごう にいがたけん さどし かもうたしろ かたばた あきつ よこやま ながえ えびす

01 賀茂郡賀茂郷 / 新潟県佐渡市加茂歌代・潟端・秋津・横山・長江・夷 担当：萩原世（慶應大学）

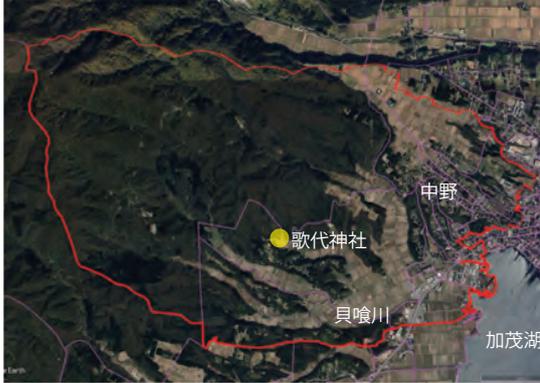


図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earth Proより



図2 土地条件図(筆者加筆) Google Earth Proより



図3 歌代神社の鳥居(撮影:中谷)



図4 清水を祀った祠(撮影:中谷)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

『新版 角川日本地名大辞典』によると、賀茂郷は平安期に見える郷名で、「和名抄」佐渡国加茂郡五郷の1つ。郷域は加茂湖の北半を囲む加茂歌代・潟端・秋津・横山・長江・夷とされる。この域内の加茂歌代・長江に賀茂郡衙が比定される。

貝喰川の流域には広大な水田が広がっている一方で、郷域内の北部である加茂歌代中野周辺には住宅が多く見られる。

2) 実見によって得られた客観的情報

本調査では主に歌代神社の周辺を歩いたため、その地域について報告する(図3)。

・環境

この地域は谷戸地形となっており、段丘に囲まれた谷底平野には一面に水田が広がっていた。水田は短冊状に区分けされていて整然としていた。短冊状の区画はどれも幅が均一に作られており、条里制水田の名残と考えられる(図5)。段丘には寺社が建てられていて、広大な水田を見渡すのに格好の場所だった。段丘にある寺社の一つである歌代神社には、古より眼病に効果があるとして清水を祀った祠があった(図4)。また神社の奥に進むと水源が見られ、水田への水の繋がりを確認できた。本郷の東端は加茂湖と接しており、湖近くの段丘からは湖が見える場所があった。

・集落構造

歌代神社周辺の地域では「尾根に集落一段丘に寺社と墓地—谷戸に水田」という構造が見られた。今回の調査では水田と集落を行き来する道を確認できなかったため、現在どのように水田が管理されているかは再度調査が必要である。加茂湖近くの地域では、国道沿いに住宅や小規模商店が見られた。加茂湖の岸には、舟屋が連なっている様子を確認できた(図6)。ヒアリングによると、加茂歌代中野周辺の住宅地には、移住してきた人が多く住んでいるようだ。

・地域経営

歌代神社は「歌代神社の由来」という看板によると、神社の創建は1536年以前で、創建当時より昭和のはじめまで「片貝家」が代々務めてきたが、現在は夷にある



図5 谷底平野に広がる水田(撮影:萩原)



図6 加茂湖の岸に連なる舟屋(撮影:萩原)

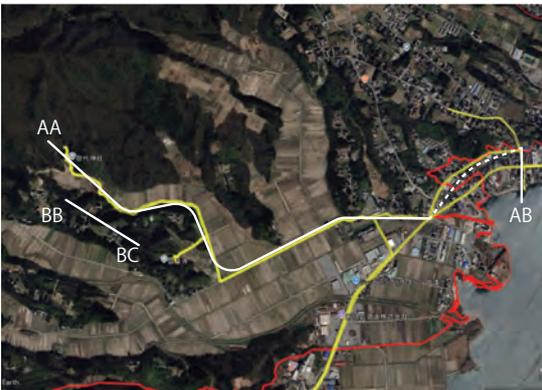


図7 当日のログデータ(筆者加筆) Google Earth Proより

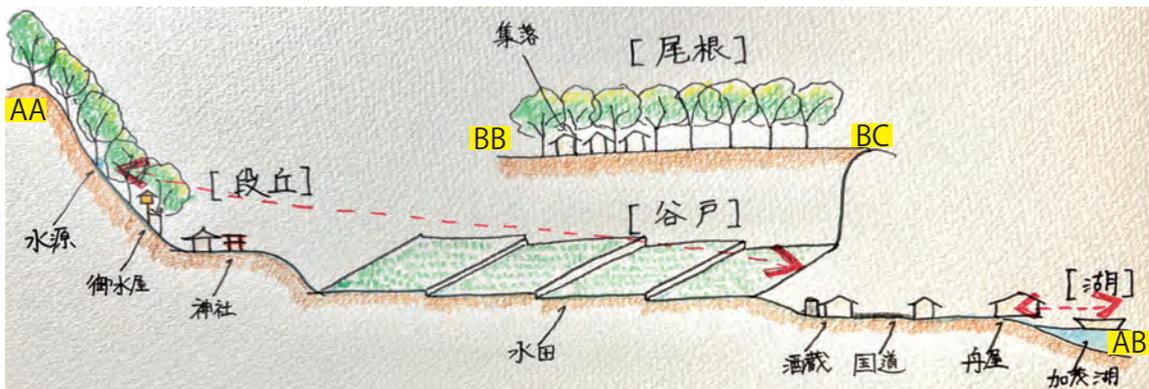


図8 断面ダイアグラム(筆者作成)

諏訪神社の宮司が兼務しているようだ。国道沿いには「天領盃酒造」という酒蔵が見られた。

・交通

この地域の道路は道幅が狭く、特に神社へ向かう道は自動車1台がギリギリ通れる幅だった。また水田の区画に沿って道が形成されていたため、直線的な道が多かった。

3) 考察

この地域は水に支えられた産業が古くから続いている地域だと言える。

谷戸においては水利が良い地形を活かして、農業や酒造りが続いている。産業が続いてきた背景として、条里制水田の区画が残りそれに沿って道ができていることや、水害に備えて尾根に集落が形成されているように構造を受け継いでいることと、神社で水を祀り水を大切にすることを意識を受け継いできたことが挙げられる。また加茂湖周辺においては、舟屋が残っていることからわかるように、加茂湖という水に支えられてきた産業が続いている。

4) 集落を象徴する風景と名前

「水の流れに身をまかせて」

祠・谷戸・湖というように、水との関わりを密接に感じる地域であった。

参考文献

角川日本地名大辞典編纂委員会編、『新版 角川日本地名大辞典』、角川書店、1991年。

かもぐん くじごう にいがたけん さどし  
 02 加茂郡久知郷 / 新潟県佐渡市

担当：倉田萌花（東京都市大学）  
 渡邊芽（慶應大学）  
 長山飛雄（早稲田大学）



図1 比定の大字領域

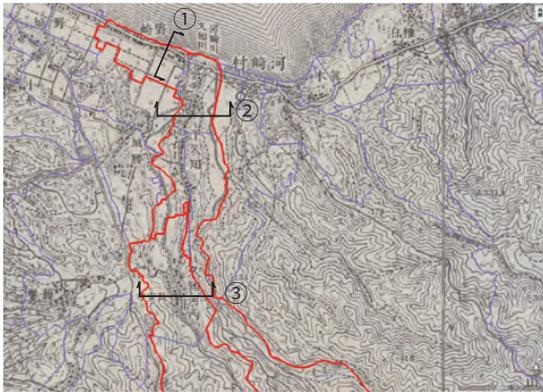


図2 旧版地図(断面線加筆) 五万分一地形図 大正2年測図昭和9年修



図3 地質図 国土地理院より



図4 起伏図 国土地理院より

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

久知郷は鎌倉期～南北朝期に見える郷名(平安期まで久知郷(くちごう))「和名抄」刊本・東急本に久知とある。久知川流域を中心とした郷で、流域は佐渡第二の良田とされていた。久知河内・下久知(現両津市)の地名が残っており、郷の総鎮守といわれる久知八幡宮は現新穂村地内の国見山から遷座したと伝えられている。

集落は古くから海沿い・川沿いに発展し、田の区画がほとんど変化していないことから、古代の水田が残っていると考えられる。台地上には寺院や住宅が立地し、航空写真の比較からは、集落規模の縮小はあるものの配置自体は大きく変わっていないことが確認できる。上流では昭和40～42年の水害を受け、久知川上流部に久知川ダムが建設された。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

久知郷は、海沿いに位置する野崎、そこから台地を上がった先にある下久知、さらにその台地を降り、久知川沿いをさかのぼったところに位置する久知河内から構成される。

野崎は、海沿いの砂州上に連なる集落である。かつては漁村集落であったが、現在は背後の水田で農業も行っており、海—居住地—水田が、住居を介して一体につながる空間構成となっている。下久知は、舌状台地上に立地する集落である。台地の両側には久知川と河崎川が流れ、その川沿いに水田が広がる。人々は台地から降りて農業を営んでいる。

久知河内は、谷あいの久知川沿いに連なる集落である。耕地は狭く、集落景観は囲繞性が強い。

・地域経営

久知郷の住民へのヒアリング調査より、野崎ではかつて漁業と農業の複合経営が行われてきたが、現在では生業の中心は農業に移行しているとの回答が得られた。さらに近年は国による圃場整備事業の実施が予定されており、今後も農業への依存度が一層高まることが示唆される。

下久知および久知河内では、高台に墓地が立地し、久知八幡宮・白山神社・長安寺などの社寺が、信仰と地域共同体の拠点として機能している。とりわけ久知八幡宮の祭礼神事においては、とりわけ久知八幡宮の祭礼神事においては、野崎から「刀刀」、下久知から「鬼太鼓」、城腰から「花笠踊」の伝統芸能が奉納されている。このことから城腰も久知郷に含まれることが明らかである。

・交通

野崎を貫く生活道路は、古くから利用されてきた道である。この道は、佐渡をほぼ一周する国道45号線(佐渡一周線)よりもわずかに内陸側を通っている。国道45号線の海岸線から内陸へ分岐し、県道319号線を上っていくと下久知に至る。県道319号線および久知川上流のダムへと接続する一連の道路は、比較的新しく整備されたものである。これに対し、古くからの道は水田の縁や集落の内部を縫うように敷設されており、主として農業生産を支えるための動線として形成された経緯がうかがえる。



図5 主要道と集落(20251011渡邊撮影)



図6 野崎地区の住宅(20251011渡邊撮影)



図7 久知八幡宮にあった鳥居(20251011渡邊撮影)



図8 両岸に住居が広がる久知河内(20251012渡邊撮影)

・集落構造

野崎・下久知・久知河内では、三つに分かれた集落構造が見られる。

野崎は海に面し、久知川の水も利用できることから、漁業と農業の双方が営まれ、海と水田の間に家々が並んでいる。

下久知では、久知川と河崎川に沿って水田が開かれ、その間の台地上に集落が形成されている。台地には久知八幡宮や正覚寺が位置し、縁辺部には墓地が設けられている。

久知河内では、久知川の両側に集落があり、その外側を丘陵が取り囲む。集落の下流側には水田が広がり、集落と丘陵の間には白山神社や、831年に開かれた長安寺が所在する。また、上流の山間部では、下久知史詩によれば狩猟も行われていたという。

3)考察

久知郷は、上流の水源から海へと連なる水系を基盤として発展した地域であると考えられる。地域の構造は主に三つの集落に分けて捉えることができる。久知河内は川の両岸に集落が展開し、山を越えた先に水田が広がる構成を持つ。下久知は、久知川と河崎川にはさまれた舌状台地上に位置し、久知八幡宮を中心として集落が形成されている。野崎は、漁村の背後に水田が配置され、農漁兼業の歴史が見られる。このように、各集落は水源の性質や地形条件に違いがあるものの、いずれも水と山という二つの自然特性を組み合わせながら生業を成立させてきた地域であると言える。

4)集落を象徴する風景と名前

「海山川のハッピーセット村」

海山川という三つの自然資源を有効活用している地域

参考文献

角川日本地名大辞典編纂委員会編、『新版 角川日本地名大辞典』. 角川書店, 1991年

「下久知郷土史」編さん委員会、『下久知郷土史』, 佐渡市下久知区, 2017年

①野崎



②下久知



③久知河内

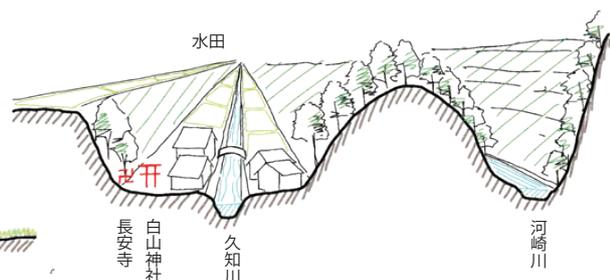


図8 断面ダイアグラム

さわたぐん さわたごう たけだごう にいがたけん さどし たけだ まの  
03 雑太郡雑太郷・竹田郷 / 新潟県佐渡市竹田・真野 担当：齊藤優介（千葉大学）



図1 比定の大字領域（Google Earthより）

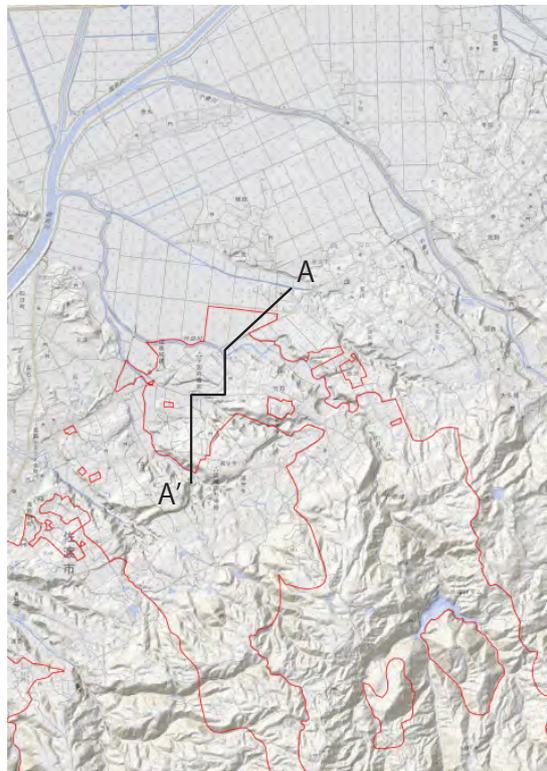


図2 比定の国土地理院地図



図3 国分寺跡付近の邸宅(20251012:齊藤撮影)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

「角川日本地名大辞典」によると、平安期に見える郷名。「和名抄」佐渡国雑太(さわた)郡八郷の1つ。「延喜式」兵部省諸国駅伝馬条に佐渡国三駅の1つとして雑太駅が見え、高山寺本「和名抄」にも駅名がある。現在の佐渡市竹田の中沢田が遺称地とされるが、古代・中世を通じて郷域は未詳。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

今回は本郷と比定される範囲の現佐渡市竹田・真野を訪れた。

#### ・環境

付近に竹田川や高立川が流れ、水利に富み、田畑が広がっており、昔から盛んであったことが窺える。また、下国府遺跡や雑太城跡、五重塔がある妙宣寺など史跡も多く、佐渡の政治などで重要な地域であったと読み取れる。また、佐渡は島流しなどで移り住んできた人たちによって構成されており、本間や菊池などの苗字が多く、一定の偏りがある。この地域は小佐渡山地と国中平野の境界に位置するため、扇状地や舌状台地など集落が繁栄するのに十分な地形が見取れる。竹田川から少し離れた高地に集落が密集しており、田畑は国道65号を越えて国中平野全体に広がっている。平野部一帯には水田が整然と広がり、この地域の農業基盤の豊かさを物語っている。

#### ・集落構造

特筆すべき点は、高地から低地にかけて庭の様子が変化していくことである。国分寺跡付近の十王堂がある集落(い)は、集落全体が木に囲われており、入り口が集落専用の通用門ようになっていた。この集落の特徴として、庭が広く立派な日本庭園のような造りになっており、生垣も低く、外から庭の様子が見えるような開放的な形であった。手入れの行き届いた庭からは、住民の生活水準の高さが窺える。聞き込み調査によれば、庭の手入れは住民自身が行っているとのことであった。集落(い)から少し下った妙宣寺と同じ標高の集落(ろ)では、放棄された家屋が散見された。庭の広さ



図4 国分寺跡付近集落入り口(20251012:齊藤撮影)



図5 高い生垣と茅葺き屋根家屋(20251012:井庭撮影)



図6 大膳神社の能舞台

は先ほどの集落(い)とあまり変わらないが、生垣が高くなり、外からは見えないような閉鎖的な形になっていた。

また、この集落には茅葺き屋根の家屋も残されており、これは大膳神社の能舞台にも見られる。伝統的な建築様式を今に伝えている。

集落(ろ)からさらに下がった字フレーム外の微高地の集落(は)は、低地見られる普遍的な集落であった。一つ一つの家屋は高地の集落より小さく、庭も小さくなっていった。また、生垣ではなくブロック塀で庭を囲み、外からは見えないようになっていた。農業に専念するため、家屋や庭の管理は必要最小限にとどめ、実用本位の生活を営んでいる。

### 3)考察

聖武天皇の詔によって建てられた国分寺跡は現在木々が生い茂っており、視界が遮られているが、当時は集落を一望できたと考えられる。そのため、豪族などの身分の高い者がその周辺に居住していたと考えられる。庭が広いということは手入れの時間的余裕があり、農業への依存度が低かったことを示唆している。一方、低地では庭が小さく、農業を主な収入源としていたと推察される。

### 4)集落を象徴する風景と名前

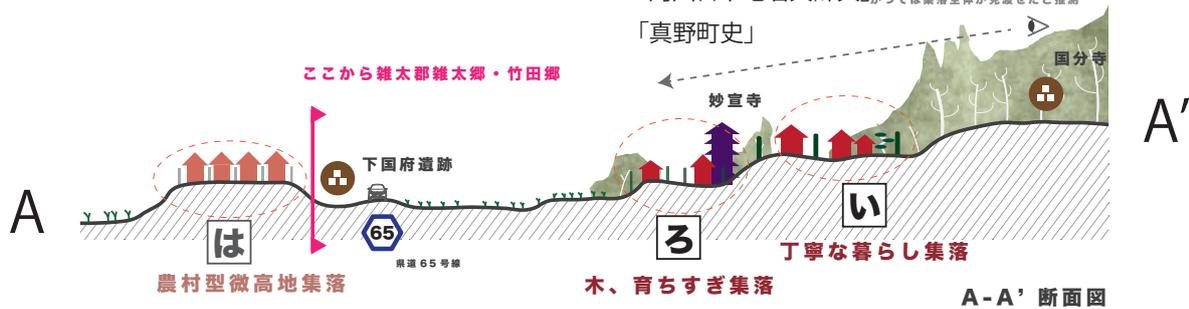
「松竹米の村」

集落(い)は庭に松が植えられ、集落(ろ)は放棄された民家が散見され、竹が生い茂り、集落(は)は、米を主体とした暮らしが営まれている。このように標高によって営みの仕方が変わり、庭の形態も変わっていく。

### 参考文献

「角川日本地名大辞典」かつては集落全体が見渡せたと推測

「真野町史」



さわたくん おかごう にいがたけん さどし よしおか

## 04 雑太郡岡郷 / 新潟県佐渡市 吉岡

担当：大谷祐貴（東京都市大学）



図1 比定の大字領域(但し、詳細に領域を確定できない)



図2 土地条件図 国土地理院より



図3 1910年代 古地図 国土地理院より



図4 田園風景と防風林と民家(20251012:大谷撮影)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

『日本地理志料』によると、「岡」という地に関して次のような記述がある。「岡[ ](という地名について) 考えてみますと、(この項目は)高山寺本(という写本)には記載がありません。萩野氏は次のようにおっしゃっています。「和銅年間(708～715年)に制度ができ、地名には必ず(好字)二文字を用いることになった。この『岡』というのは、本来二文字であるべきところの、その一文字が抜け落ちているのである(=脱字である)」と。そこで私が考えますに、「吉岡」という地名が、鎌倉時代以降の古文書にちこち見られます。現在も「吉岡村」という場所があります。おそらくは、その場所のことでしょう。この「吉岡」を除くと、他には「飯岡」や「清土岡」などがありますが、それらは地理的な位置関係が(記述と)合致しません。後世の賢明な方に、この訂正(正しい考証)を委ねたいと思います。」(筆者現代語訳)

この文献は、脱字があったと仮定し、現在の地名や鎌倉時代の文書と照らし合わせた結果、「岡」はおそらく「吉岡」のことであろうと推測していますが、断定は避け、最終的な判断は後世の研究者に託している。このような背景から、『和名類聚抄』などに記載のある「岡」郷などの範囲を指すのかの比定が困難になっていると推測される。よって、本稿では、新潟県佐渡市吉岡の一部を実見した内容について報告する。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

上述の通り、本稿では図1の赤色の点線で示した範囲を実見した内容について記す。

#### ・環境

小川内川や真野川が南東の小佐渡山地からの土砂を北西の海岸に向けて運び堆積した海岸平野が広がる。郷の西側の海岸沿いには国道が通り、その周辺は商店街が広がっているが、一段高くなっている郷内は、田んぼが拡がり民家が散在している。また、民家の近くにはため池が多く見られた。その理由としては、郷が高台に位置しており、その下に川が流れていることから、ため池で農業用水や生活用水を賄っていたことが推察される。さらに、後述するが、西側からの海風の対策から、防風林・防砂林と見られる木々が民家に隣接するかたちで散見された。



図5 民家に隣接するため池(20251012:大谷撮影)



図6 郷内によく見られるはざ小屋(20251012:大谷撮影)

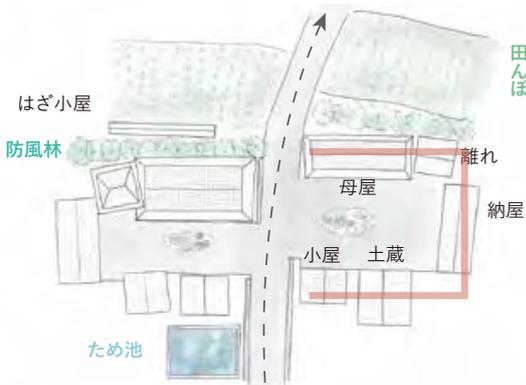


図7 民家ルーフトラン

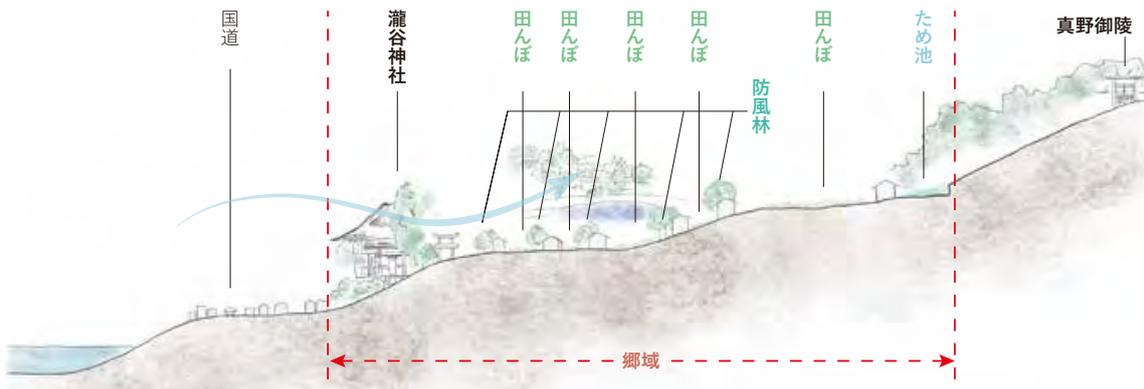


図8 断面ダイアグラム

### ・集落構造

南東の山側から北西の海側に向かって道路が複数伸びており、それを横に繋ぐ形で交通網が形成されている。田畑は耕地整理法によって区画が整理されているものが大半だが、一部は道路に沿った不定形のものもあった。南東の山中には、承久の乱の際に配流された順徳上皇を奉祀している「真野御陵」があることと、民家には必ずと言っていいほど納屋や蔵、池のある庭など生活レベルが高いことが伺えることから、天皇家と何らかの繋がり、例えば、岡郷の人間が農作物を献上していたなどがあるのではないかと推察する。

図7に示したように民家単位で構造を見ると、海の方角に向かう道路に面しており、母屋が海側に建ちその側に防雨林が立ち並ぶ。離れ、納屋、土蔵、小屋がコの字型に建ち並び、中心に庭がある。また、小さな菜園を持ち合わせている民家が多く散見された。また、田んぼには瓦屋根が乗っている「はざ小屋」が多く見られ、稲穂を干す際に使う「はざ」が納められていた。

### 3)考察

岡郷は、川に挟まれながらも高台に位置し、海のある西側からの海風に晒されるという自然環境に対し、集落構造やため池、民家の配置や防風林といった自然環境に合わせた工夫が多く見られた。自然と上手く付き合っていく術を長い年月をかけ育てていることが分かった。

### 4)集落を象徴する風景と名前

「風と水が生む距離感

#### 参考文献

- ・村岡樗齋 著 『日本地理志料』 東洋堂 明治35年
- ・国土交通省 国土地理院基盤地図情報 <https://service.gsi.go.jp/kiban/>

05 羽茂郡 大目郷 / 新潟県 佐渡市 吉岡 真野

はもちぐん おおめごう にいがたけん さどし よしおか まの

杉浦康晟(都市大) / 原田馨子(SFC)  
 宮地愛美(都市大) / 飯原彩絵(早稲田)



図1 比定の大字領域 (加筆:宮地) google earth proより



図2 吉岡付近の古地図(1913年)

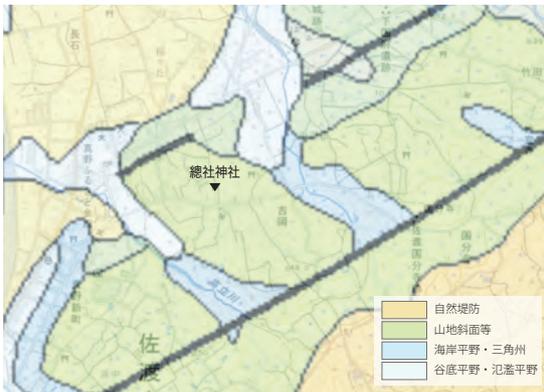


図3 吉岡付近の地質図



図4 名古屋から移転した住宅 (撮影:宮地)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

羽茂郡大目郷はかつて佐渡国に存在した古地名である。和名類聚抄によると、佐渡国羽茂郡九郷のひとつであり、「於保女 (おほめ)」として記録が残されている。延喜式神名帳に記された大目神社が現在の真野地区吉岡付近にあったことから、吉岡付近に比定されている。

この地域は佐渡島の南部に連なる小佐渡山地の北西端に位置し、国中平野と真野湾へ繋がる結節点となる場所である。現在の「吉岡」「真野」付近は各大字の中に異なる大字が小さな区画で飛地として存在しており、複雑に混ざり合っている。また川沿いの低地と山裾の段丘からなる地域だが、低地にも段丘上にも寺社が存在していること、航空写真から読み取れる住宅の分布などから、段丘の上下は異なる集落だと推定される。低地では住宅が密集しており、段丘上では農作地と共に住宅が点在する様子を航空写真で確認した。(宮地)

### 2) 実見によって得られた客観的情報

今回は図1に記載されている吉岡付近から「總社神社」付近へ、段丘を低地から斜面側へ分断するように移動し調査を行った。

#### ・環境

吉岡では、谷底平野に山地斜面からの湧水を利用する棚田地帯が展開し、その下へ向かって二段の自然堤防が形成されている。これら自然堤防上の微高地と、それに続く海岸平野の低位地に居住域が分布している。

#### ・地域経営

ヒアリングによると、かつては集落周辺の棚田を12~13軒の農家で共同管理していたが、現在では空き家も多く、管理する農家の数は6~7軒に減少している。さらに、毎年4月15日には祭りが催され、鬼が各住居を巡る伝統的な儀礼も行われている。

#### ・集落構造

吉岡の大字領域は、一部が空洞化した不整形な形態を呈している。これは、かつて海岸平野の低位地に居住していた家々が水害を契機に自然堤防上の微高地へ移動した際に、本家の移転だけでなく、大字(名古屋)そのものの区画も移動したために生じたものであることがヒアリング調査から明らかになった。(飯原)



図5 總社神社 (撮影:杉浦)



図6 下段の町営住宅 (撮影:原田)



図7 上段の水田 (撮影:宮地)

### 3)考察

今回の吉岡真野（大目郷）の調査から、段丘地形が居住・農業・祭祀の空間構成を大きく規定してきたことが明らかとなった。谷底から斜面へ続く棚田帯や、微高地に祀られる神社は、自然地形に適応した暮らしの痕跡である。一方、空き家の増加や沿岸部から高台への居住移動は、歴史的な集落構造の変容を示している。農家数の減少により棚田の維持が困難になっていることも、段丘利用の継続性を揺るがす要因である。こうした変化を踏まえると、地形と人間の関係をどのように更新していくかが、今後の集落の持続性を考える上で重要な課題となるだろう。(杉浦)

### 4)集落を象徴する風景と名前

#### 「段丘上下の使い分け」

この集落では、段丘の上段と下段の異なる利用が特徴的だった。下段に位置する集落では、町営住宅がつくられるなど、住居が並んでいる風景が見られた(図6)。一方段丘の上段では、段丘の高いところに住宅があり、低地に水田、山裾に山林が位置していた(図7)。

段丘の下段では傾斜がゆるやかなため人が住む場所に、上段の急傾斜では上段に宅地、低地に棚田という農村でよく見られる集落構造が読み取れる。このような段丘の微地形を生かした土地の使い分けから、『段丘上下の使い分け』と名づけた。(原田)

#### 参考文献

角川日本地名大辞典編纂委員会編、『新版 角川日本地名大辞典』. 角川書店, 1991年.



図8 断面ダイアグラム (作成:原田)

はもちぐん すどうごう ほしこしごう にいがたけん さどし はもちちょう はもちほんごう

担当：笹島里紗子（早稲田大学）  
兼井佑大（SFC）  
安江将輝（東京都市大学）

## 06 羽茂郡菅生郷・星越郷 / 新潟県佐渡市羽茂町羽茂本郷



図1 比定の大字領域(筆者加筆)



図2 五万分一地形圖大正2年測図(筆者加筆)



図3 星越郷の水田とロードサイド(20251012近藤撮影)



図4 宮本常一の詩の石碑(20251012林撮影)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

本地域は縄文海進後の沖積平野を基盤に発展した。古墳時代は微高地にあった集落が、条里制施行後は周辺高地へ移動したとされる(『羽茂町誌』)。同誌によれば、菅生郷は農村的、星越郷は町場の特性を持つ。古地図上の傾斜地に見られる果樹園は後述する、名産「おけさ柿」に関連したものだと考えられる。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

今回の調査では、菅生郷と星越郷として比定された現羽茂本郷(図1)を訪れた。また、星越郷では商店街の和菓子屋の方にヒアリングを行った。

#### ・環境

菅生郷は、羽茂川西岸の低地と台地の境界部に位置する。平坦地の水田に対し、集落は傾斜地にあり、自家用農地保持と不整形な敷地が観察された。

星越郷は羽茂川の南北にまたがり、自然堤防や後背湿地からなる地形で、微高地に集落、低湿地に水田が形成されている。また、川の南北で性質が異なり、南部は城下町・宿場町の歴史を持つ商業集落、北部は草刈神社を中心とした農村集落の形態をとどめていた。

また、羽茂地区は在来種「十二が柿」が自生する適地であった。昭和初期、杉田清らが「八珍柿」を導入し、在来種を台木とした計画的な産地化を推進した。当初、傾斜地を利用していたが、戦後には一部の水田からの転換も進み、現在の「おけさ柿」ブランド産地としての地位が確立された。調査中には宮本常一の詩が書かれた石碑(図4)が発見された。

#### ・交通

中世、羽茂本間氏が築いた羽茂城の城下町として、羽茂川水運と旧街道を軸に港町・小木との連携を通じて発展した。近代以降、自動車普及により交通軸は新しい幹線道路へ移行した。現在、新道沿いにはロードサイド型商業施設が集中しており、低平地を店舗用地として賃貸する事例が増えていると和菓子屋の方から伺った。

#### ・地域経営

菅生郷は、平坦地を活かした米作を主たる生業とし、現在も水田中心の農村景観を維持している。対する星越郷は、地形特性を活かした経営の多角化が見られるが草刈神社のお祭りでは両郷が共同していることがヒアリングで分かった。

#### ・集落構造

両郷の集落構造は、地域の軸である羽茂川から山側へ向かう中で様々な土地利用が展開している(図8)。



図5 菅生郷の水田と集落(20251012近藤撮影)



図6 星越郷・柿農家(20251012笹島撮影)

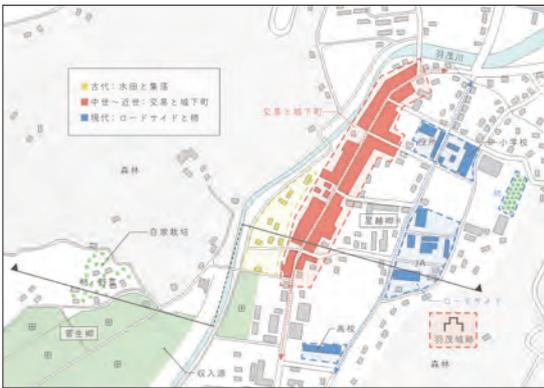


図7 平面ダイアグラム(安江作成)

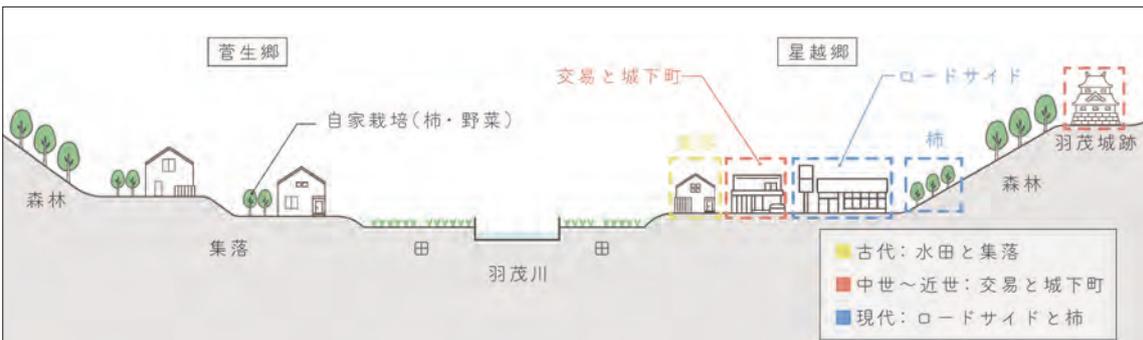


図8 断面ダイアグラム(安江作成)

川に隣接する平地部は共通して水田地帯だが、星越郷ではその隣に集落が、さらにその隣に新しい幹線道路という交通軸が介入し、ロードサイド店舗が並ぶ。その奥の傾斜地は柿農園や森林となり、最上部に羽茂城跡が位置する多層的な構成を持つ。一方、対岸の菅生郷では、水田地帯の奥に斜面林が境界を作り、その傾斜地に集落が形成されている(図8)。

### 3)考察

以上の調査から、菅生郷と星越郷が時代を超えて土地を利用し、生きながらえてきた姿が浮かび上がる。両郷とも、羽茂川が形成した微地形を基盤に、古代より水田と共にあった点は共通する。

星越郷は、中世の城下町、近世の宿場町、そして現代のロードサイド商業地と、時代に応じて姿を変え続けてきた。交通軸の移動に伴い、水田を商業地へ転用し、傾斜地を柿畑に変えるなど、土地利用を柔軟に書き換えることで生業を多角化させてきたと言える(図7)。

菅生郷は、曖昧な地割や景観から、古代の風景が残存するように感じられた。これは、丘陵地に位置する集落が、平地のような開発圧力や変化の必要性に晒されなかったためと考えられる。

星越郷の「適応」と菅生郷の「保全」。両郷はそれぞれの地形特性に合致した生存戦略をとることで、対照的な地域の物語を紡いでいるのではないかと。

### 4)集落を象徴する風景と名前

「羽茂川の灯火から柿の灯火へ」

羽茂川の水資源は「灯火」として両郷の発展の起点となった。そして現在、その灯火は台地の斜面を朱色に染めるブランド柿へと受け継がれている。

#### 参考文献

羽茂町史編さん委員会. 羽茂町誌 古代中世の羽茂. 羽茂町, 1989.3

図1: Google Earth. 2023.

図2: 五万分一地形圖大正2年測図

07 羽茂郡駄大郷 / 新潟県佐渡市 多田

担当：上紺屋佑真（滋賀県立大学）



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Earthより



図2 多田の港 1960年8月24日撮影「私の日本地図⑦」より



図3 川沿いに伸びる集落(20251012:上紺屋撮影)



図4 集落背後に広がる農地 (20251012:上紺屋撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

多田は佐渡島南東部の海岸沿い、河内川流域に立地する集落である。地名は、男神と女神が当地で出会い、佐渡で最初の稲作を行ったという伝承に由来し、「逢た」から起こったとされる。<sup>(1)</sup>

多田および北東に位置する松ヶ崎は、かつて本土からの渡り口の一つであり、日蓮上人が佐渡へ配流された際の上陸地と伝えられている。両集落は早くから廻船を保有し、宿根木とともに廻船の村として発展した。(図2) 赤泊・小木が主要な渡津として発達すると、次第に廻船業へ比重を移し、多田では約7艘の廻船が運航されていた。春には生活物資を積んで北海道へ向かって、ニシン粕を持ち帰り肥料として供給し、さらに上方物資を佐渡へ運ぶ航路を担っていた。こうした海運活動のもと、村人の多くは舩子として働き、女性は家事や農業を担う役割分担がみられた。<sup>(2)</sup>

2) 実見によって得られた客観的情報

今回の調査では比定の大字領域の大部分を占める多田、その北東の松ヶ崎、そして多田から西へ進んだ河内を訪れた。(図1)

・環境

多田は河内川沿いの自然堤防上に形成された線状集落であり(図3)、背後に山が迫る地形が特徴。この地形条件は、山側から流れる冷たく清らかな水を利用できる稲作における大きな利点をもたらしている。河口付近の低地では農地としての利用が確認される。(図4)

・地域経営

住民は個人事業主や会社員、農業・漁業従事者からなり、多生業型の地域経営が特徴である。江戸期の漁船保有記録にみられるように、地形条件を活かした産業が発展してきた。また、多田は現代においても、外に開かれた集落として機能し、祭礼に島外の学生を巻き込み、文化継承を開く形で行うことから、地域は開放的で柔軟な共同体運営に支えられているといえる。(図5)

・交通

多田は古代から近現代にかけて、松ヶ崎と機能を分担しながら交通の中心として位置づけられてきた。古代から中世にかけては両者が国の津として佐渡の玄関口を担い、江戸期には北前船の寄港地として機能した。



図5 多田・黒根まつり 獅子頭 (20251012:上紺屋撮影)



図6 鍵穴を模した記号と屋号 (20251012:上紺屋撮影)



図7 河内集落の家屋と蔵 (20251012:上紺屋撮影)

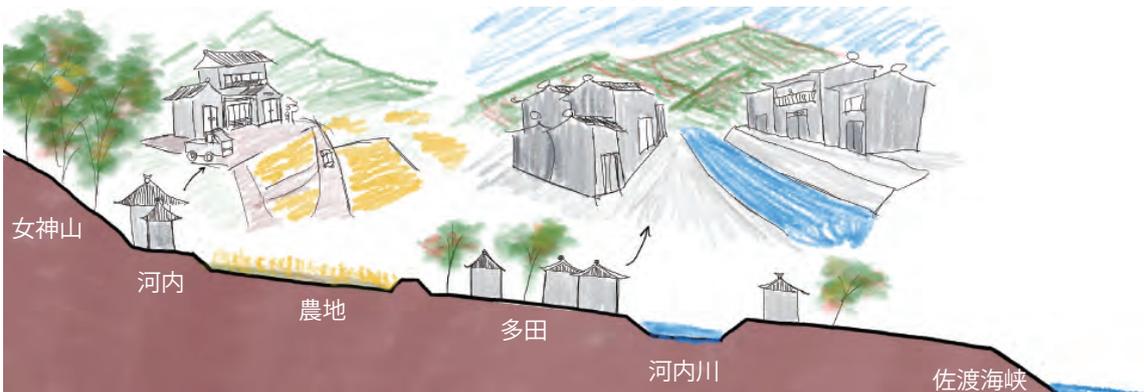


図8 A-A 断面ダイアグラム (成田作成、上紺屋加筆修正)

明治期以降、松ヶ崎が港湾機能を失う一方で、多田には本土との連絡船が就航し、交通拠点としての役割が継続した。こうした港湾機能の変化は、多田が交通環境の変遷に応じて役割を更新してきたことを示している。

#### ・集落構造

多田では、間口から奥に約5~6mの土間が連続し、巡行する獅子舞を受け入れる構成が見られるほか、各家屋には屋号が付され、倉庫の鍵穴を模した図が掲示されている点が特徴的である(図6)。沿岸部の多田では塩害の影響により老朽化した家屋が多く、過度に立派な建築を抑制されてきた可能性があるのに対し、内陸側の河内では、蔵を備えた丁寧な造りの住居や良好に管理された農地が確認された。これらの差異は、河内が塩害の影響を受けにくく、冷涼で良質な水を利用できるなど、農業面で相対的に有利な立地条件にあったことと関係している可能性がある。(図7)

#### 3)考察

本集落は、渡津や廻船、宿場町として外部と関わり続けてきた交通の要衝であったと考えられる。稲作発祥の伝承が残ることから、早期に農耕文化が定着していた可能性があり、現在も農業・漁業が併存する生業構成が維持されている点は特徴的である。こうした複数の生業で支える経営基盤は、時代変化への対応力を高め、集落の持続性に寄与してきたと推察される。また、旅人や物資を受け入れてきた宿場の性格は、集落が常に外部と関係を結びながら展開してきたことを示唆している。

#### 4)集落を象徴する風景と名前

「多生業が支える持続の集落」

参考文献 (1)「角川日本地名大辞典、15 新潟県」(2)宮本常一著「私の日本地図⑦」

08 雑太郡八多郷／新潟県佐渡市畑野

担当：岩本志満（千葉大学B4）



図1 比定の大字領域（Google Mapより）



図2 1961~1969年航空写真（今昔マップより）

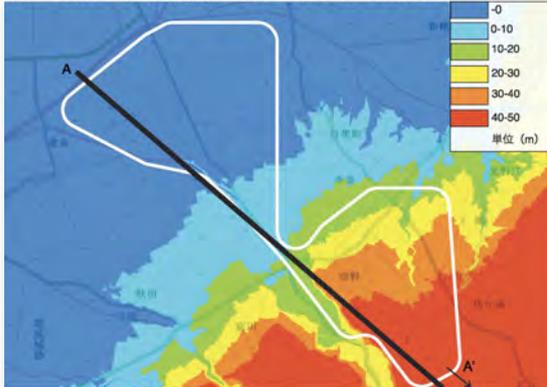


図3 色別標高図（国土地理院より岩本加筆）



図4 下畑の水田と住宅（20251013岩本撮影）

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

江戸期の畑本郷村・畑方村の畑は当郷名の遺称と推定される。なお、佐渡守護所は当初、波多郷内（現在の畑野のうち下畑）に置かれていたとする説がある。（『角川日本地名大辞典』より）

中心がくびれたような形の郷域で、1961~1969年から現在まで、北部は大半が水田で一部集落があり、南部は住宅が密集している。さらに南部は小佐渡の丘陵地となる。郷域西側に小倉川、北側に国府側が流れる。交通としては、南部の集落を東西方向に、県道65号でバス路線でもある両津真野赤泊線が通っているほか、郷域の西側境界線は県道の金井畑野線であり、市役所や病院等がある金井地域と繋がっている。（Google Mapより、図1,2）

2) 実見によって得られた客観的情報

八多郷はおおまかに、北部は下畑、南部は上畑と呼ばれる。

・環境

下畑は平坦地で水田が広がり、下畑中心部分には庭付きの住宅が数十軒集まっている。水田の水源は西側を流れる小倉川だが、この小倉川は上流の小倉ダムが作られる前に氾濫したことがある。（聞き込みより）（図4）

上畑は南側に山林があり傾斜がついており、かつて農業用水確保のために作られたため池や井戸が点在している。（図5）

・地域経営

下畑では広く稲作が行われているが、下畑上畑両方で自家用と見られる比較的小規模な畑作も行われている。上畑の多くの住宅で薪小屋が置かれており、聞き込みした方は庭木の伐採で得られた薪を保管しているそうだが、山林が近いのでかつて林業が営まれていた可能性もある。行政施設や学校、商店は上畑の県道沿いに密集しており、南北に長い郷域ではあるが人流としてはこの県道周辺に集まる。

・交通

南北と東西に主要な県道が通っており島内各方面へのアクセスが良い。郷域のちょうどくびれを横切る県道は、北部の平坦地と南部の微傾斜地の境界線であり商業が発達しているがこの道の歴史は不明。

・集落構造

下畑の住宅は敷地が広く歴史のある家屋が多く、上畑の住宅は昔ながらの住宅のほか、元耕作放棄地に新しい住宅が建てられている。（図7）



図5 郷南部のため池 (20251013岩本撮影)



図6 左：王林寺 右：畑野熊野神社 (20251013 小林・奥野撮影)



図7 郷南部の住宅の様子 左：近年建てられた家 右：昔からの民家 (20251013 小林撮影)

・歴史

下畑と上畑の関係については小倉川の氾濫が関係しており、元々下畑にあった熊野神社と王林寺がより安全な上畑に移動した。(図6) それと同時に住宅も上畑に移動した。(聞き込みより)

3)考察

古代、下畑の寺社周辺に集落が形成されていたが、1700年頃小倉川の氾濫をきっかけに、大地である上畑へ寺社や住宅が移動した。この時の水田主や地主の住宅が現在まで下畑に残っているのではないかと。また、上畑へ移動した住民は小作者として下畑の水田で稲作を行いつつ、台地での農作のため、ため池や井戸を作った。こうした水利施設の権利や造成の経緯にも社寺が関わっているかもしれないが、関連する資料は見つからなかった。そして現在、小倉川の上流にはダムが建設され、下畑の水田ではパイプ灌漑がされている。

この郷を上下に分ける道(現在の県道65号)がどの時期に今のような主要な道路となったのかは、佐渡の鉱業が盛んなときに港への移動経路として整備された、上畑へ人が移動したのちに生活経路として台地上に設置された、など考えられるが時期の想定は難しい。

4)集落を象徴する風景と名前

「ハタと野 ～2つの村と2つの技術～」

北部の下“畑”、南部の上“畑”と、近世と現代に発展した水利技術が特徴的である。

参考文献

- ・角川日本地名大辞典編纂委員会編、『新版 角川日本地名大辞典』,角川書店,1991年
- ・畑野町史編さん委員会、『畑野町史 信仰編』,畑野町,1985年10月

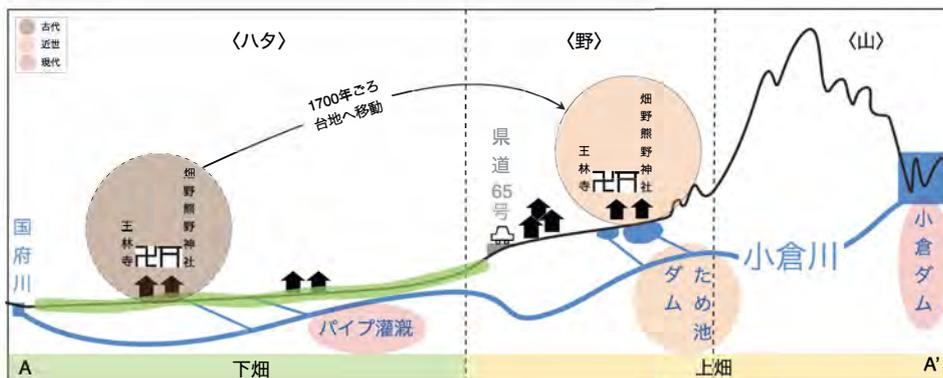


図8 断面ダイアグラム (断面線は図2に記載)

かもぐん えぐりごう にいがたけん さどし くりのえ  
09 賀茂郡 殖栗郷/ 新潟県佐渡市 栗野江 担当：山田梨央(千葉大学)

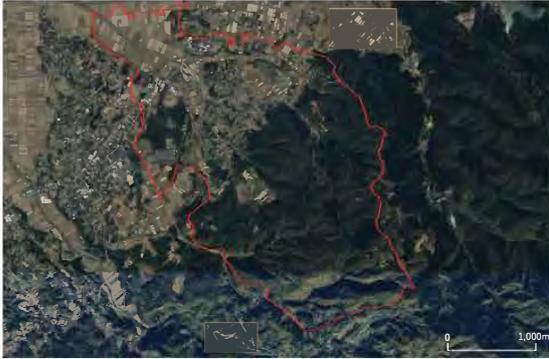


図1比定の大字領域



図2 国土地理院地図(筆者加筆)



図3二段目と三段目の間にある林 (撮影:佐藤)



図4 家屋のそばにみられる柿畑(撮影：佐藤)

1)文献・地図等の資料から得られた情報

殖栗郷は奈良～平安期に見られる郷名で、「和名抄」佐渡国賀茂郡五郷の一つであり、現在の畑野栗野江が遺称地とされる。大字領域(図1)をみると、山際に位置し、南東側のおよそ半分の面積を山林が占めていることが分かる。集落部分は台地による丘陵地形によって構成されており、家屋は塊状に不規則に点在している。郷域内には国府川水系が広がっており、北西の平野部には水田が広がっている。集落の西側に位置する加茂神社(図2★地点)は1109年創建であり、市指定有形文化財に登録されている。

2)疾走調査によって得られた情報

・環境

舌状大地による入り組んだ地形が特徴である。台地の地形は大きく三段に分けられ(図2)、規則的な耕地整備がなされている一段目、河川や地形に沿った形状の水田で構成される二段目、家屋や果樹園、田んぼの位置する三段目と、それぞれの段で異なる土地利用の形態がみられた。各段の境は傾斜が大きく土地利用が困難であるために木々が残っており、これによって下段から上段への視界が遮られ(図3)、隠れ里のような雰囲気醸し出していた。

・地域経営

旧畑野町に唯一の残る能舞台を持つ加茂神社では、毎年8月に地元の能楽クラブ「一葉会」の主催による夜能が開催されている。現在の加茂神社は境内の案内板より永徳元年(1381年)の造営であるとされるが、境内配置に関して、鳥居が拜殿よりも山側に配置されている点が特徴である。また、神社自体の位置も集落からは西に少しはずれた位置にあり、神社と集落の間には木々が立ち並ぶことから、集落からは見えない構成となっている。歴史ある神社で演能といった催しがあるにも関わらず、このような配置となっているのは疑問の残る点である。

・交通

郷域内には新潟県道81号佐渡縦貫線と新潟県道65号両津真野赤泊線が通っており、該当区間は両路線の重複区間となっている。この道路上には、新潟交通佐渡が運行する南線・横宿線・国仲金丸線の各バス路線が走行している。

・集落構造

一段目と二段目の境付近には県道が通り、通り沿いにはコンビニエンスストアや温泉旅館といった比較的新しい建物が建つ一方、三段目は瓦屋根の木造民



図5加茂神社拝殿 (撮影:佐藤)



図6 南東部の高台からみた集落の風景(撮影:堀米)



図7 台地上に位置する家屋の蔵と溜め池(撮影:佐藤)

家が多く建ち、こちらが古くから集落を形成してきたエリアであることが伺える。他の郷と比較して民家同士が密集しておらず、各民家が家の周囲に田んぼや果樹園(柿畑)を所有していることが特徴的であった。これらは台地上に位置しているため、水資源の確保には溜め池が用いられている。

### 3)考察

集落の雰囲気としては非常に静かで、ゆったりとした穏やかな空気が漂う地域である。各家庭は広い土地を田園や柿畑、花畑などに活用しており、時々において必要な作物を栽培し、柔軟な土地利用を行ってきたことが伺えた。それぞれの家庭が大きく立派な家を構え植栽も丁寧に形づくられており、住まいや土地利用からは余裕や自立性、そして安定感が伝わってくる地域である。

### 3)集落を象徴する風景と名前

「なんだかんだのんびり千年村」

水資源の豊かな山際の立地、舌状台地による安定した地盤、稲作の行いやすい台地下の地形といった地理的な要素が、この集落特有の「余裕のある暮らし」を育んできたことが本疾走調査において感じられた。特に、複雑に入り組んだ舌状大地は、家屋同士の適度な距離感や庭先での多様な土地利用の大きな要因となっており、ある種必然的に、千年間続いてきた村であるようにも思われる。暮らしの維持や存続を意識せずとも、気づいたら時間が流れていくようなその様子から、上記のようなタイトルをつけて纏めることとする。

### 参考文献

・さと観光ナビ 佐渡市公式観光情報サイト.加茂神社能舞台. <https://www.visitsado.com/spot/detail0784/>

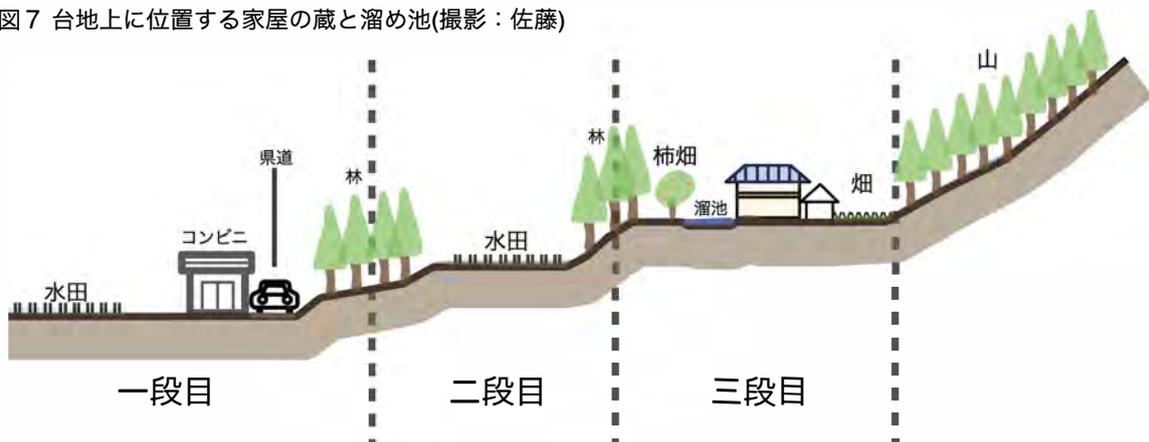


図8 集落の概略断面イメージ

かもくん おおのごう にいがたけん さどし にいぼおおの  
10 賀茂郡大野郷 / 新潟県佐渡市新穂大野

担当：橋口登偉（東京大学）



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより

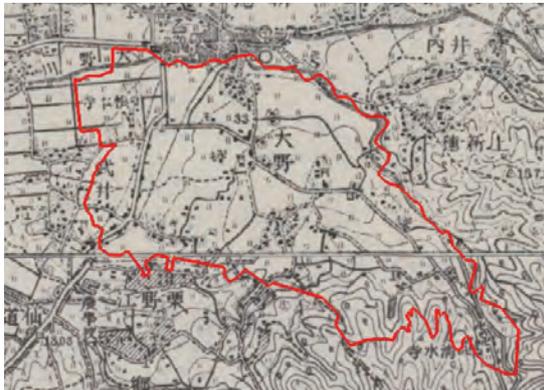


図2 五万分一地形圖大正2年測図

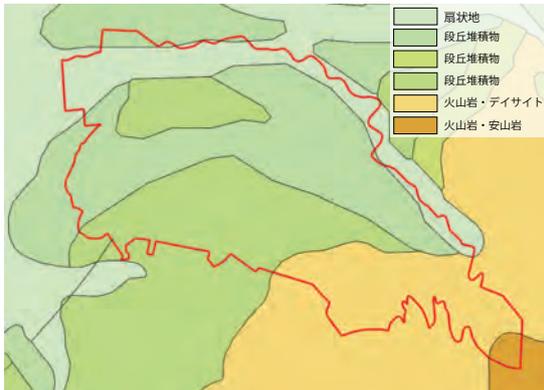


図3 土地条件図 国土地理院より



図4 上大野より望む段丘上の水田風景(筆者撮影)

### 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

大野郷は、現在の佐渡市新穂大野に比定される。地名はなだらかな傾斜地に由来し、小佐渡山地を源流とする大野川が形成した隆起扇状地を基盤とする。扇央から扇端には条里制遺構と思われる整然とした水田が広がる。

歴史的には、大野川沿いの段丘上に縄文・弥生期の遺跡が点在し、古くから定住が見られた。中世には「大野保」として足利尊氏により園城寺へ寄進され、畿内文化が流入した。近世は幕府領として高い石高を誇る「米の村」として発展し、近隣銀山の隆盛に伴い物流も活性化した。水利は「一の堰」「中の堰」等の用水路網が古くから発達し、扇状地開発を支えてきた経緯がある。

### 2) 実見によって得られた客観的情報

#### ・環境

集落は浸水リスクのある低地を避け、微高地や段丘上に立地し、西風を防ぐ防風林が散見された。水環境は、扇頂の清水寺境内に「一の堰」の清冽な流れが見られ、その上部には湧き水も確認された。北西の奥地には江戸期の溜池「無常堂堤」、上流には現代の農業用の「大野川ダム」が存在する。古今の水利システムが重層的に機能し、安定的な水供給を実現している。

また清水寺仁王門前の樹齢約千年の大イチョウは、集落の歴史の深さを象徴している。

#### ・地域経営

地域は上大野、下大野、郷平の小字単位の自治機能が維持されている。宗教施設は、扇頂に808年開基の真言宗・清水寺、扇端に日蓮宗・根本寺等などが位置する。清水寺は境内に用水路が引き込まれ、水利の要衝に位置する。一方、根本寺はかつて「塚原」と呼ばれた死者埋葬の地に建立された歴史的背景を持つ。住民の信仰は単一ではなく多様な寺社が共存しており、特定の宗派による統制よりも、地縁や水利に基づく共同体意識が地域維持の基盤となっていると思われる。

#### ・交通

聞き取り等から、かつて清水寺周辺から山を越え沿岸部の「柿野浦」へ抜ける交易路「清水寺越え」があったとの情報を得た。現在は獣道化しているが、集落の骨格は扇状地の傾斜に沿った古い道筋を踏襲している。



図5 扇頂の清水寺境内を流下する一の堰(筆者撮影)



図6 舟下沖からの西風を防ぐ屋敷林(筆者撮影)



図7 水田地帯に浮かぶ集落(筆者撮影)

### ・集落構造

集落の空間構成は、地質的特性を活かした土地利用形態をとっている。居住地は、大野川沿いの氾濫リスクがある扇状地堆積物を避け、地盤の安定した段丘堆積物上の微高地や山際に形成されている。それを取り囲むように、傾斜地には棚田状の水田が配置されている。これらを繋ぐ要素として、上流から引き込まれた用水路が網の目のように張り巡らされており、地形勾配を利用した灌漑システムが集落全体を覆っている。

### 3)考察

大野郷の集落持続の要因は、地形の巧みな利用と、高度な水利統御システムの確立にあると考えられる。

第一に、氾濫原を避け段丘上に居住し、眼下の水田を管理する立地選定である。第二に、用水路網による広範囲の水田化である。水が得にくい扇状部に対し、一の堰や中の堰といった用水路を上流から引くことで、段丘上での稲作を可能にした。清水寺境内の水路や近傍の湧き水は、水利管理と宗教施設が歴史的に密接な関係にあったことを示唆している。

大野郷は地形的制約を水利技術によって克服し、生活と生産の場を地域全体に展開・維持してきた地域である。

### 4)集落を象徴する風景と名前

「用水網で繋ぐ段丘上の集落と水田」

集落と水田が、古代から現代にかけて整備・維持されてきた用水網と連結し、持続可能な地域システムを形成している。

#### 参考文献

- [1]『新版 角川日本地名大辞典』,Japan Knowledge Lib
- [2]『山と川と大地：佐渡大野史』,大野郷土史編纂委員会 編,1997.12
- [3]『新穂村史』,新穂村史編さん委員会 編,1976.

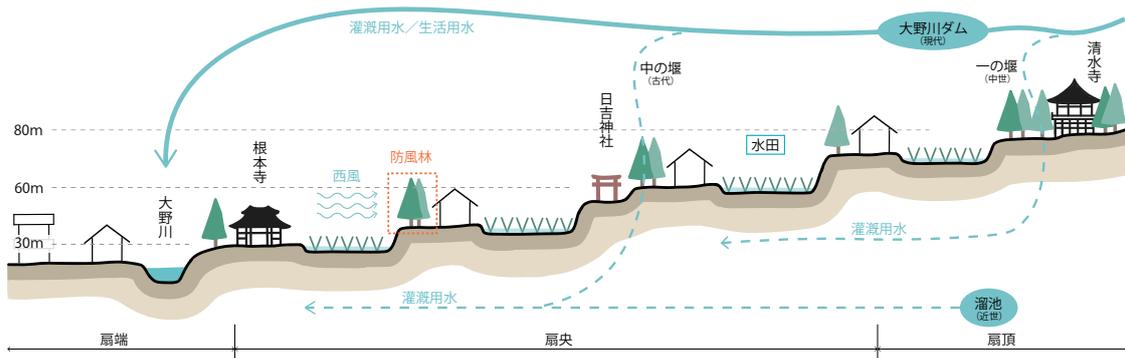


図8 断面ダイアグラム(筆者作成)

## 第4章 2025年度佐渡島疾走調査 考察

〈千年村〉候補地からたどる佐渡の歴史的  
生存環境の類型

— 早稲田大学 中谷礼仁

### 1. はじめに

猛烈な雨や浪に晒されながら、土中に多くの水を溜め込めない島の生活は厳しい。だから島は古くから流刑地であった。佐渡もまたその例に漏れないが、その暮らしは比較的穏やかであり、文化や生業も発展する素地があった。15世紀に佐渡に流された能役者・世阿弥によって広められた能文化もその一つだろう。

佐渡が比較的豊かであったのはその大地の形成過程に深く関係がある。佐渡を形作るのは火山性の二つの山である。通常の多くの島は一つの山の隆起によって成立するのだが、佐渡は「大佐渡」と呼ばれる北側の島、「小佐渡」と呼ばれる南側の島が隣り合って形成されたことが独自の地形の発達過程を持った。同二山や海水準の変化によって形成された海際の段丘のみならず、二つの島の中に内湾である両津や加茂湖、そして山側から流れ込む土砂が溜まり約2000年前にはすでに現在の国中平野が形づくられていたからである<sup>i</sup>。その意味で、佐渡の大地の展開と千年村のもつタイムスケールはよく合致している(図4-1-1)。また金採掘によって佐渡の開発が本格化するのは江戸以降であるから、佐渡の千年村はそれ以前の発展の状態を見るのに都合が良い。

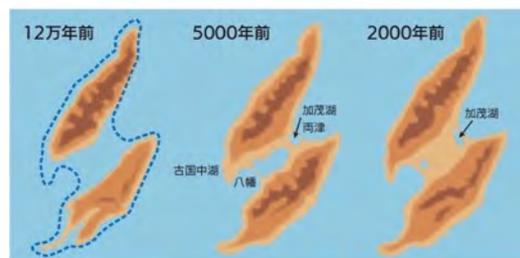


図 4-1-1 佐渡の大地の形成過程

(出典：佐渡ジオパーク <https://sado-geopark.com/about/>)

2025年度の疾走調査地として選ばれた佐渡は、これまでの個人的な佐渡訪問では得ることのできなかった、佐渡の生活基盤としての大地の特徴をかいま見せてくれた。千年村候補地マップが、これまで知ることのできなかったその要の場所を示してくれるからである。これが千年村現地調査の醍醐味である。

ここでは疾走調査の際におとずれた集落とそこでの住まい方の類型をいくつか紹介し、最後に今回候補地に上がっていなかった新たな該当地を発見したので、それについて報告を追加する。なお本稿での候補地の名前は記載なき限り和名抄での名称を使い、比定された現在地は必要に応じて併記することとする。

### 2. 候補地 01. 賀茂郡賀茂郷(現佐渡市加茂歌代、湊端、秋津、横山、長江、夷)から学ぶ多様な地質の堆積と住まい方

最初に訪れたのは当方が指導担当であった賀茂郡賀茂郷であった。一般に水源とその配分方法はすべての集落を成立させ

る最も大事なものである。佐渡の集落の取水方法は地域の状態によってさまざまだが<sup>ii</sup>、同地では貝喰川（かいばみがわ）がその上下を貫通して流れている。その地質は上流の火山性の土壌から始まり、川によって運ばれた堆積層、海面の上下によってできた堆積層をベースとして、その上に扇状地（段丘堆積）が広がり、さらに海際を谷底平野や砂浜が付帯している（図 4-1-2）。

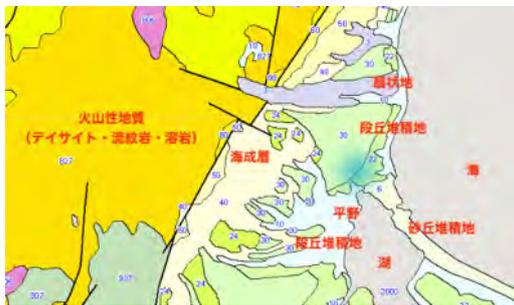


図 4-1-2 千年村候補地賀茂郡賀茂郷の地質図（出典：シームレス地質図より）

つまり同地域は、佐渡の地質地形の多くの要素が現れたミニチュアモデルのようでもあった。現在の地域名（歌代、潟端、秋津、横山、長江、夷）も多様な地形の種類を伺うことのできる言葉が並んでいる。詳細報告は担当学生に任せるが、同地を流れる小川である貝喰川上流で山の麓の森が始まる地点に、歌代神社まで遡り水源を発見した（図 4-1-3）。



図 4-1-3 旧賀茂郡歌代神社付近の水谷戸上には章集落と墓地を含む富月寺があり、周いは稲作地である。道は緩やかに

傾斜しておりそのまま下ると加茂湖に直結するが、車を左折して扇状地上も訪問し、そこが宅地として開発されていることを確認した。再び道を下ると県道沿いに数少ないが商店があり、その先に漁家が参集し、舟屋が並ぶ加茂湖とその先に両津港があった（図 4-1-4）。



図 4-1-4 旧賀茂郡賀茂郷における主要地区と GPS トラック

以上のようにこの場所を分析してみると、地質地形の種類とその用途、さらにそれらの関係性を示唆的にみることができた。それらを模式図にすると図 4-1-5 のようである。模式図にあるように集落には、丘上集落、扇状地集落、街道沿いの集落値それに隣接する漁村と基本的には山の麓から海岸の間で展開している。くわえて今回、別に新しく発見された千年村として、山間集落（後述）を加えて大きく 4 つのタイプがあった。以降の説明はこの模式図に基づいて行う。

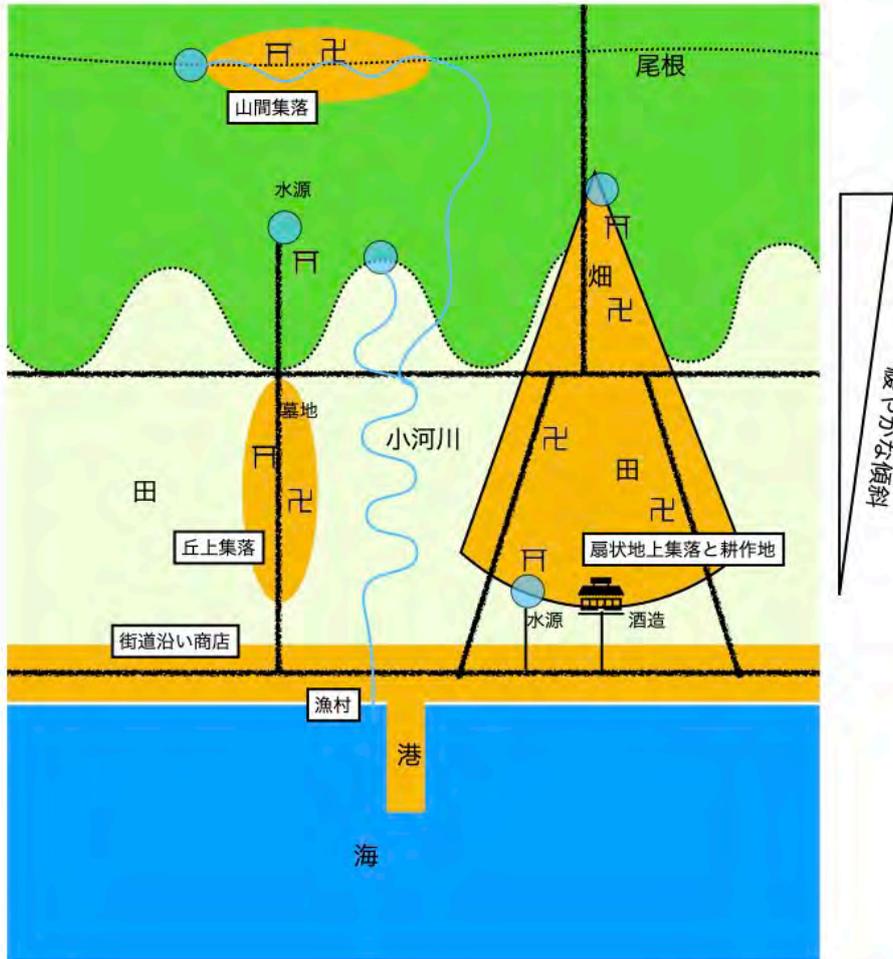


図 4-1-5 佐渡千年村の歴史的生存環境模式図

### 3. 候補地 02. 諏訪郡久知郷(同市久知河内・下久知)～船のような台地上コミュニティ

先の模式図は、調査終了後に全体的な見を加味してまとめたものだが、この模式を用いて他の地域についてもいくつか言及したい。

候補地 02 諏訪郡久知郷もまた印象的な集落のまとまり方をしていて、候補地 01 の扇状地はなく谷戸を周囲にしたがえる海に渡って長く伸びた台地上の集落である。海側が下久知であり海側道路からの入り口となっている。大地の中央に神社と寺が複数存在し、規模も大きい(図 4-1-6)。



図 4-1-6 候補地 02. 諏訪郡久知郷の主要地区と GPS トラック

同集落は山側に伸び隣村の久知河内と接続している。同村は詳細調査の価値のあるわかりやすい村のまとまりをしている。模式図(図 5)における丘上集落の典型と考えてよいと思う。丘上で住まい、核となる

宗教施設を持ち、周囲の谷戸で稲作をする生存様式が垣間見える。また海にも近く、沿岸を通る道によって他地域への交通交流がなされた。また上流側に村の境を示すように共同墓地があった。このセットは佐渡の沿岸にて多く確認でき、それらは多くの大字の形状にも反映されている。さらに下久知の入口に所在する久知八幡宮の県道319号線に面する鳥居には冠木がなく、二本の「御神木」を貫でつないだ形式である。鳥居だとすれば珍しい形式で、古式なのかもしれない(図4-1-7)。



図4-1-7 久知八幡宮の鳥居の一つ。  
古式と思われるが詳細不明

#### 4. 候補地 03.雑太郡岡郷、08.同雑太郷、09.賀茂郡殖栗郷、10.同郡大野郷(現真野・吉岡周辺)～大和飛鳥を思わせる大規模扇状地に展開する村と耕作地

2日目、3日目に訪れた国仲平野南部、小佐渡側の山の麓には大規模な扇状地が展開していた。現在の地名でいえば真野、吉岡周辺である。同地は古代からはじまる耕作地としての性格を有していると思われる。先の模式図内の扇状地上集落と耕作地の代表と考えたい。現在は国仲平野もよく灌漑され稲作地帯になっているが、和名抄の編纂された時代に同平野が現状のよ

うに稲作地として整備されていたかは不明である。よって水が湧出しやすい段丘脇や扇状地に集落と耕作地が先んじて開発されたと考えることは容易である。現時点でも集落の多くは扇状地に位置し、国仲平野に点在する集落はその多くが微高地に形成されていたことも、これまで多くの千年村訪問の経験と合致する(図4-1-8)(図4-1-9)。



図4-1-8 千年村候補地が集中する真野・吉岡周辺地域の様子とGPSトラック。

いくつもの扇状地が重なって肥沃な耕作地を形成している



図4-1-9 真野・吉岡周辺の地質図

(図8の眺望と方角が逆なので注意)

(出典：シームレス地質図より作成)

たとえば奈良飛鳥には、条里制によって開発された平地の水田のほかに、藤原宮成立前の初期飛鳥の地には緩やかな傾斜のある谷底平野や段丘堆積地に連続して水田が展開している。

佐渡吉岡・真野地区を訪れて思い出したのは飛鳥のその初期稲作地との類似性である。灌漑平野開発前の稲作の様子は、名著・

古島敏雄『土地に刻まれた歴史』岩波新書 657 (1967) の古代的農地においても指摘されていることなので、吉岡・真野地区を土佐における千年村的稲作地の発祥の中心地として考えてよいと思う(図 4-1-10)。



図 4-1-10 初期飛鳥の地における稲作地の様子 (出典：Google マップより)

さらに興味深いのはこの地区に酒造が複数存在している点であり、先の模式図にもその位置関係を示しておいた。地図上で確認してみるとそれら酒造の多くは扇状地と街道の間に酒造りの現場を持っており、扇状地(米)をいれ、街道から酒を出荷するという、わかりやすい経路をもつ産業として理解できた(図 4-1-11)。



図 4-1-11 千年村候補地が集中する真野・吉岡周辺付近の酒造の様子。扇状地の耕作地から原料を取り入れ、工場で製造後、街道から酒を出荷する一連の動きが可視化している

## 5. 両津港周辺 街道と港のみの場所

また今回調査対象ではなかったが、日本海と加茂湖に挟まれた両津港周辺の土地の様子も興味深い。加茂湖は約 5000 年前(縄文時代)に砂の堆積で海と隔てられて誕生した海跡湖(かいせきこ)である。明治時代に現在の形に整備され、汽水湖となった。同湖と日本海で挟まれた同地域は、端的に漁村と交易交通のための街道のみによって構成されている。いわば天橋立、もしくは青森の十三湊が都市化したような興味深い風景であった(図 4-1-12、図 4-1-13)。



図 4-1-12 両津港周辺の様子 (出典：Google マップより)



図 4-1-13 天保絵図(重要文化財) 1835 での同地

今回は後述する山間の千年村発見のために時間を費やしたことで小佐渡南側の漁村周辺(候補地 07 羽茂郡駄大郷)をしっ

かりとみることはできなかったので、その代わりに指摘させていただきたい。これは先の模式図（図 4-1-5）では、街道沿い商店と漁村のみで成立している場所と考えることができる。

### 5. 新しい千年村の発見 現外山ダム、上川茂、下川茂周辺の山間集落



図 4-1-14 候補地  
となった山間集落

疾走調査 2 日目で私たちのグループは小佐渡の南側に行く途中で山間に広い田園があるので、試しに行ってみることにした。佐渡でも一際目立つ

山間集落であった。模式図（図 4-1-5）でその位置付けを図化した。そこは相応に広い場所であり、東側の外山ダム（2012 年竣工）から西へ羽茂川に沿って上川茂、下川茂からなる。同川にそって佐渡縦貫線が敷設され、川は南側沿岸の羽茂港まで通じている（図 4-1-14、図 4-1-15）。



図 4-1-15 上川茂、下川茂における  
主要地区と GPS トラック

同集落は約 3 キロにわたる稲作地となっており、各宅地は散居し、大きく構えをとっている（図 4-1-16）。



図 4-1-16 散居する家々と前面の田

中央に 737 年創建と伝えられる五所神社があり、鶺鴒草葺不合命を主祭神とする他に五柱が祀られている（図 4-1-17）。



図 4-1-17 五所神社にかかる橋の様子

板書によると、御田植神事と呼ばれる独特の例祭があり 7 人で 7 つの儀式を 2 月に行うという。行い手は地域の 7 戸の長男だけで完全世襲制でその内容は口外されないとのこと。2018 年以降、女性もその際の境内に入れるようになったという。近くの集会所では女性が集まってお餅を作っていた。先の天保絵図で同地名はいずれも主要集落として記載されているのでここも千年村の候補地とすべきであろう（図 4-1-18）。

なお、改めて公開されている千年村候補地マップを確認してみると、実は同地が羽茂郡菅生郷（<http://mille-vill.org/>羽茂郡菅生郷（新潟県））、同星越郷（<http://mille-vill.org/>羽茂郡星越郷（新潟県））としてそれぞれ個別にはプロットされているにも

かかわらず、全体のマップに欠落していたことが判明した。いずれにせよ本報告によって現在判明している佐渡千年村候補地が揃ったことになる。



図 4-1-18 天保絵図における同地

## 6. 最後に

今回やや詳細に報告をなしたが、佐渡は千年村の類型を考える際の基本となる雛形が揃っているように感じた。肥沃な二つの火山島とその間の平地という条件が、日本の千年村の縮図となっているのと思う。最近詳細調査を行っていないが、詳細調査に値する場所と思った。また私事だが、千年村研究約10年にして、マクロからミクロまでスムーズに筆を運べるような見方が同地でできるようになったように感じたことが嬉しかった。

最後のフェリーでの学生発表会も鮮やかな記憶になった。あらためて、多くの関係者、特に準備いただいた学生の方々にお礼を申し上げます(図4-1-19)。(了)



図 4-1-19 フェリー上の記念写真

## 加茂郡久知郷について

一千葉大学 木下剛

### 1. 下久知と野崎集落

両津港に接岸したのは15時を回っていた。それからレンタカーを借りての行動だったため、初日最初で最後の訪問地佐渡市下久知(しもくじ)に着いたのは16時近くであった。下久知は古代の加茂郡久知郷の比定地である。我々の班は、この久知郷(くじのこう)の担当なので、小雨がぱらつくなか、まずは野崎の集落に赴いた。大字下久知には、この野崎(海沿いの浜堤 T.P.+5.5~5.9に乗る)の他に、台地の上と下に集落がある。佐渡市立河崎小学校東隣の駐車場に車を駐め、久知川を渡るとほどなくして野崎である(図4-2-1, 図4-2-2)。

野崎の集落には現在二本の道が並行している。海側に二車線の県道45号(佐渡一周線)、内陸側に細い道(センターラインなし)があり、集落は細い道の両側に並び立っている(図4-2-3)。元々の道(旧道)はこちらで、県道はあとから造られたものであろうことは疑いを入れない。県道が造られる前、旧道に沿った海側の家屋はその北面を直に浜に接していたであろう。その名残か、各戸の庭の、県道側に開放された出入口越しに海が見える(図4-2-4)。一方、旧道に沿った陸側の家屋南側は一面の水田で、その庭には野良への出入口が設けられている。浜堤に乗る集落なので細長い線状の集落である(図4-2-5)。

旧道海側の、とある民家のご当主にお話を伺うことができた。曰く、野崎集落の住民は久知八幡宮の氏子であり、久知八幡宮の

祭礼の際は、下久知の他の集落の住民といっしょにそれを執り行う。この方に我々の意図を告げると、『下久知郷土史』という書籍を見せてくれた。「お貸ししますよ」とおっしゃるので「明日必ずお返しに上がります」と約束してお借りする。いきなり押しかけた、見ず知らずの我々に大事な蔵書を貸してくれるのだから有り難い。この方、隣家のご主人が歴史に詳しいからと紹介してくださった。隣家のご主人がいうには、この集落、昔は半農半漁もいまは兼業農家で従事者は減るばかり。

駐車場に戻り、久知川と河崎川の分水嶺をなす台上に上がるため、田んぼの中の道を南下する。引き続き歩きである。すぐに集落となり、300mも行くと尾根の突端に達する。尾根上に登る急な階段がつけられており、比高は約8m。登り口に地蔵や道標が置かれている(図4-2-6)。見上げると他班の小林君たちがいる。階段を登りきると共同墓地(T.P.+20)があった。振り返ると眺めが良く、家屋越しに海が見える(図4-2-7)。小林君が、「あれは昔の小学校かもしれませんね？」と眼下の切妻の細長い建物を指差す。そういわれればそんな感じがする。河崎小学校の前身だろうか(図4-2-8, 図4-2-9)。

この場所から河口は見えないが、地図を見ると、久知川と河崎川の河口の間は極めて狭く400m足らずである。その幅があまり広がらずに上流部に至る。したがって両川の分水嶺は当然のことながら細い。この舌状台地の突端の岬のような所にいま我々は立っている。「岬」に墓地というのも面白いが、台地下の集落からのアクセスを考慮したものだろうか。あるいは津波除けだろうか。ちなみに先程の、野崎の集落には随所



図 4-2-1 下久知，久知河内，城腰の各大字（国勢調査小地域）

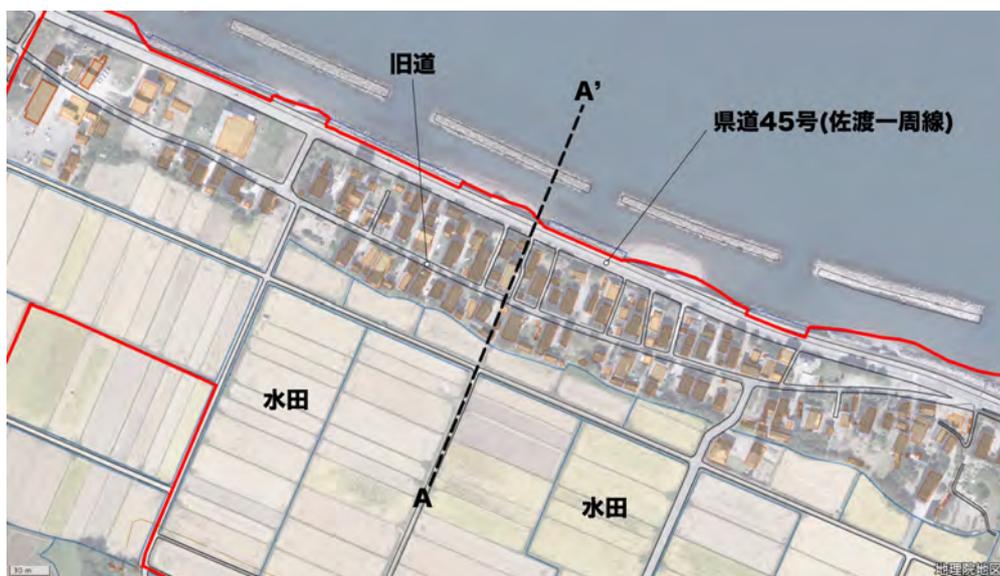


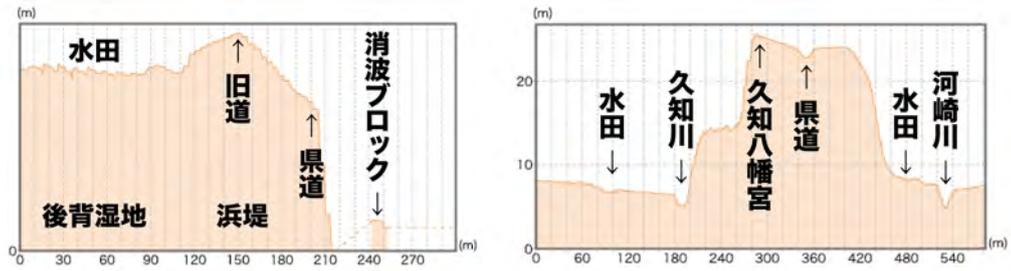
図 4-2-2 野崎集落



左：図 4-2-3 野崎集落



右：図 4-2-4 野崎集落の民家（海側）



左：図 4-2-5 野崎集落断面図 (A-A'断面, 縦横比 26:1)

右：図 4-2-9 下久知集落 (北部) 断面図 (B-B'断面, 縦横比 11:1)



図 4-2-8 下久知集落 (北部)



左：図 4-2-6 台上に上る石段 (下久知)

右：図 4-2-7 台上からの眺め (下久知)

に集落墓地があった。さて、岬の墓地を過ぎると県道319号（赤玉両津港線）に合流する。県道は尾根のほぼ中央を通っている。この一本道に沿って集落があるが、尾根が細いので家屋は道路沿いのみ。耕地を背にし、その後ろはすぐ斜面林である（図4-2-8）。そういうわけで立地は異なるが、野崎と同様、こちらも線状集落である。

県道に入ると程なくして久知八幡宮が右手に見えてくる。杉の木立に覆われているが、地べたの芝生が青々しい（図4-2-10）。この時は気づかなかったが、その後佐渡の神社を巡る中で、社殿周りに芝が張られている神社が多いような気がした。芝生が維持できている根本的な理由は、ちゃんと芝刈りしているからではなく、樹木がそれほど多くなく日照が確保されているからである。ゆえに他地域でよく見る、社叢に覆われた薄暗い神社という感じを、佐渡の神社ではあまり受けない。既に日が傾き薄暗くはなっていたが。

それはともかくこの芝生、極めて機能的な意義があるのではないかと思う。祭礼を執り行う場として、また能楽を鑑賞する場として、芝が張ってあると使い勝手が良さそうである。久知八幡宮には能舞台はないが例大祭の奉納芸はこの広々とした芝生の上で行われている。また、能舞台がある神社では、舞台の周りにも芝が張られ、鑑賞時、観客用に椅子などが置かれるようである。雨が降ればすぐぬかるむ泥んこよりもよほど使いやすいであろう。今回の調査で訪れた、能舞台のある神社では、小規模なものでは例えば吉岡總社神社（佐渡市吉岡）、大規模なものでは賀茂神社（佐渡市栗野江）などがそういうつくりになっていた。賀茂神社

に至っては公園のような広大な芝生であった。

## 2. 久知郷の比定地

久知八幡宮に話を戻す。この宮の例大祭では、三集落に伝わる芸能が奉納されている。野崎の刀刀（とうとう）、下久知の鬼太鼓、城腰（じょうのこし）の花笠踊で（図4-2-11）、これらの芸能は中世の祭礼神事の名残を留めているという。興味深いのは、これら三集落の中で城腰だけが別大字（字名も城腰）にあるということだ。大字城腰は、久知川の左岸（西岸）台上に集落を乗せ、その名のおり城館があった（図4-2-12）。この城館の主な時代は室町から戦国にかけてで、久知城あるいは馬坂城と呼ばれ、戦国期佐渡4大勢力の一つ久知郷領主本間氏の居館とされる（「久知城（馬坂城・両津市城ノ腰）」余湖くんのホームページ）。

我々は当初、久知河内（くじかわち）と下久知が古代加茂郡久知郷の比定地と考えていたが、久知河内の集落は久知八幡宮の例大祭に参加していない。この集落は中世期に村の中心部にある長安寺の境内に成立した村であると伝わる（「久知河内集落の概要」佐渡市ホームページ）。長安寺は、「天長年間（824～834）に創立したと伝えられる真言宗の古刹（図4-2-13）。創立当初は天長寺と号していたが、仁安3年（1168）に新興されて現在の寺号となり、室町時代には久知郷領主本間氏の祈願寺として栄えた」（「木造阿弥陀如来坐像」佐渡市ホームページ）

古代久知郷の範囲をうかがい知るもう一つの情報として、久知八幡宮の由緒書きがある。それによれば、久知八幡宮は、「応和元年（961）山城国（京都府）男山の石清水



左：図 4-2-10 芝生に覆われた久知八幡宮

右：図 4-2-11 城腰集落から奉納される花笠踊（出展：佐渡芸能アーカイブ）



図 4-2-12 城腰集落



左：図 4-2-13 長安寺と白山神社

右：図 4-2-15

八幡宮より分霊、久知郷国見峠に遷座。往古より久知郷の総鎮守として崇敬をあつめてきたといわれ、のち宝徳2年(1450)下久知荒城の地に奉遷されたものと伝えられる」とある。「下久知荒城の地」とは、現在我々が居る久知八幡宮付近である。ということはこの地も城趾だったわけで、城があってもおかしくない地形だが、神社が来たので、城は川向うの城腰につくられたということか。

それはともかく、「国見峠」は地形図に見当たらずおそらくは久知川水源地帯の国見山と大隅山の鞍部、四十八ヶ所越(赤玉に抜ける)がそれに当たると思われる。つまり、久知郷は小佐渡山脈を分水嶺とする久知川流域の全域が郷域であり、これは現在の国勢調査小地域「下久知」にほぼ相当する(図4-2-14 図1)。ところが、Googleマップで表示される大字下久知の範囲は久知川の下流域に限定されている。久知河内についても国勢調査の小地域とGoogleマップの大字とではその範囲が大きく異なる。Googleマップの久知河内は国勢調査の久知河内と概ね重なっているが、国勢調査の下久知とも大いに重なっている。

千年村研究で、古代郷の位置を比定する単位としての大字の範囲を、国勢調査の小地域(町・字)によるかGoogleマップの大字によるかは常々議論になるところであるが、久知八幡宮の由緒書きを見る限り、国勢調査小地域が示す下久知のほうが古代の久知郷により近いといえるだろう。ただし、これはケースバイケースでGoogleマップの大字のほうが近い場合もある(経験的にはむしろそのほうが多い)。とはいえ、古代に由来する久知郷は下久知だけで構成されて

いたわけではなく、久知河内および城腰を含む範囲と考えるのが妥当であろう。なぜなら、城腰集落は久知八幡宮の例大祭に参加しており、城腰の城館は久知郷本間氏の居館であった。また、久知河内の中心寺院である長安寺は久知郷領主本間氏の祈願寺であったからだ。長々と書いたが、こうしたことは地元の詳しい方に聞けば分かる話ではある。しかし、現地でそれができなかったので、帰ってから調べ、千年村研究のための覚え書きとしたものである。

我々は久知八幡宮をあとにし、薄暗い県道を引き返し駐車場に向かった。この宮には県道に接する出入口が二箇所ある。一つは拝殿に正対する大鳥居で、もう一つは拝殿に向かう参道に直行する動線上に立つ小さな鳥居だ。後者の鳥居が面白い形をしている(図4-2-15)。我々は、帰りはその鳥居から出た。台地下に戻るにはそれが近道だからだ。鳥居を出てカーブを曲がると下り坂が急になり、その先に海が見える。後で図4-2-15を見ていて気づいたが、奥の方に同じ鳥居が見える。そして、両方の鳥居を結ぶ空間に障害物はない。これはひょっとして流鏝馬の馬場として使われるものではないか。現場ではそんなこと思いもよらず、坂道を下っていたら、途中で同じような鳥居を構えた民家を発見して驚いた(図4-2-16)。

先の、下久知集落の鬼太鼓は、「早朝に神社で奉納された後、集落の上の方から門付けを行い、昼間に野崎集落に刀刀を迎えに行ったあと、神社で再び舞を奉納します。神社以外で正式な舞が見られるのは、区長・神主・新鬼(オス・メス)の家など特別な場所で、その他は省略した舞となる」(「久知八幡宮例大祭の奉納芸」佐渡芸能アーカイブ)。



左：図 4-2-16 小さな鳥居のある民家（下久知）

右：図 4-2-17 中嶋神社

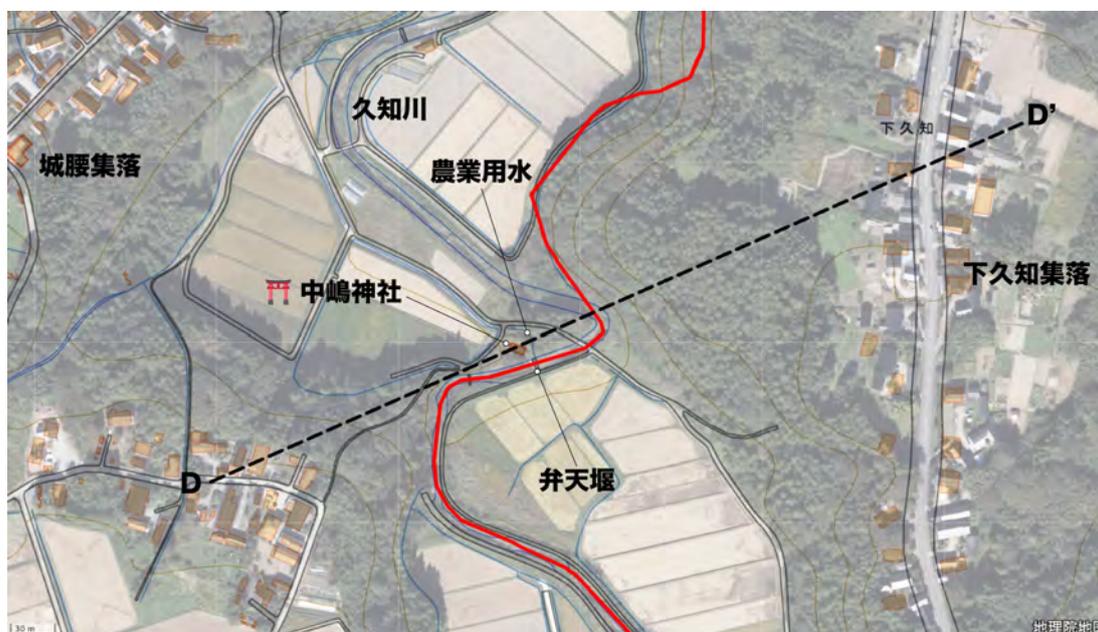
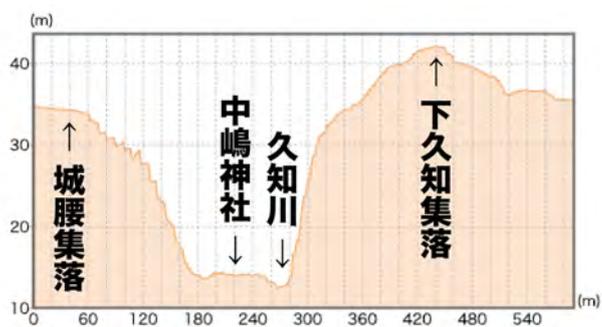
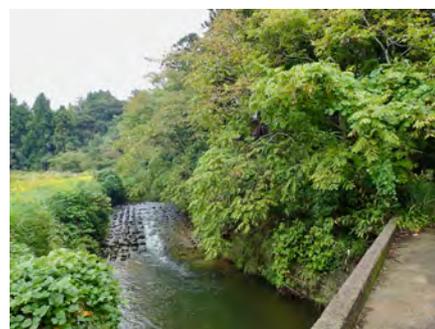


図 4-2-18 中嶋神社



左：図 4-2-19 中嶋神社断面図（D-D'断面，縦横比 9:1）

右：図 4-2-20 中嶋神社裏手の堰（弁天堰）



したがって、鳥居のある民家はあるいは神主さんのお宅かもしれぬ。

### 3. 久知八幡宮の榎の木清水

さて、これも後で知ったことだが、久知八幡宮にはもう一つ触れておかねばならないことがある。よりによって、我々はそれを見落としてしまい、写真も撮っていない。大いに悔やまれる。それは、榎の木清水(かやのきしみず)と呼ばれる湧水で、拝殿南側の社叢の中にあるようだ。久知八幡宮の御神木である榎の木の袂から湧出しているため、この名がある。この湧水、どんな日照りでも水が枯れたことがなく、上水道が普及するまで、集落の貴重な生活用水として人々から親しまれ、利用されてきたという。(新潟県環境衛生研究所, 2015a)

また、久知八幡宮に三集落から芸能が奉納されるのは その昔新田開発した田んぼが水不足になった際、久知八幡宮に雨乞いをしたら境内から湧き水が出て水涸れを救った、その御礼だといわれている。「佐渡の芸能～久知八幡宮まつりの花笠踊り」佐渡芸能アーカイブ)。ここでいう「湧き水」とは榎の木清水のことではないだろうか。この清水は、いまも久知八幡宮や正覚寺の手水舎の水として導水されているほか、下流域の農業用水としても利用されている。(新潟県環境衛生研究所, 2015b)

また、榎の木清水と東強清水(ひがしこわしみず)は水脈が繋がっているとされ、榎の木清水が濁るときは、東強清水の水も濁るといわれている(新潟県環境衛生研究所, 2015c)。この伝説は、山城国の石清水八幡宮から御神体を分霊する際(これについては上述した)、まず船が東強清水に着き、御

分霊を安置するところがなく石上に置いたところ石の下から八幡清水が湧き出た。その後、御分霊が久知八幡宮に安置され、そこで湧き出たのが榎の木清水であり、久知八幡宮から分霊されたものが東強清水の八幡神社とされる(新潟県環境衛生研究所, 2015d)という言い伝えと符合する。

そもそも細い尾根上に水が湧くということじたい、そこが特別な場所であることを示している。湧出機構は、段丘礫層の伏流水が基盤のデイサイト溶岩との不整合面から湧出していると推定されるそうだが(新潟県環境衛生研究所, 2015e)、地形的には、下久知集落の乗る細い尾根に食い入る久知川の支谷の谷頭部にあたる場所のようで、水が湧き出してもおかしくはない。

### 4. 中嶋神社(城腰弁才天)

翌朝、お借りした本を返しに野崎集落を再訪した。その帰路、昨日行けなかった久知河内に赴くこととし、その途中、班員の一人が「中嶋神社に寄って行きましょうか」というので、そうしようということになった。カーナビが示した経路は、野崎から久知沖水田(これについては後述する)を突っ切って城腰集落を越え、再び久知川の谷に降りるというものだった。そのとおり谷に降りて暫く行くと、久知川が鋭角に折れ曲がる箇所があり、その屈曲の内側に中嶋神社があった(図4-2-17,図4-2-18)。このあたり、久知川を境にして西岸が城腰、東岸が下久知なので、中嶋神社は両大字の境界部に位置するわけだが、大字としては城腰に含まれる。

境内を歩いていると小さな、しかしそれなりに深い水路がありその底で何やら動く

物体がある。近づいてよく見るとモクズガニであった。さてこの水路、現地では気づかなかったが、後で写真(に収めた境内の案内板)を見たら、下流の水田を灌漑する用水路であることがわかった。曰く「境内に久知沖水田の関があり、中世久知沖開発に水源の守護として勧請された。渇水時の水相談等は、この神前で城腰名主の司祭で行われる習わしであった」。文中の「関」とは「堰」であり、久知川の、本殿裏手辺りに小さな堰が設けられ(図4-2-20)、そこから用水が引きこまれている。用水は境内を北に向かって流れやがて久知川下流の水田地帯を広く潤す。この水田地帯が「久知沖水田」であり、昨日見た野崎集落南側から城腰の台地下に広がる広大な水田がそれである。中嶋神社は、この重要な用水とその取水堰を監視したり、渇水時水相談の場を提供したりと、極めて機能的な存在であったことが知れる。今風に言えば、農業土木の基盤施設(インフラ)の枢要部を構成していたといえよう。

さらに案内板の説明を引く。「古くは中嶋の弁財天と呼ばれ、佐渡三大弁天(潟端、片野尾、中嶋)の一つと言われ、弁天様は海上、湖上の島に祀られるが、ここでは久知川のほとりに建っている」。ここには、弁財天の立地に関することが書かれている。「久知川のほとり」とごく控えめに記されているが、海ではなく川の弁財天であるということのほかにも、その立地は極めてユニークである。この立地は、先にも述べたように、久知川が蛇行しているその内側、いわゆる凸岸にあたるが、中下流部において最も鋭く屈曲している箇所といえるだろう。突州(ポイントバー)の形成は見られず、城腰の台地から派生した小さな低い尾根がそのまま凸岸を形成している。神社はこ

の尾根上に建てられ、拝殿・本殿のある地盤はT.P.+14.1、凸岸周辺の水面はT.P.+11.3~13.3なので比高は高いところでも3m足らずである(図4-2-19)。とはいえ、川下・川上からこの社を眺めると社叢が谷を塞いでいるかのようである。この凸岸により、もとより流速が弱められ、堰を設けて用水を引くには良い場所といえるだろう。

案内板には、さらに興味深い記述がある。曰く「天文六年(1537)馬坂落城の折、社殿内より十六童子が打って出て、追手を防ぎ、その為久知殿主従は、無事片野尾に落ちのびることが出来たという」。「馬坂落城」とは、潟上本間氏とそれを支持する雑田本間氏の連合軍に久知本間氏が敗れたことを指す。この時、潟上本間氏らがどのような経路で城腰を攻めたか詳細は不明だが、潟上本間氏の拠点、現在の新穂潟上(久知郷の南東に位置する)からの行軍の道程としては、藤巻の台上を征くか、あるいは一旦久知川の谷に降り川沿いを北上しちょうど中嶋神社あたりで台上に攻め上がるかのどちらかであろうか。神社に伝わる十六童子の逸話は、後者の可能性をうかがわせる。一般に谷筋の行軍は奇襲や待ち伏せのリスクが高いが水源の確保や物資の補給が容易という利点があるとされる。十六童子の逸話は、まさに谷筋での待ち伏せの戦術に基づくといえるだろう。それに加え、この神社の、谷を塞ぐ地形と社叢はまるで行軍を阻むかのよう(図4-2-21)、そこから十六童子が打って出たというのは劇的にもほどがある。それほどに、この地の景観は本逸話のセッティング(舞台設定)にふさわしい。

## 5. 城腰と久知河内に関するメモ



図 4-2-21 上流側からみる中嶋神社 (Google ストリートビュー)



図 4-2-22 久知河内集落

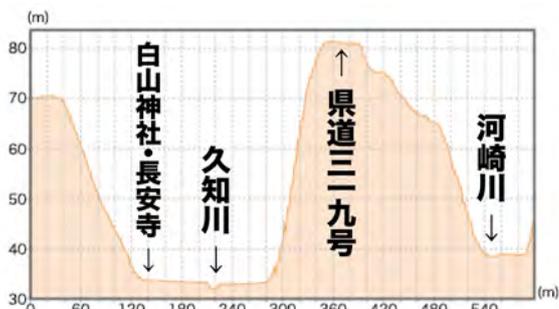


図 4-2-23 久知河内集落断面図 (C-C'断面, 縦横比 12:1)



図 4-2-24 久知河内集落

城腰については、野崎から久知河内に向かう際に車で通っているのだが、我々は愚かにも、そこは久知郷ではないと考えていたため、素通りしてしまった。途中で立ち寄った中嶋神社も、こんなに素晴らしい神社がなぜ下久知ではなく城腰にあるのか？と残念がったものである。見当違いもはなはだしい。つくづく準備不足が惜まれる。その後の勉強によれば、城腰には中世に久知城（馬坂城ともいう）が築かれたが、城郭遺構はほぼ失われている。台地先端の本丸があったとされる場所から長い一本道が真っすぐ伸び、その両側に集落が展開するきれいな構成である（図 4-2-12）。上述したように、下久知の台地と城腰の台地の土地利用にみる、信仰（下久知）と政治（城腰）の棲み分けが面白い。が、これ以上のリサーチができていない。

中嶋神社を見終え、田んぼの中の細い農道を脱輪しないようにおっかなびっくり進み、いったん下久知の台上に上がり、一重堂と呼ばれるお堂のある分かれ道で再び久知川の谷に降りる。長い下り坂を降りきると久知河内である。ここも興味深い集落である。その名のとおり、久知川の両岸に展開する特徴的な集落であるが（図 4-2-22, 図 4-2-24）、なぜ「河内」―谷底、川沿い―に住まなければならなかったかということが論点となる（図 4-2-23）。このような立地は千年村候補地として一般的ではない（まったく前例がないわけではない）。その理由はいうまでもなく洪水のリスクが高いからだ。久知河内も洪水に見舞われた記録が残る。しかし、水を得やすいという利点もある。

久知河内の集落のある場所は地下水位が

低く、井戸を掘っても良い水が得られにくかったため、久知川を飲用水、生活用水として利用してきた。昭和 38（1963）年に簡易水道が設置されたが、新潟地震により湧出量が減少したため、新たな水源としてアブ坂清水（図 4-2-25）の湧泉が利用されるようになった（新潟県環境衛生研究所，2015f）。また、久知川はサクラマス、アユ、ウグイ、イワナ、ウナギ等のタンパク源となる川魚が豊富な川でもあった（「久知河内集落の概要」佐渡市ホームページ）。

以上のことから、久知河内では、生活用水と水産資源を得るために川沿いに集落が形成されたと考えられる。また、久知川の中流に位置し、谷が狭くなっているものの、小規模ながら水田を営める土地もあった。近代に入っても、河川の代わりに周辺の湧水を簡易水道の水源として利用できる環境があり、その後は上流に久知川ダムが建設された。これにより、洪水リスクが解消され、農業用水や上水道用水を安定して確保できるようになった。このように、久知河内では、一貫して久知川とその流域の水資源を糧に生活を営むことができた。

また、天長 8（831）年の開基で中世には 12 坊を有したと伝えられる、久知河内の長安寺には、朝鮮半島との関係をうかがわせる銅鐘（朝鮮鐘）が残り、大変興味深いのだが、これもリサーチが尽くせていない。

## 6. 久知郷と水のつながり

ということで、最後に図 4-2-25 を以て本稿のまとめとする。

この図から推察されることは、古代久知郷（下久知、城腰、久知河内）の地理的範囲は、961 年に山城国は石清水八幡宮から分

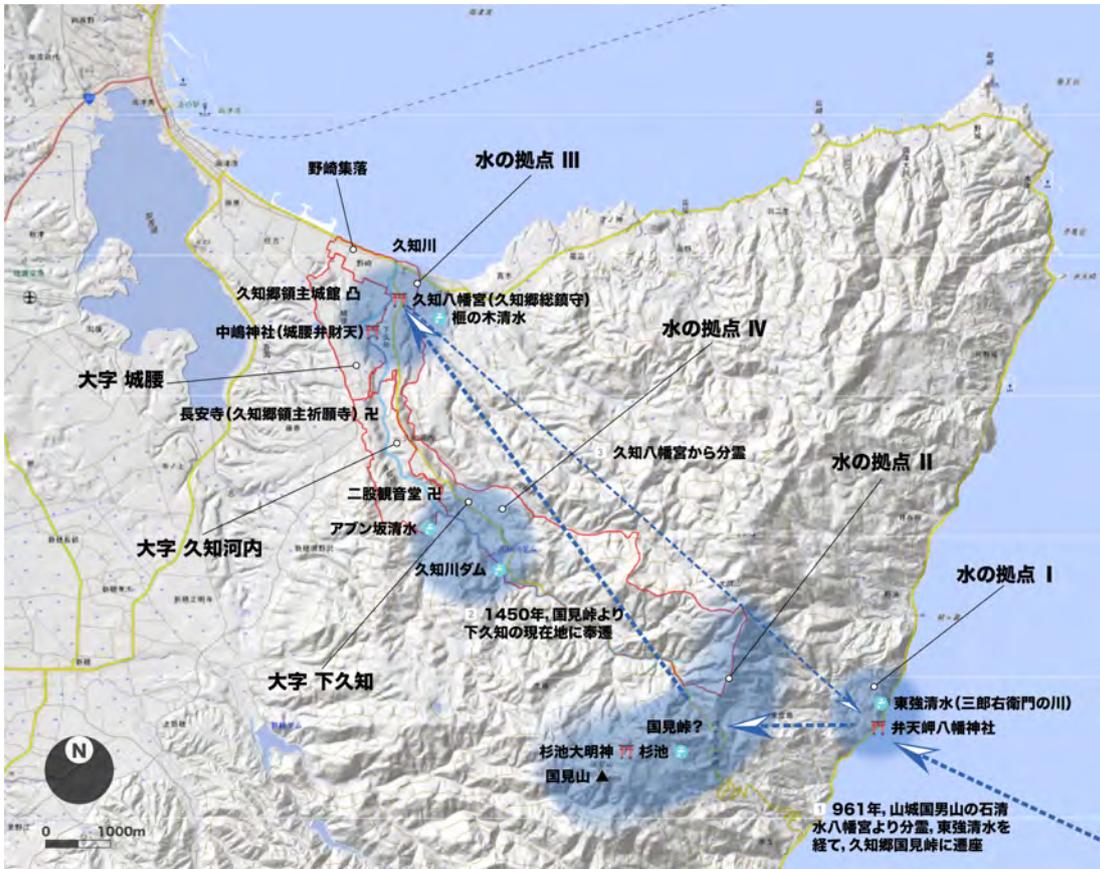


図 4-2-25 久知郷と水のつながり

霊された八幡神が辿った経路や拠点とほぼ重なるということである。御神体は、遷座されるたびにその地で水を湧出させ、人々の暮らしを支えてきた。その伝説は今も集落に残されている。というより、これらの水の拠点はもとより優れた湧水地、地下水源としてあり、人々の生命をつないできた。そのようなありがたい場所を守護するために、水の神が勧請されたと考えられる。

例えば、水の拠点 I は東強清水である。この地は石清水八幡宮から分霊された御神体が佐渡に上陸した地点であるが、仮置きされただけで（その間にも水を湧出させたが）、すぐに国見峠周辺（水の拠点 II）に遷座、久知郷の総鎮守とされた。なぜこんな小佐渡

山脈の山の上に総鎮守が置かれたのか。それは、この山域が久知郷の母なる川、久知川の水源地帯だからであろう。しかし集落からあまりに遠かった。そこで久知八幡宮は現在の地に遷座されるわけだが（水の拠点 III）、これも榎の木清水の湧水を守護するという意味があったのではないか。最後の、水の拠点 IV は久知川ダムによるもので、八幡神とは関係のない、近代技術による水源の守護だが、久知川の水資源を守ろうとしていることに変わりはない。ダムといえば、久知川中流は城腰に鎮座する中嶋神社（城腰弁財天）。この社は、下流の農業用水を確保するための堰を守護する「インフラ」だった。したがって、中嶋神社はいうなれば「中世のダム」である。

余談だが、中嶋神社にある堰（弁天堰）はサケ（鮭）が遡上できる堰だそうである。しかしその上流にあるヒアラ堰はサケ止めの堰。よってさらにその上流の久知河内にはサケが上ってこられない（久知河内ホテルの会「昔からずっと、川とともに、久知河内」）。

#### 引用文献

1. 「久知城（馬坂城・両津市城ノ腰）」余湖くんのホームページ, <https://yogokun.my.coocan.jp/yogokun/kujisado.htm>, 2025年12月22日閲覧
2. 「久知河内集落の概要」佐渡市ホームページ, <https://www.city.sado.niigata.jp/uploaded/attachment/17382.pdf>, 2025年12月27日閲覧
3. 「木造阿弥陀如来坐像」佐渡市ホームページ, <https://www.city.sado.niigata.jp/site/bunkazai/4984.html>, 2025年12月27日閲覧
4. 「久知八幡宮例大祭の奉納芸」佐渡芸能アーカイブ, <https://sado-geinou.com/geinou/kuzihachiman/>, 2025年12月9日閲覧
5. 一般社団法人新潟県環境衛生研究所 (2015a) : ⑮榎の木清水, 『佐渡の湧き水～貴重な自然をたずねる～』, p. 85, <https://www.kanken-net.or.jp/ebook/sadonowakimizu/index.html#page=91>, 2025年12月24日閲覧
6. 前掲4, YouTube 佐渡の芸能～久知八幡宮まつりの花笠踊り, <https://www.youtube.com/watch?v=aFNUQ1jnEYo>, 2025年12月9日閲覧
7. 一般社団法人新潟県環境衛生研究所 (2015b) : ⑮榎の木清水, 『佐渡の湧き水～貴重な自然をたずねる～』, p. 82, <https://www.kanken-net.or.jp/ebook/sadonowakimizu/index.html#page=89>, 2025年12月24日閲覧
8. 一般社団法人新潟県環境衛生研究所 (2015c) : ⑮榎の木清水, 『佐渡の湧き水～貴重な自然をたずねる～』, p. 85, <https://www.kanken-net.or.jp/ebook/sadonowakimizu/index.html#page=91>, 2025年12月24日閲覧
9. 一般社団法人新潟県環境衛生研究所 (2015d) : ③三郎右衛門の川, 『佐渡の湧き水～貴重な自然をたずねる～』, p.157, <https://www.kanken-net.or.jp/ebook/sadonowakimizu/index.html#page=163>, 2025年12月25日閲覧
10. 一般社団法人新潟県環境衛生研究所 (2015e) : ⑮榎の木清水, 『佐渡の湧き水～貴重な自然をたずねる～』, p. 84, <https://www.kanken-net.or.jp/ebook/sadonowakimizu/index.html#page=91>, 2025年12月24日閲覧
11. 一般社団法人新潟県環境衛生研究所 (2015f) : ⑯アブン坂清水, 『佐渡の湧き水～貴重な自然をたずねる～』, p.89, <https://www.kanken-net.or.jp/ebook/sadonowakimizu/index.html#page=95>, 2025年12月26日閲覧
12. 久知河内ホテルの会：昔からずっと、川とともに、久知河内, <http://satochi.net/sado/file/sado001.pdf>, 2025年12月27日閲覧

## 島の開かれと閉じられ 2025 年度佐渡島疾走調査

一 福島加津也（東京都市大学／福島加津也＋富永祥子建築設計事務所）

### 1. 調査地について

新型コロナウイルスのために中断していた千年村プロジェクトの疾走調査は、再開した 2023 年度に琵琶湖湖東、2024 年度に長野県中部、そして今年の 2025 年度は佐渡島と順調に調査を重ねることになった。離島での集落調査は千年村では初めてであり、個人的にも瀝青会による 2007 年の伊豆大島以来約 20 年ぶりになる。新潟からフェリーに乗り、2 時間半の船旅を経て佐渡島が見えてきたときには、不思議と気分が高揚した（**図 4-3-1**）。海を渡るということは、地上を移動することとは異なる体験だ。



図 4-3-1

カタカナの「エ」のような形をしている佐渡島は、北に大佐渡山地、南に小佐渡山地という 2 つの山地を持ち、この間に肥沃な国中平野が広がっている。国中平野は離島の平野としては広範囲で稲作が行われているが、千年村候補地は南側に集中しているのはなぜだろうか（**図 4-3-2**）。



図 4-3-2

### 2. 担当郷について

私たちが担当した集落は、私たちが担当した集落は、国中平野の南側で小佐渡山地の麓にある賀茂郡植栗郷（現佐渡市栗野江）である。大字の大部分は山地となり、平野の水田は部分的で、多くの民家は平地から一段高い台地の上にある。このことから、元々は稲作ではなく畑作や林業を生業としていたと推測される。台地のさらに上にある中世の栗野江城の跡地からは、国中平野を一望することができて（**図 4-3-3**）、地理的に重要な地域だったこともうかがえる。



図 4-3-3

大字の西側には中世から続く加茂神社がある。その境内は集落の規模からするとかなり大きく、佐渡島を代表する独立型の能舞台を持っている。境内社の金立神社は、小さい建築にアンバランスなほどの大き

な屋根が架かっていて、優美な意匠が多い日本の寺社建築の中では異形といえる(図4-3-4)。



図 4-3-4

一方で、集落の中には小規模なお堂が数多く点在していた。この集落では、加茂神社のような大きな信仰と、小さなお堂による日常的な信仰が、重なり合っているように感じられた。

### 3. 島の開かれ

大字は県道 65 号線によって平地の西側と台地の東側に区切られ、集落は平地からゆるやかな斜面を介して台地の上にある。地形の斜面に沿って線状に林があり、その線状の林によって集落はいくつかの島状の小台地に分けられている

民家はその島状の小台地の中に一軒から数軒で点在しているため、地図上で集落は島状にまとまっているように見えるが、実際に歩いてみると街並みのようなものは感じることはできない(図4-3-5)。小台地の間にあるささやかな谷地は、水田としていねいに整備されていた(図4-3-6)

この集落は小台地によって適度にまとまり、その中にある民家は隣家と距離をとって適度にばらけていて、地形も穏やかで見通しも良いため、豊かな集落に特有ののんびりして心地よい「開かれ」が感じられ

た。



図 4-3-5



図 4-3-6

### 4. 島の閉ざされ

しかし、民家に近づいてみると広い敷地の中には大きな母屋や蔵、作業小屋など多くの建物があり、その周りを小規模な水田や畑が取り囲んでいることが分かってきた(図4-3-7)。自分たちで作ったと思われる独自のため池を持つ家も多く、自分の家だけでも生活していくことができるように、持続に必要な要素を精一杯集めているのだろうか。新しく建替えられた住宅も、母屋の中に多くの機能を内包するために他の地域と比べて大きくなっているように見える(図4-3-8)。佐渡島のように、海によって閉ざされた地域で生活を長期間に持続するためには、集落としてまとまりを強めるだけでなく、いざというときには一軒だけでも持続することができるよう

に、自分の土地の中に生存のための要素を一揃い保持していくことが求められたの  
だろうか。そこから、共同体を内包した中  
世の城塞や修道院のような「閉ざされ」を  
感じるようになった。



図 4-3-7



図 4-3-8

## 5. 考察

今回の調査地域である佐渡島は、孤島と  
いうイメージに反して大らかな平地があ  
り、歴史的にも様々な文化が流れ着き、そ  
れを受け入れて定着していた。そのため、  
疾走調査中も多くの集落で他者を歓迎す  
るような風通しのよい空気が流れていた。

その一方で、担当した集落の民家が多く  
の生存要素を取り込み、自分たちだけで  
持続することができるようにあったこと  
は、とても興味深い。小さくて閉鎖された  
地域のために、社会の体制が短期間で大き

く変容する可能性が高く、上部構造や外部  
要因に頼らないで自分たちで生きていけ  
るように、という強い意志を感じた。

このような島の「開かれ」と「閉じられ」  
は、佐渡島全体の文化とも深く関係してい  
るが、千年村に通底する持続の秘密の一つ  
であるようにも思えて、それを実際に体感  
することができたことは、今回の疾走調査  
の大きな成果であった。

また、今回の疾走調査の運営面で特筆す  
べきことは、最後の調査発表を佐渡島から  
新潟に帰るフェリーの中で行ったことだ  
ろう。船内のイベントスペースを自主的に  
占有して（笑）行われた各チームのプレゼ  
ンテーションは、必然的に一般の乗船客の  
眼にもさらされることになった。しかし、  
それは学生たちにとって程よい緊張感と  
なり、移動中という高揚感とも相まって、  
とても濃密な体験となった（図 4-3-9）。

今回の学生幹事はさぞ大変だったこと  
だろう。東京都市大からは多くの学生が参  
加させてもらったが、事前の入念な計画や  
現地の機転の利いた運営によってとても  
楽しく疾走することができた。都市大を代  
表して感謝を申し上げたい。（了）



図 4-3-9

## 村の安定装置としての台地

—東京大学 林憲吾

### 1. 大目郷の位置

のっけから過ちを打ち明けておきたい。千年村の疾走調査では、複数の班に分かれて調査に繰り出し、1日に複数の千年村候補地を疾走するが、各班には担当郷が設定されている。野帳を事前に準備し、訪れる場所に目星を付け、調査当日は長期にわたって持続する村の秘訣を現場で考察し、その内容をその日のうちに模造紙にまとめ、夜、皆の前で発表する。今回、そのような私の班の担当郷は大目郷であった。本報告書の郷番号では 5 番にあたり、調査当日は吉岡台地と呼ばれるあたりに目星を付け、そこを中心に回った(図 4-4-1)。だが、平安時代に『倭名類聚抄』が編まれた頃には、おそらくそこは大目郷ではなく雑太郷だったと、この文章を書くにあたりようやく気が付いたのである。



図 4-4-1 吉岡周辺の台地

(出典：本間嘉晴・本間裕亮編『吉岡惣社裏遺跡：新潟県真野町吉岡惣社裏遺跡発掘調査報告書』真野町教育委員会、1987 年、p. 5)

小佐渡山地の北側の山裾にはいくつもの台地が連なっている。吉岡台地の南西には、浜中台地、小川内台地が続き、大目郷はこの小川内台地付近だった可能性が高

い。『角川日本地名大辞典』の大目郷の項によれば、「佐渡市吉岡の小川内に大目神社が鎮座し、背後の山地を大目林と称するところから、この付近に比定される」とあり、小川内台地あたりが一つの候補地にあげられている。ただし、小川内からさらに南西 10 km ほどの地点に椿尾という地区があり、そこにも大目神社の遺称地がある。加えて『真野町史』によれば、大目郷が位置したのは羽茂郡だが、少なくとも江戸時代には小川内は雑太郡であったため、大目郷が小川内ではない可能性も指摘されている。したがって、小川内から椿尾のどこかだったかもしれない。

他方、私たちが調査した吉岡台地は、雑太郷の領域だったとみられる。台地北側の低地には、古代の国府があったとされ、そこはおそらく雑太郷の中心であったが、この低地から中世に遷された總社神社が吉岡台地にはある。また、14 世紀からここは佐渡の守護代本間氏の庶子家の拠点となったが、雑太郷の一部が彼らに割譲されたと記録が残る(『真野町史』)。

とはいえ、ここが大目郷でなかったとて、千年村の揺籃だったことに変わりはない。例えば、吉岡台地の先端にあたる總社神社の北側には、現在、戸建ての住宅団地が立ち並んでおり、調査によって私たちはそこがいまから 35 年前に町営住宅として開発された場所であることを知るのだが、実はそこは、町営住宅の建設計画が持ち上がったことで実施された発掘調査によって、縄文時代の住居跡が発見された場所でもあった。私たちは期せずして佐渡で最も古くから人が住んだ場所の一つに辿りついたのである。



図 4-4-2 吉岡台地の總社神社 (筆者撮影)

## 2. 複雑な字界

ところで、なぜ私たちは郷を取り違えてしまったか。原因の一つは、現在の大字の複雑な形状にある。平安中期には雑太郷、竹田郷、岡郷、大目郷の4つの郷がこの辺りに近接していたとみられているが、『角川日本地名大辞典』でもそれぞれの郷域は明らかになっていない。そのようなとき、

疾走調査では現在の大字を単位にその郷の様子を推測する。だが、この地域の大字は形状がとりわけ入り組んでいることに加えて、一つの大字に複数の郷が比定されていたり、一つの郷が複数の大字にまたがっていたりするため、推測はとても難しい。

例えば、大目郷が比定されている吉岡(図 4-4-3 の黄色の領域)には雑太郷も比定されており、真野を挟んで東西に存在する吉岡の西側が大目郷、東側が雑太郷だった可能性が高い。『真野町史』には、現在の真野の辺りは近世に竹田から分村したとあるから、近世はじめは竹田と吉岡、国分寺あたりがこのあたりの大きな村であったと考えられる。

しかし平安中期にまでさかのぼると、4つの郷が分布していた。つまり4つの郷のまともりは、中世を通じて所領が動いて別のまともりになり、さらに近世には分村が進

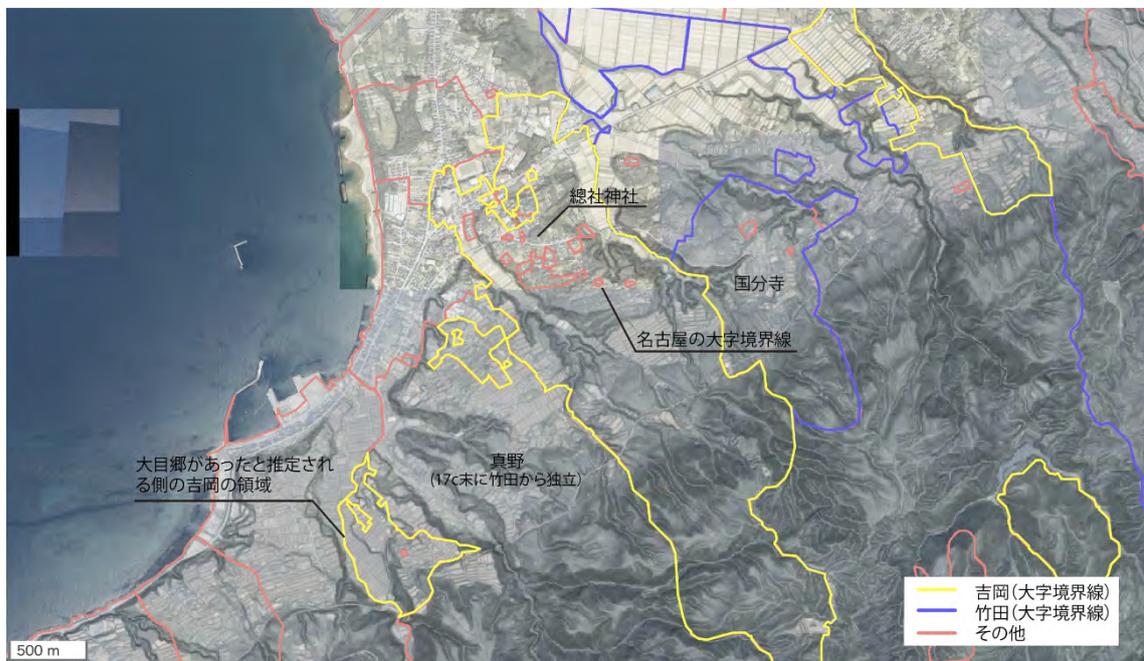


図 4-4-3 調査をした總社神社のある  
吉岡台地周辺の大字境界

(地理院地図および令和2年国勢調査町丁・字等別境界データを元に筆者作成)

んだ。その結果、そのプロセスを反映した現在の大字からは、かつての郷のまとまりを判断することが困難になったのだろう。こうした中世以降のダイナミックな領地の動きは、古代よりここが佐渡統治の中心だったからではないか。統治者の入れ替わりや内乱による分裂や征服など、農とは異なる政治や軍事の論理が強く働く、いわば都市性が相対的に高い地域だったことの現れだと考えられる。

### 3. 低地から台地へ

大字という政治的、社会的な境界からは見えにくくなったかつての郷のまとまりだが、山地—台地—低地（または海）という小佐渡山地北側の自然環境の構成を念頭に置くと見えてくるのかもしれない。

佐渡の千年村は小佐渡山地北側に 7 割が存在する。越後から海を渡り、小佐渡山地南側の松ヶ崎に着いた人々は、峠を越えてか海伝いにか山地の北側に向かい、広大な国仲平野を目にしただろう。この平野には古代の条里水田の跡も出ているように、食料生産の基盤となる豊かな低地を前にして、そこに腰を落ち着けようと思ったに違いない。とりわけ雑太郷周辺は、ある時代までは小佐渡山地南側からの玄関口であったようなので、古代、中世をとおして新たな権力者がやってきては入れ替わり、拠点を構えたのも頷ける。国仲平野や海は、食料生産の基盤であり、いわば千年村を生み出すスターターであったといえる。

それに対して低地と山地に挟まれた台地は、千年村の安定装置ではなかったか。生活の拠点として、おそらく初期は低地近くを好んだが、上述の吉岡台地の縄文住居

跡のように、水害を避けたり、水を得たりするのに有利な台地の先端部に拠点を築いた事例が多かったのではないか。その後、台地の上を開墾できる技術が整うと、台地と低地の二段使いが広がり、水害リスクの低い台地へと拠点の中心が移っていったと考えられる。調査した吉岡台地は、台地自体に若干の高低差のある二段の面からなっていて、一段目には低地から遷された總社神社があり、二段目には一段目から移されたこの地を治めていた吉岡殿の居城がある。中世を通じて上へ上へとこの地域の重心が移っていった様子を見て取れた。

この低地—台地—山地のセットを生存の基礎単位と考えれば、図 1 のとおり、現在の竹田、吉岡、真野周辺には、東から西へ、竹田台地、吉岡台地、浜中台地、小川内台地が連なるため、あくまで推測だが、かつての 4 つの郷はそれぞれの台地とその前後の低地または海と山地に対応したのではないか。

ところで、低地と山地に挟まれた安定装置としての台地の働きは、この地域の複雑な大字の形状に影響していることに、調査の途中で私たちは気付くことになった。台地上段の一軒のお宅でご主人にインタビューをしていた時のことである。その地区の大字は吉岡だが、その家だけは大字が名古屋なのだと、郵便はがきに書かれた住所を見せてくれた。名古屋とは、吉岡台地の先の低地に位置する大字だが、この家は江戸時代に水害を避けるため本家ごと台地の上に移ってきて、その履歴が現在の大字に残っているという。そう聞いて地図を見ると、たしかにこの家は吉岡の大字が虫食いのように名古屋になっており、このあた

りの大字にはそのような虫食い状の大字が多い。それらも同様に水害の多い低地から台地への移動を表している可能性が高い。台地は低地の安全弁なのだ。



図 4-4-4 台地上段の集落 (筆者撮影)



図 4-4-5 集落南側の棚田 (筆者撮影)

#### 4. アテネ憲章から千年村憲章へ

ところで、島の千年村調査となった今回の疾走調査は、最終日の発表会を新潟に戻るフェリーの上で行った。その時、私が真っ先に頭に浮かべたのは、1933 年の第 4 回 CIAM (近代建築国際会議) である。あの時、近代主義を標榜する建築家たちはマルセイユからアテネに向かう船上で都市の未来を語り合った。そして、あれから 90 年以上を経た 2025 年 10 月 13 日、佐渡から新潟に向かう船の中で、私たちは村を議論している。

この 90 年の時代のうねりを象徴した出来事といえないだろうか。あの時、建築家たちはアテネ憲章をまとめたが、実はこちらは千年村憲章を 2016 年に打ち出してしている。この憲章が佐渡からの船上で少し改訂されたことにでもすれば、後世の建築史家たちが、この日を歴史の一大事として語ってくれるかもしれない。もちろんそれは冗談だが、それでもこの船上の発表会は千年村史に残る出来事だったにちがいない。

(了)



図 4-4-6 船上での発表会 (筆者撮影)

## 真野の入江

### 一 滋賀県立大学 川井操

今年の佐渡島疾走調査は、10月11日から13日までの2泊3日の行程だった。例年より1日多い日程であり、より密度の高い調査や調査地以外の千年村候補地も回る事ができる。新潟港からフェリーで佐渡島に渡る。2時間の船旅。機内にはラーメン屋や自販機など思ったより充実している。到着後、班ごとに集まり初顔合わせ。レンタカーに乗り込み疾走調査がスタートした。グループメンバーは、社会人で慶應SFC石川研OBの稲田さん、都市大修士1年の大谷くん、萩谷くん、慶應SFC4年生の中村さん、私の5人グループである。

私たちの担当郷は雑太郡岡郷である。岡郷は、現在の吉岡や真野と呼ばれる地域に該当する。吉岡には国分寺跡や總社神社、国府へと繋がる官道がある。現地の解説文によると、總社神社は、佐渡国の総社であり、古くは八社林（中沢田集落、現地より東に500mほどのところ）にあったが、徳治2年（1307）に吉岡地頭本間氏によって現地に移されたものであり、總社神社に改められた。真野地域は、北に高立川、南に真野川が流れていて、主なエリアは台地上にあたる。台地にある真言堂付近から真野湾が一望できる。民家は散居村的に散らばっていて一軒あたりの規模も大きい。各民家には大陸からの北西風を守るために屋敷林が立ててある。田んぼに回すための溜池も散見された。真野には、承久の乱（1221）で敗れ、佐渡へ配流となった順徳天皇の火葬塚（真野御陵）がある。そこから

真野川を下ったところにある真野宮はかつて真輪寺と呼ばれ、順徳天皇の行在所であったという。明治の神仏分離令による廃仏毀釈の影響によって、廃寺となった後に、順徳天皇を祭神として真野宮となった。



図4-5-1 真野の台地にある  
真言堂付近から真野湾を望む

真野という地名は、順徳天皇が移り住んだ際に、近江国真野にちなんで名付けられたという説がある。近江国真野は現在の滋賀県大津市にあたる。古くからこの辺りには古代の有力豪族の和邇（わに）氏が住んでおり、持統天皇時代には真野臣（まのおみ）の性を賜った一族が住むようになった。大津市の真野の地名については、藤井哲也氏のWEB記事に詳しい。（「大津市の「真野」の地名について【前編】」<https://note.com/fujiitetsuya/n/n4c7df88ebb19>、【後編】<https://note.com/fujiitetsuya/n/n1ec831d84ebc>）。真野とは「美しい野」という意味で、丘陵が琵琶湖に迫った地形が、この付近で大きく開けており、景勝地であることから地名になったという。奈良から平安時代にかけて滋賀郡におかれた四郷の一つに真野郷がみえ、「真野の入江」は万葉集の歌枕に数えられる。

浜風に尾花が露はたまら  
ねど真野の入江に月は澄みけり  
鶉鳴く真野の入江の浜風  
に尾花波よる秋の夕暮れ

真野の入江は、現在の真野・東浦や今堅田、堅田内湖あたりにあたるといふ。万葉集に幾度となく使われる近江国の「真野の入江」は風光明媚な景観を持つ場所だったことに違いない。

さて、佐渡に流された順徳天皇は和歌や詩に熱心であり、在島中の詠歌として貞永元年（1232）の『順徳院御百首』が残されている。そして順徳天皇の辞世の句には「真野の入江」が使われる。

思いきや雲の上をば余所に見て真野の  
入江に朽ち果てむこと

承久の乱で佐渡島に配流され、思いがけず雲の上(都)を余所(他人のところ)で見る

ことになったという嘆きの言葉として知られる。順徳天皇の行在所だった真野宮は、真野川口付近の台地の境界部に位置する。台地と沿岸の法面は急勾配な段上となっており、かつては台地の麓まで水域があったことが予想される。台地の下付近が真野新町と呼ばれることから比較的新しい場所であることを物語っている。当時、真野宮は真野の入江と呼ぶに相応しい場所だったのだろう。そして、万葉集の枕詞である「真野の入江」をあえて辞世の句で使ったのは、都に程近い近江国の「真野の入江」からみた景色と重ね合わせたのかもしれない。(了)

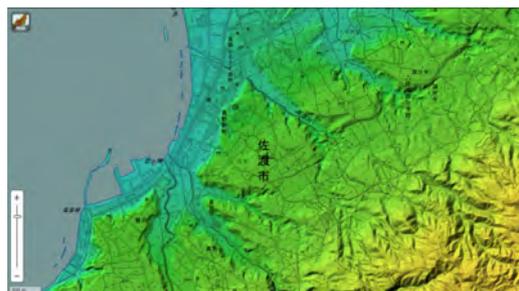


図 4-5-2 真野周辺の国土地理院標高

## 「2つの島」の住まい方

一田熊隆樹

佐渡島では、ひさびさに“疾走”した感覚がある。2泊3日でタイトなスケジュールの中、担当郷に限らずすべての集落を実見しようと努力した。結果1つだけ見落とした集落はあったが、「ざっと見る」という疾走調査の目的は果たされたように思う。

佐渡は2つの島（大佐渡・小佐渡）が溶け合うようにして形成されている。プロットされた千年村候補地のほぼ全てが東側の小佐渡に分布するのは、日本海の厳しい冬の海風を標高の高い大佐渡が壁になって遮ることによって、小佐渡側に住みやすい環境が形成されたからか、などと考えながらフェリーで島に向かった。

訪れた集落はどこも素晴らしく、古跡にあふれ、話を聞いた人々も皆オープンで気持ちよかった。古くから交通の要衝として栄えた島に備わった開放的な雰囲気は今なお残っている感じがした。「ざっと見る」ことの醍醐味は、この場所の環境と人の営みの関係性を大胆に掴み取ることだろう。今回はこの島の段丘を中心として、集落の傾向を論じてみることにする。

### 1. 段丘面の使い方 -3つの分類-

調査対象の千年村候補地 01~05 は、海沿いの低地+段丘面という関係の中で語ることができそう。佐渡の大きな環境的特性の一つとして、かつての海底が隆起していくつかの平坦な段丘

面を形成する海成段丘がある。実見した【02 久知郷】は、一見するとまったく異なる集落（海沿いの漁村的配置の集落と、段丘面上の農村）がセットとなり存在しているようだった。海沿いの「野崎」とそこから20mほど上がった細長い段丘面の「下久知」が大字「下久知」を形成しており、祭礼上のつながりもあることが調査メンバーの報告によってわかった。またメンバーの報告によれば同様に【01 賀茂郷】も段丘上下でひとつの集落として成立していることがわかった。段丘上下にまたがってひとつの村としてある事例は、2014年度に詳細調査を行った群馬県高崎市神保（「上下村」と名付けた）を思い出させた。段丘上下という環境の違いによって生業のバランス、開発の受け入れ度合いのバランスを調整しているようなスタイルが共通する。そうやって一度にダメージを受けることのないよう災害リスクや時代の変化に対応し、村は柔らかくしぶとく続いていくのだ。しかし3日間も集落を疾走してみると、この「段丘面の使い方」にも、いくつかの類型がありそう。2日目の朝に寄った（調査対象地ではないが魅力的な）真野湾豊田漁港に面する豊田集落でもその典型的なパターンを感じる事ができた。豊田集落はプロットこそされていないが、【04 岡郷】のある大字吉岡に隣接する。佐渡市HPの遺跡一覧によれば、集落内唯一の寺院である大光寺（807年に起源をもつ）の付近では縄文や古墳時代の

遺跡も発見されていることから、千年村としての可能性は高い。歯磨きする手を止めてまで話をしてくれた初老の男性によると、ここは漁港沿いに線上に広がる集落があり、高低差約25mある段丘上には集落の農地と墓があるのみ（まばらに建物は確認できるが）だという。海沿いの低地で漁業をしながら、ちょっと上がった広い段丘面で農業をするという半農半漁の生活が、非常にわかりやすく展開されていた。実際に登ってみると、この20-30mという高さは段丘下を見下ろすには遠すぎず、心地よい距離を感じた。このとき段丘面の農地は、住む場所というよりは毎日通う「仕事場」のようなイメージだろうか。この段丘面は普通に考えれば畑地として利用された（段丘面上は水が乏しいため）のだろうが、後世の人口増加（金山開発など）によって田んぼが増えた時期に、水利技術と共に現在のような水田の並ぶ景観になったのだろう。おそらく、これは上記

【01 加茂郷】や【02 久知郷】のような「段丘上下それぞれにまとまった居住地が存在しひとつの集落としてある」形態よりももっと原型的なものなのではないだろうか。この豊田のモデルを<半農半漁型>と名付け、【01 加茂郷】や【02 久知郷】のようなものを<上下一体型>と名付けてみよう。<半農半漁型>の段丘上農地が農地としてだけでなく居住地としても発展していくと、徐々に<上下一体型>へと変容していくのではないかと考えられるが、ここで【04 岡郷】を見てみると、

事態はもう一つの様相を呈する。



図 4-6-1 漁港、豊田集落と  
上部段丘面の農地・墓



図 4-6-2 豊田集落段丘上の  
墓・農地から真野湾を見下ろす

調査メンバーの報告によれば、【04 岡郷】は段丘上のみ集落で、段丘下とは明確に別の集落として存在しているようだ。その理由を考えてみると、同じくメンバーにより指摘されている溜池の存在が大きいのではないか。溜池はいわば、本来農地としてしか使えない土地を、無理矢理住めるようにする装置なのだろう。こうして上下が分かれた形態は、もう一つの<上下分離型>と分類できそうだ。

以上の段丘上下にまつわる3つのモデルをまとめると次のようになる。  
半農半漁型：海沿いの低地に住み着き、台地上も農地として利用する「半農半漁」の集落

上下一体型：台地上に住む人々もいるが、上下のエリアがいまだ一つのまとまりを持つ集落

上下分離型：台地上に住む人々が「独立」し、低地と台地で分離した集落

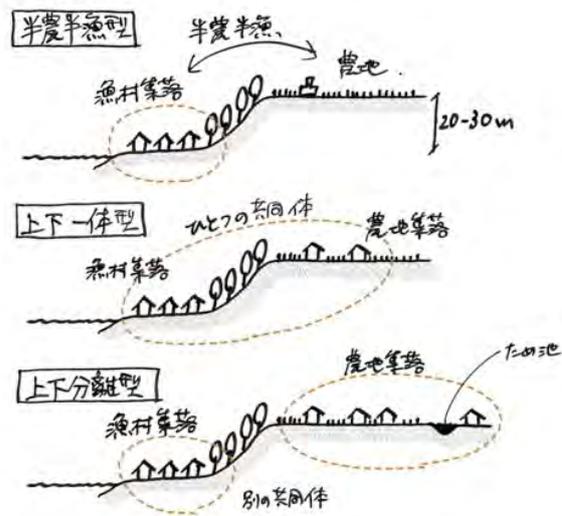


図4-6-3 段丘面の使い方集落を3つに分類

これは佐渡という島が隆起し続けた結果できた海成段丘をどう使うかというパターン分けであるが、「持続する村」という観点で考えるとやはり段丘上下の使い分けが可能なく上下一体型>が最も「千年村的」であると思う。

## 2. 意外な緩斜面

-2つ島からできているということ-

担当郷であった【10大野郷】には、3日目に訪れた。2日間で見えていた各集落の環境とはちがい、緩斜面をもつ台地上に屋敷が距離を空けて分布する散村集落である。海が見えないことに加え、この緩い斜面の広大さは、島であることを忘れさせるような意外な風景だった。どこか長野県のような牧

歌的な雰囲気を感じた。

この緩斜面は、小佐渡・大佐渡という二つの島が隆起してできた段丘のあいだに土砂が堆積し、国中平野としてつながることで形成されたものである。つまり佐渡が1つでなく、2つの島から成り立っていて初めて生まれた、佐渡らしい風景であると言える。

ここでは斜面の中腹あたりに特に古い遺跡が見られるようだ。遺跡から山側への展開は中世以降らしいが、大きな段丘に隔てられた性格の違う環境ではなく、似たような環境があくまで連続して規模を大きくしていく形で発展してきたのだろう。屋敷は微高地に建ち、広い斜面を吹く風から守るための防風林が印象的だ。1.で分類したもののどれとも違う型、言うなれば<国中緩斜面型>であると言える。

以上の4つの分類をもって、佐渡の千年村候補地をざっと見た所感とした。もちろん、ここで触れていない集落もあるため、あくまで国中平野近くの佐渡千年村のパターン整理として受け止めていただきたい。

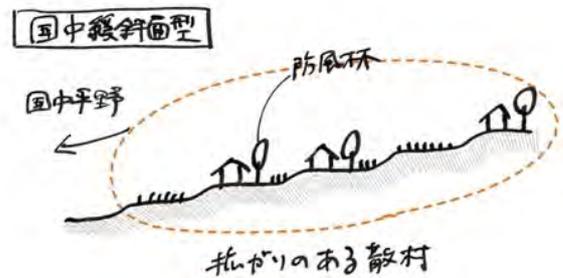


図4-6-4 国中緩斜面型

### 3. 高すぎた段丘面 -大佐渡報告-

メンバーが調査を終え、新潟港へ向かうフェリーでポスター発表をしているその時に、延泊して大佐渡を巡った。千年村候補地のプロットがないことが気になったし、せっかく行ったのだから見ておきたいと思った。ポスター発表を欠席した代わりに、大佐渡の様子も記しておこうと思う。大佐渡は小佐渡とはちがうダイナミックな景観が連続する場所だった。古跡などの見どころが多い小佐渡に対し、大佐渡の見どころはその人間スケールを超えた自然環境である。それら魅力ある奇観に圧倒されるとともに、「千年村の不在」の理由もなんとなく見えてきた。

大佐渡の海沿いをぐるりと見てみると、海沿いには小佐渡と同様に漁村と背後の海成段丘が続くのだが、多くの段丘面は50-100mにまで及ぶ崖になっている。それは小佐渡で見たものの3倍くらいの高さがあることになる。車のない時代にこの段丘上に登るのはかなり大変だろうから、頻繁に（例えば1日何度も）往復するような利用がされていたとは考えにくいと思った。段丘上には農地こそあれ、ほとんど居住地がなかった。その農地は、佐渡金山が展開した江戸時代に今のように整備されたものではないかと思われる。どうやら段丘には人間が使うのにちょうどいい高さがあるということらしい。小佐渡ではそれが20-30mであり、大佐渡のように50-100mともなると、人間が扱えないスケールになり、

段丘上への集落の展開も見られなかった。日本海の厳しい海風に加え、これが大佐渡に千年村的候補地がないことの大きな理由のひとつであると思われる。非凡な景観の中には、平凡な村は生まれにくいのかもしれない。

大佐渡で宿泊した民宿では、ずいぶん豪華な海鮮が出た。他に客は一組。実家を継いだ中年の主人と共に切り盛りする女将が、中国から嫁いできたことに驚いた。やはり佐渡という島には、外からの人を受け入れ続ける力があると思った。(了)



図 4-6-5 名所になっている二つ亀



図 4-6-7 崖下に墓のある名所



図 4-6-8 泊まった民家のある高千、北田野浦付近。大佐渡の段丘は時に高さ 100m もある (出典: Google Earth より)



図 4-6-9 段丘上の農地。  
崖下の集落とは別世界



図 4-6-10 高千集落。この集落では牛を飼っていたという。家の前にかつて牛がいたらしい痕跡が残る



図 4-6-11 段丘が高すぎるからか、墓も低地につくり、集落と共存する

## 佐渡の千年村は都市的に見える気がした

—近藤真

今回の佐渡疾走調査で、学生時代から数えて5回目の疾走調査であった。過去の調査地と比べると、なぜか佐渡の千年村は、これまで見てきた千年村の中でも都市に近いように感じられた。佐渡とこれまでの調査地との違いはいくらでも挙げられるが、「調査地が島であること」と「対象郷がひとつの自治体内に立地していること」の2点は決定的な違いである。本稿では、直感を信じて、「佐渡の千年村が都市的に見えた」理由を考えてみたい。

### 1. 相対的に栄えているように見える佐渡の千年村

私がこれまで参加した疾走調査の候補地は、神奈川県相模川流域、茨城県の霞ヶ浦周辺地域および筑波山周辺地域、滋賀県の湖東地域で、調査当日の朝に東京から向かい、調査に臨んでいた。そのため、各地で出会う集落や農地を、無意識に朝見てきた東京の街並みと比較してしまっていたように思う。一方、今回の調査では、フェリーから眺めた水平線で視界をリセットし、島内に前泊することで東京の残像を忘れ、新鮮な目で調査に臨むことができた。そんな目には、今回の調査対象郷は、佐渡島の他の場所と比べると、比較的栄えているように映った。これまでの調査地は、経済活動の場という現代の目線で単純化すると、その地域の現代の経済活動のコアとなる市街地があり、ある種のサテライトとして農業生産を基盤する集落があるとい

う構図であった。千年村比定地は、かつてはコアであった集落も多かったかもしれないが、現代では市街化が進みコアとなるか、土地利用を大きくは変えずサテライトとして存在しているかのどちらかが多かったように思う。

佐渡島の千年村比定地は、農業生産を基盤にしつつも、一部の集落では商業施設や行政機能が集積するなど、コアとサテライトの中間の性質を持つ集落が確認された。かつての調査地でも同様の土地利用の千年村比定地はあったように思うが、佐渡島の千年村比定地は、相対的にサテライトではなくコア寄りのポジションにいるように思えた。両津港周辺や金山のある相川周辺など現代での開発が進んだ場所はあるが、やはり関東・関西圏に比べるとその開発圧力はマイルドであったのだろう。古代から中世に確立された千年村比定地の経済活動の場としての地位が、開発圧力に晒されづらいうことで固定され、現代まで持続していると言えるのではないだろうか。首都圏



図4-7-1 フェリーで視界をリセットする様子（永井撮影）

の開発は外圧によって生じるが、佐渡島は本州からのアクセスの難しさゆえに、金山・観光を除きおのずと内需に基づいた開

発が中心となる。そうなる千年村のように、すでに集落が形成されている場所に、集落と共存する形で開発が行われるのかもしれない。

## 2. 佐渡市の行政機能の拠点となる千年村

ここまでは私の目線から、佐渡島の千年村が、比較的都市に近い位置づけに見えることが書いたが、もう少し客観的な目線を補足しておきたい。ここで今回の調査地がひとつの自治体であることが効いてくる。ひとつの自治体内に立地しているということは、ひとつの行政計画の中で、各千年村の位置づけを確認することができる。複数の自治体にまたがると、自治体ごとに計画の考え方が異なるため、行政から見た集落の捉え方を比較することが難しいが、今回は佐渡市の方針に基づいて、調査地の位置づけを確認することができるというわけで

ある。

「佐渡市都市計画マスタープラン」では、佐渡市のまちづくりの基本的な骨格である佐渡市都市構造図として、主要拠点が指定され、その整備方針が示されている。主要拠点のうちの「都市拠点」と「地域拠点」を調査対象郷に重ねた図が下右図である。近代以降に整備された港町を除く地域拠点が千年村比定地と重なり、地域拠点の過半が千年村比定地であることがわかる。地域拠点は、「都市拠点以外の旧町村の中心部周辺を位置付けます。市役所支所機能をはじめ、日常生活サービスなどの維持充実を図ります。」とあるため、千年村比定地と重なることは当然ではあるが、千年村が、現在の行政計画においても重要な場所として位置づけられていることは示唆的である。外部の開発圧力に晒されない場合は、千年村は時代を超えてその地域の拠点であり続けるのかもしれない。言い換えると、

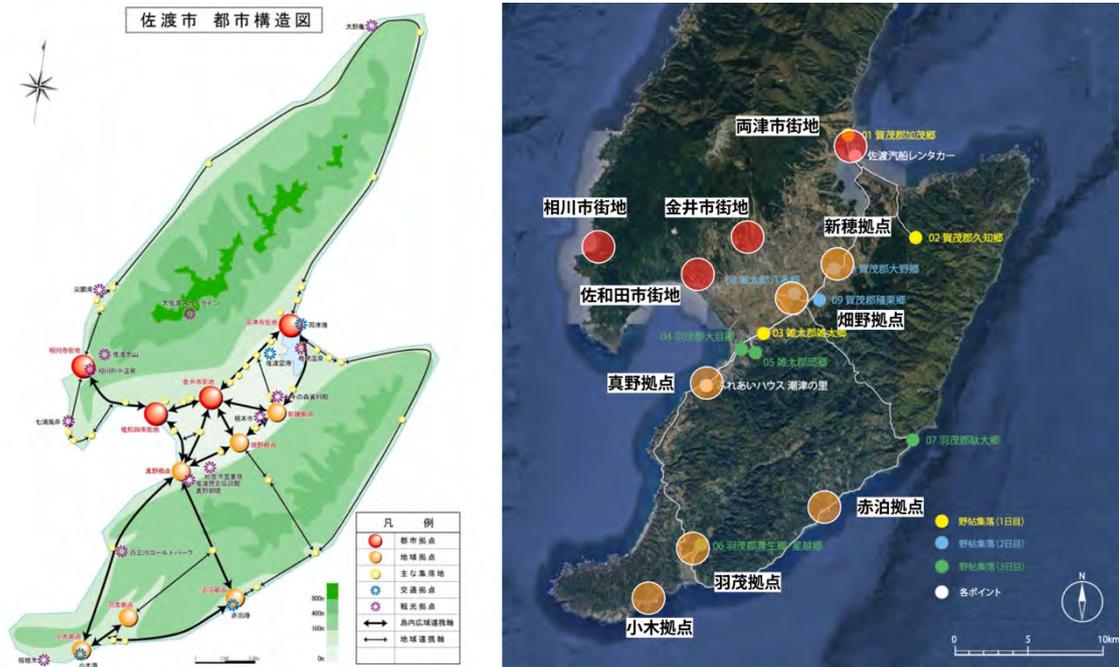


図 4-7-2 疾走調査対象地と都市拠点・地域拠点の重なり

(左：佐渡市都市計画マスタープラン/右：Google Earthに加筆)

佐渡の千年村は、農業生産を生活の基盤として維持しつつ、都市的な土地利用をうまく受け入れ、それらの土地利用を共存させていると言えよう。

### 3. 農村的土地利用と都市的土地利用の共存

農村的な土地利用と都市的な土地利用が共存しているとはどういうことか。これは、千年村でよく見られるしたたかな土地利用の変容が行われたということである。ここからは、私の班の担当郷であった 06 羽茂郡菅生郷・星越郷を例に都市的な土地利用の広がりを目指して追いかけてみたい。調査地全体の詳細は各郷報告のページを参照してもらおうとして、ここではどういう場所が各時代において開発されたかについて考えていく。

まずは地質と主な土地利用について見てみたい。地質としては、台地の間を羽茂川が流れ、羽茂川に沿って低地が形成されている。土地利用は、台地は山林、低地は水田を基本として、台地の一部に柿等の果樹園、低地の一部がまとまった住宅地とな

っている。手に入る資料が限られているため詳細な簡単な比較に留まるが、低地に住宅地が立地していること以外は千年村でよく見られる土地利用だと言えるだろう。航空写真で、もう少し詳細に土地利用とその変容を見てみたい。現在の菅生郷・星越郷の特筆すべき土地利用は、古代から平野とその周縁に広がる水田と農村集落、中世に街道沿いに発展した羽茂城下街、現代に低地のロードサイドに開発された商業施設・行政施設である。なお、古代の郡衙設置から中世の羽茂城落城まで、900年間南佐渡の中心地であった羽茂は、金山の影響を受けなかったため近世では農業中心の集落となり、羽茂町誌によると「ぬるま湯のように変化のない羽茂の近世史」であったという。そのためか近世の目立った土地利用の変容は確認できなかった。

山林を背負う農村集落は古代から立地していると見られ、洪水浸水想定区域の際、いわゆる台地と低地の境界部に立地していることがわかる。また日当たりの良い南向きの土地であり、羽茂で家を構えるならこのあたりが最もいいエリアだろう。



図 4-7-3 菅生郷・星越郷の地質と土地利用

(地理院地図に小地域データを重ね、筆者加筆)



図 4-7-4 菅生郷・星越郷の土地利用の変容

(地理院地図に小地域データを重ね、筆者加筆)



図 4-7-5 羽茂川越しに臨む星越郷の集落。

水田から一段高い場所に位置している (筆者撮影)



図 4-7-6 菅生郷の入口付近。

ここから上り坂になり、台地と低地の際にいると感

じる (筆者撮影)



図 4-7-7 起伏のない羽茂城下街 (筆者撮影)



図 4-7-8 集落に浮かぶホームセンターと  
学校 (筆者撮影)

一方、中世以降の城下町や現代の開発である住宅や商業施設は低地の水田を埋め立てて開発されている。

こうして時代ごとの開発を眺めてみると、農村集落の基本的な形は古代に形成され、中世以降は時代の変化に合わせて、農地・城下町・商業施設など、生産地を柔軟に活用してきたと言えるのではないだろうか。菅生郷・星越郷の土地利用の骨格は、古代に完成していたとも言える。

#### 4. やはり佐渡の千年村は都市的に見える気がする

ここまで、本稿では下記について述べてきた。佐渡島の千年村は過去の調査地と比べて、相対的に都市的に見える行政計画において、佐渡の千年村は行政機能を配置する拠点として位置づけられている。菅生郷・星越郷においては、台地と低地の境界部に農村集落が形成され、城下町や商業施設など中世以降の開発は低地に立地している。これらをあわせると、佐渡の千年村は、古代に形成された集落間のパワーバランスが外部からの開発圧力が限定的であるために固定化され、現代においても他の調査地と比べ、相対的に都市的な土地利用が集積していると言えるのではないだろうか。強引なまとめではあるが、佐渡島内を疾走した率直な感想として記しておく。(了)

#### 出典

「佐渡市都市計画マスタープラン」佐渡市，平成 21 年 3 月策定 <https://www.city.sado.niigata.jp/site/plan/2566.html>

「国勢調査小地域データ（町丁・字等）」政府統計の総合窓口(e-Stat)

Google Earth

地理院地図（電子国土 WEB）

「20 万分 1 土地利用図(1982～1983 年)」国土地理院

「20 万分の 1 日本シームレス地質図」産総研地質調査総合センター

「年度別航空写真（1961～1969 年）」国土地理院

「年度別航空写真（2014 年）」国土地理院

「通史編 近世の羽茂 羽茂町誌第 3 巻」羽茂町史編纂委員会，平成 5 年発行

## ふたつの環境セット 2025 年度佐渡疾走調査

—小林千尋

2025 年 10 月 11 日から 13 日にかけて行われた佐渡疾走調査に参加した。私は佐渡島を訪れるのは初めてだったが、調査では当初抱いていた佐渡島のイメージとは異なる、良い意味でのギャップを感じた。この違和感をきっかけに佐渡の千年村の特徴を考察していきたい。

### 1. 「島」らしくなさ

調査でまず感じたのは、佐渡が「島」であることをあまり感じさせないことだった。とくに佐渡島の中央に位置する国仲平野の田んぼが水平的に広がる風景は、私が抱いていた鉤括弧付きの「島」のイメージとはかけ離れるものだった。(もっとも佐渡島の面積は 854.81 km<sup>2</sup>と北方領土を除く日本の島の中では沖縄本島に次ぐ面積を有しており、東京 23 区の約 1.4 倍の「大きな島」であることは前提としなければならない。)むしろ、佐渡調査のいくつかの村で見られた、低地—台地—山地が 1 つの環境のまとまり(セット)として印象づけられる様子が、2012 年に調査した房総半島の村の感じによく似ていた。房総半島(標高 300~400 m 級の低い山々)に比べると小佐渡の山地(標高 600m 級の小佐渡山地)の標高は高いが、平地から急に山地になるのではなく、水田と山の間には台地や谷戸があり、そこに家屋や畑が分布するなど、分かりやすい土地利用がなされていた。また水田だけでなく、畑が一定の面積で確保されており、このバランス感にも房

総半島の集落との類似性が感じられた。



図 4-8-1 国仲平野に広がる水田。

畑野下畑地区。(筆者撮影)



図 4-8-2 畑野下畑地区。

水田のなかの微高地上に家屋が立地する様子は、千葉県で詳細調査を行った島野地区の集落到に似た雰囲気を持っていた。(筆者撮影)

佐渡島全体の土地利用の割合を調べてみると、田(11.8%)畑(3.1%)宅地(2.5%)山林(33.4%)となっている<sup>1</sup>。一方で日本国土における土地利用割合は、農地(11.6%)宅地(3.2%)、森林(66.2%)である<sup>2</sup>。この比較から佐渡島における生産地と農地の割合は日本国土全体と大きく変わらないことが分かる。千年村プロジェクトメンバー中谷の報告では、佐渡はその地形・地質的条件から日本の千年村の縮図として考えられる旨の記述があったが、土地利用の観点からも、佐渡島の千年村と日本本土の千年村を横断的に考えることができそうだ。

## 2. 「島」らしさ

ここまで佐渡（一軒するだけでは）島らしくない印象に触れてきたが、二泊三日の調査全体では大いに島らしさを感じた。まずはコンパクトに島内を移動できる点。国仲平野から小佐渡山地を抜けて海岸の候補地まで車で約20分で移動でき、平地～山地～海岸と景観がガラッと変わるの島ならではの感覚だった。

次に特産物の品目の多さ。景観の変化を裏付けるように、調査中には様々な特産品の数々と遭遇した。果物ではおけさ柿だけでなく、洋梨、いちぢく、いちご、キウイ等を生産している風景がみられたが、農家による生産だけでなく、家庭菜園として庭にこれらが植えられていたのが印象的だった。海産物では赤泊にカニ直売所があり、昼食の回転寿司では地元のイカやブリが美味しかった。汽水域の加茂湖では牡蠣の養殖の様子がみられ、米づくりも含め、一回の疾走調査でここまで多様な食の風景に出会うのは初めてだった。（今回は実見することはできなかったが、佐渡では酪農

や佐渡牛の畜産業でも有名である。）

特産品の発展の背景には、対馬暖流の影響で新潟市と比べて温暖なことや、日照時間が長いといった気候的な要因もあるが、島であるがゆえに、電気等のインフラと同様に食文化もまた島内で完結できる需要があったことも、ひとつの要因だろう。月並みな言葉になるが、海から山までをぎゅっと凝縮したような魅力が2泊3日の調査で感じる事ができた。

## 3. 考察

前述の筆者が感じた佐渡の「島らしさ」は、平地（水田）、台地（居住地・畑地）山地（森林・墓地）といった日本の集落の定番といえる環境セットが佐渡の千年村候補地でよく見られたことだった。調査していて元気になるような豊かな集落に出会うことができた。

一方で筆者が感じた「島らしさ」もまた、数々の特産物に代表される、海から山までの多様な環境を一体的なまとまりとして感じられることであった。



図 4-8-3～4-8-7

左から時計回りに、3日間のGPSログ、調査中によく見た軒先に干した柿、庭先のいちぢく、加茂湖の牡蠣養殖で用いるホタテ貝殻、赤泊の直売所で購入したポイルした紅ズワイガニ

大字を単位とした環境セットと、島を単位とした環境セット。この2つの全体性を感じられることが佐渡島の千年村の特徴であり魅力であるように思う。

3日間、楽しくスムーズに調査を行うことができました。先生方、調査準備に尽力いただいた学生の皆様、大変お世話になりました。感謝申し上げます。(了)

#### 出典

(註1) 佐渡市 HP「地域の自然的・経済的・社会的条件を踏まえた既存情報の収集」

<https://www.city.sado.niigata.jp/site/sado-zero-carbon/49566.html>

(註2) 令和7年度版土地白書、P11「土地利用の動向」

<https://www.mlit.go.jp/statistics/content/001890773.pdf>

## トキと港と千年村

一永井 朝樹

### 1. はじめに

長らく疾走調査に参加していなかった私は、2018年度 筑波山周辺疾走調査以来の7年ぶりの参加であった。立場としては「大人メンバー」であるプレッシャーを感じるとともに、疾走調査のノウハウを取り戻せるか不安を抱いての参加となった。そんな私には佐渡島という対象地は、千年村としての構造がわかりやすく、リハビリには大変ありがたかった。

### 2. 佐渡島の千年村の所感

今回調査を終えて、調査した千年村全般に対する所感は下記の通りである。

- ・ 建築様式（木造建築と黒瓦屋根）が持続している。
- ・ 水田は耕作放棄されている様子はほぼ見られず、山林も管理されている様子が伺えた。（千年村でしばしば見かける、土地を売却し対価を得る生存戦略がほとんど見られなかった）
- ・ 祭礼行事に活気があり、地域経営が持続している。

上記の通り、環境・地域経営・集落構造の観点から千年村としての特徴がわかりやすく持続されていると感じた。特に、県内でも人口減少著しい<sup>※1</sup>佐渡市であるにも関わらず、生産地が荒廃せず持続されていることが印象的であった。

この持続理由の1つとして、トキの存在があるのではないかと推測する。長年その野生復帰に尽力し成功させた佐渡市において、トキの存在は非常に大きい。市のシンボ

ルとして、公式イメージキャラクターや観光資源に活用されるのみならず、総合計画<sup>※2</sup>や都市マス<sup>※3</sup>などに「トキが舞う豊かな自然環境を守る」ことが掲げられており、「自然と人の共生」の象徴となっている。その中でも「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」<sup>※4</sup>が千年村持続に一役買っているのではないだろうか。この認証制度は、トキの餌場となる水田の環境整備推進とともに、認証された水田で栽培される米は「朱鷺と暮らす郷づくり認証米」としてブランド化されるものである。これにより、生産地である水田は土地利用が継続され、ブランド米として農家の収入を支えることが、千年村持続の一因になっているのではないかと推測する。このこともあり土地を売却する生存戦略が見られないのではないだろうか。あくまで推測の域を出ないが、1種の生物が千年村持続の一因となっている興味深い事例として、その関係性が深掘りされることを今後期待したい。

### 3. 駄大郷の立地特性

上記内容では大人メンバーとして学生の皆さんに示しが見つからないので、今回調査のうち、唯一小佐渡東岸に位置する駄大郷の千年村立地特性について考察する。なお、駄大郷から北側1km弱に位置する松ヶ崎集落は今回調査の郷域フレームからは外れるが、千年以上前から集落が立地していることは確かであることから、松ヶ崎も含め述べることにする。

宮本常一著の『私の日本地図7 佐渡』<sup>※5</sup>には、多田および松ヶ崎について下記のような記載が残されている。

- ・ もともと相川の金山が発達するまでは

佐渡の中心は国府であり、国府は畑野付近であったから、そこへゆくには松ヶ崎か多田へ船をつけて小倉峠を超えるのがよい。

- ・ 松ヶ崎や多田は赤泊・小木が江戸時代に渡津として発達を見るようになると、漸次廻船業に転じていったのである。
- ・ (多田の) 廻船は七隻ほどあった。(中略) そんなに大きな船ではない。いわゆる千石船というのは松ヶ崎にあった。
- ・ 春三月になると船を下して草鞋・筵・縄・米などを積んで北海道に行った。それを江差・壽都・岩内・利尻などでおろし、ニシン粕を積んで戻って来る。これを国中や越後平野の水田の肥料にする。それから下関まで行って上方地方の雑貨類を積んで佐渡へ売りさばいた。かえってくるのは秋九月であった。帰り荷の主なものは綿・塩・半紙・蠟などであった。

これらの記載から、多田・松ヶ崎が古くから本州と佐渡内陸を繋ぐ玄関口であり、北前船の寄港地として商業の拠点でもあったことが読み取れる。

現地調査の結果、駄大郷の千年村としての特色・強みとして下記が確認できた。(詳細は各郷報告書を参考とされたい)

- ・ 多田港は松ヶ崎港の補助港として北前船により発展し、戦後まで本土との連絡船が行き来し、その名残として旅館建築が残っている。(図 4-9-1) 現在も小規模ではあるが漁港として機能している。松ヶ崎港と多田港は 2 km 程度の距離にあり、補完・連携しあい商業的にも共に発展してきたことは想像に容易い。
- ・ 多田では、漁業・農業(水田・柿など)・

個人事業・会社員が主な生業であり、広大な谷底の豊かな水田が継続されている。(図 4-9-2)

- ・ 多田・黒根まつりが非常に活気あふれる様子で継続されている。(ちょうど現地調査で祭りの様子を実見したが、オープンな土地柄・人柄もあり周辺集落の住民や外部大学生の協力も得ながら開催していた) (図 4-9-3)



図 4-9-1 旅館建築



図 4-9-2 低地部の水田



図 4-9-3 多田・黒根まつり

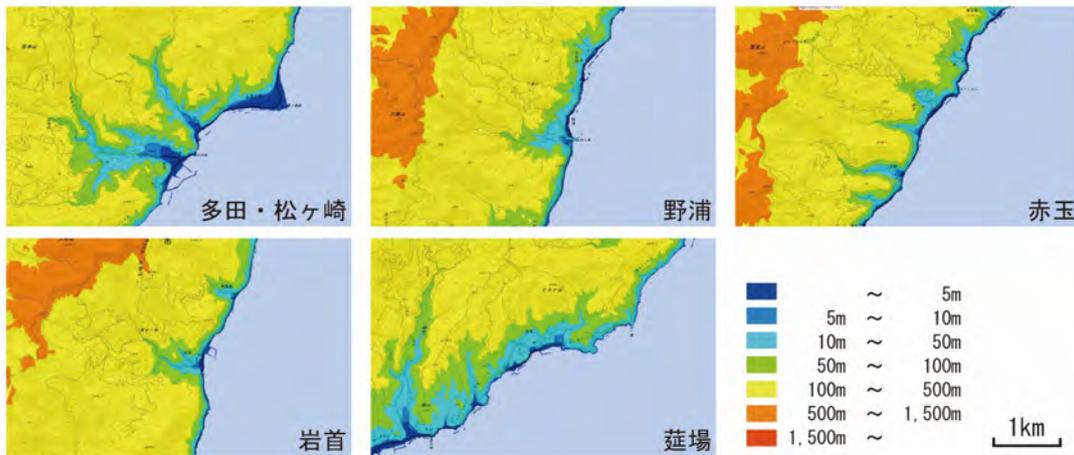


図 4-9-4 (地理院地図 (電子国土 WEB) ※6 を加工し作成)

さらに下記の通り地図上の分析から駄大郷の立地に優位性が確認できた。

- ・ 小佐渡東岸沿いを概観すると、野浦、赤玉、岩首、菟場など立派な棚田を有する集落はあるが、水田利用しやすい谷戸地形や低地を広範囲に有する集落は多田・松ヶ崎に限られる (図 4-9-4)。(岩首在住で棚田を営む方によると「棚田をやるのが一番大変、毎年赤字だが、祭りを楽しみに頑張っている」とのこと)
- ・ 小佐渡東岸側から小佐渡山地を抜け国仲平野に向かおうとするとき、多田・松ヶ崎から小倉峠 (小佐渡山地) を越え畑野 (国仲平野側) へアクセスするルートが最も高低差が小さく距離が短い (図 2) (かつての徒歩ルートの比較ではなく、現代の道路で比較した内容であるため、あくまで目安であることに留意されたい)。

上記の通り、多田・松ヶ崎の補完関係 (集落・港ともに)、水田に適した谷戸地形・低地を有する土地条件、国仲平野へのアクセス利便性の 3 点が、駄大郷が小佐渡東岸唯一の千年村立地の要因であると考察する。

#### 4. 末文にて

蛇足ではあるが、『私の日本地図 7 佐渡』に下記の記載がある。

「(多田の内陸側に位置する棚田は) 山の中腹にある丸山や、谷底の河内の人が耕している。(住民に話を聞くと) 何ととっても一番苦しいのは棚田をやることであった。『自分の子にだけはこんなつらい仕事をさせたくありません』『村はなくなってもいいです』それが女たちの言葉であった。」

これは昭和 35 年の内容である。そして今回調査では、多田に近い岩首在住の方が、赤字を出しながらも棚田を営んでいる人がいることを知った。これからも米をたくさん食べようと強く思う、そんな調査であった。(了)

#### 参考文献・引用文献

1. e-stat (<https://www.e-stat.go.jp/>) (2026 年 1 月 4 日閲覧) によると新潟県及び佐渡市の人口推移・人口減少率は下記の通り
  - ・新潟県の総人口 2005 年：2,431,459 人  
2020 年：2,201,272 人  
15 年間で人口減少率：-10.4%

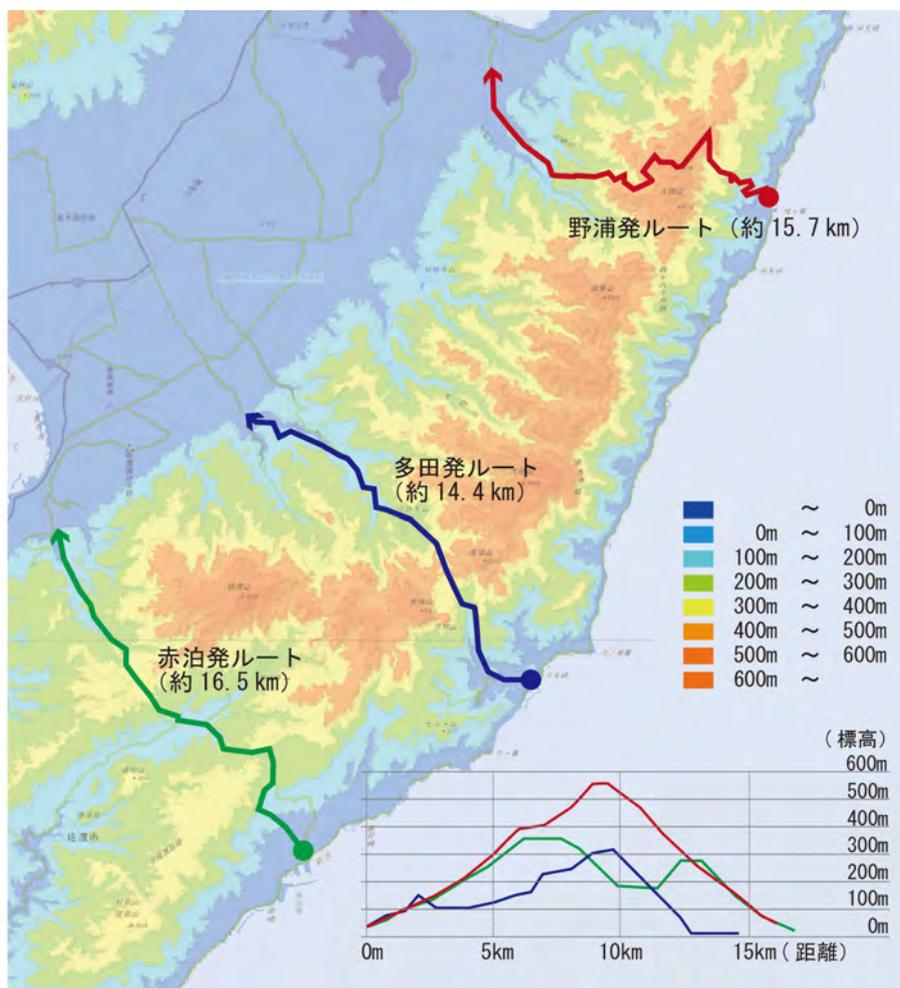


図 4-9-5 (地理院地図 (電子国土 WEB)・Googlemap<sup>※7</sup> を加工し作成)

- ・ 佐渡市の総人口 2005年：67,386人  
2020年：51,492人  
15年間の人口減少率：-23.6%
- 2. 佐渡市総合計画 (2022年3月)  
<https://www.city.sado.niigata.jp/soshiki/2005/36307.html> (2026年1月4日閲覧)
- 3. 佐渡市都市計画マスタープラン (2009年3月)  
<https://www.city.sado.niigata.jp/site/plan/2566.html> (2026年1月4日閲覧)
- 4. 佐渡市「朱鷺と暮らす郷づくり」認証制度のご案内  
<https://www.city.sado.niigata.jp/site/giahs/4573.html> (2026年1月4日閲覧)
- 5. 宮本常一「私の日本地図7 佐渡」  
未来社 p232-235
- 6. 国土地理院ウェブサイト  
<https://maps.gsi.go.jp/#5/36.104611/140.084556/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1> (2026年1月4日閲覧)
- 7. Google マップ  
<https://www.google.com/maps> (2026年1月4日閲覧)

## 佐渡初来訪の所感

一金盛 晋也

### 1. 佐渡市の概要

私が本格的に参加した 2015 年の相模の疾走調査以降、これまでは一泊二日で実施されることが通例であったが、今回は初の二泊三日での実施となった。ここでは、集落や金山関連の主要な観光地に赴く中で印象に残ったことを述べていく。まずは佐渡市がどのような場所であるかを気候や人口、産業から把握してみた。以下にその概要を示す。(表 4-10-1)

### 2. 佐渡島初来訪の雑感

内地との違いを意識して町を見ていたが、国中平野のロードサイドの様子は内地のそれと大差なかった。強いて言えばドラッグストアがありがちだなといった程度であった。また農地に目を向けても農村平野が手前に広がり、奥に山が見えるという景観構成が主であって、島にいるとは感じない穏やかな風景が広がっていた(図 4-10-1 上)。反対に佐渡島の外洋と接する箇所、特に大佐渡山地側の景観には圧倒された(図 4-10-1 下)。訪れた時間が夕刻過ぎであったのも

表 4-10-1

気候	対馬暖流の影響で、冬はわずかに暖かく、夏は涼しい。また、新潟市と比較しても積雪も相対的に少ない。
人口 動態	現在の人口は約 5 万人であり、減少の一途を辿る。将来人口においても減少が予測される。特に、若者世代(20~24 歳)の島外流出が著しく、高齢人口は 40% を超える(全国平均は約 30%)など、過疎化が進む地域である。人口のほとんどは国中平野内に集中するが、相川や小木などにも一定の集積がある。
産業	建設業、観光業と製造業(精密機械加工、酒造)が主な産業である。特に、建設業は従業者数割合は 12.7% (卸売業・小売業、医療・福祉に次いで 3 位)、売上高では 25% (卸売業・小売業に次いで 2 位)となっている。

相まって心が休まる風景ではなかった。この佐渡島の二面性を見るとやはり、地形や生業の観点だけでなく、感情の観点からも国中平野に居を構えたくなるのではないか。



図 4-10-1 上：国中平野、下：ニツ亀

### 3. ガラパゴス遊具(羽茂郡菅生郷・星越郷)

羽茂郡菅生郷・星越郷に比定された集落を見るべく、度津(わたつ)神社へ行った(正確には羽茂郡菅生郷・星越郷には比定されないが、隣接する大字内にある佐渡国の一宮)。

度津神社は巨大な鳥居を有する参道があるが、その参道の脇に、羽茂児童遊園があった。約 0.1ha ほどの遊具が特徴的な公園で、遊具の状態や、草刈りなどが適切になされていた。小型のシーソーやゾウを模したすべり台など小型遊具はメーカーの既製品であったが、UFO の形をしたコンクリート遊具や工業感の強い滑り台など、大型遊具はメーカーが作った既製品には見えなかつ

た。(図 4-10-2) これら大型遊具はどこでも手に入りそうな部材(単管パイプや縞鋼板、土管)で構成されていることが特徴的であり、島であるという地形的制約から大型遊具は現地で調達できる部材で作上げたのではないかと考えられる(ひと昔前の遊具はこんなものなのかもしれないが)。

近年は安全性の基準の強化や補償の有無、メンテナンスの容易さといった観点から、既設物を撤去し、全く新しいものにするという方針が取られることが多いが、遊具はいずれも意匠が古い割にはきれいに維持され、チェーンなど一部部材が交換された様子もみられた。このように、公園施設一つとっても内地とは異なる独自の変化を遂げていく様子は興味深く、多少のマイナーチェンジは受容しつつも、どうかこのままの形で残ってほしい。

#### 4. 今後の疾走調査に向けた提案

これまで数回疾走調査に参加してきたが、

その際の反省として、班に割り当てられた調査対象集落への滞在時間が長くなってしまい”疾走”感がないということがあった。したがって、今回はすべての集落を見るということを意識した。その結果、滞在時間の偏重はあるものの、すべての集落を見ることができた。ここでは私の班の実際の工程(表 4-10-2)を示したうえで、今後の調査スケジュールの設定や、”疾走”調査たらしめるための集落の調査時間の下限/上限設定について提案を行う。

#### 4-1.調査スケジュールの目安

3日間の調査可能時間 16.5 時間のうち、対象集落への滞在時間は計 5.3 時間であった。これに佐渡金山や宿根木といった主要観光施設での調査時間を加えると、合計 11 時間を調査に充てることができた。また、これら各地への移動に要した距離を確認すると、3日間で 180km となった。特に最も調



図 4-10-2 特徴的な遊具と疾走調査メンバーら

査時間の長かった2日目は約90kmも移動に要したが、結果として5つの集落と宿根木の合計6箇所を見ることができた。したがって、今後は90km/日(約9時間)を移動距離の上限の目安とし、6集落/日(約9時間)を調査可能な集落の箇所数の目安として調査日程を組むことが適切と考えられる(集落の調査時間に3時間充てられる場合は、移動距離を30km以内におさえ、かつ、2集落の調査に留める)。

#### 4-2.集落調査時間の下限の設定

車内からの実見に留まってしまった集落もいくつかあるが、集落の様子をつかむ分には有意義なものであった。特に、集落内の共通項(共通的な住宅の構成要素や素材、色など)は徒歩やヒアリングよりも短時間かつ簡便に把握しやすくと改めて感じた。そのほか、地形のアップダウン、集落と農地の土地の使い分けの様子など、地図上では確認しづらい集落の様子を体感できる点で、車での実見は非常に効果的であった。さらに、各日の終わりに開催される報告会においても、少しでも疾走できた集落である場合、発表内容の解像度も向上する点でも有意義なものである。この体験をふまえ、来年以降の疾走調査では、各集落に対し、最低10分を充てることを提案したい。

#### 4-3.集落調査時間の上限の目安

前述したとおり、今回の調査はすべての調査対象集落を見ることを意識したことから、班に発表が割り当てられた千年村の調査内容が十分でなくなってしまうことが懸念された。しかし、結果的には2時間半と少ない時間ながら、学生たちの尽力により

千年村の構造やキャッチコピーまで取りまとめることができた。仮に、半日以上特定の集落に偏重して調査した場合、少ない発表時間で共有すべき情報の取捨選択にコストを要していたことが考えられることから、一つの集落に充てられる調査時間を最大3時間とすることを提案したい。(了)

表 4-10-2

日程	調査集落	滞在時間	調査方法	移動距離
1日目 (3時間)	01 首茂郡加茂郷	15:30-16:00	車内から実見	約2km(宿根木)
	02 首茂郡久知郷	16:30-17:30	徒歩/ヒアリング	約6km
	【宿】	—	—	約20km
	小計	1.5時間	—	約28km
2日目 (9.5時間)	04 羽茂郡大目郷	8:00-8:10	車内から実見	約5km(宿-)
	05 雄太郎岡郷	8:10-8:20	車内から実見	約2km
	03 雄太郎雄太郎郷(宿根木)	8:30-11:00	徒歩/ヒアリング	約3km
	07 羽茂郡大目郷	11:30-12:00	徒歩	約20km
	(宿根木)	(13:20-15:00)	徒歩	約30km
	06 羽茂郡菅生郷	15:40-16:10	車内から実見	約12km
	【宿】	—	—	約20km
	小計	3.3(6)時間	—	約92km
3日目 (4時間)	(きらりうむ佐渡/佐渡金山)	(8:40-11:40)	徒歩	約20km(宿-)
	08 雄太郎八多郷	13:00-13:10	車内から実見	約20km
	09 首茂郡桑葉郷	13:10-13:20	車内から実見	約2km
	10 首茂郡大野郷	13:20-13:30	車内から実見	約3km
	【両津港】	—	—	約15km
	小計	0.5(3.5)時間	—	約60km
計(16.5時間)	計	5.3(11)時間	—	180km



図 4-10-3 報告会のアウトプット

## 生態系保全の取り組みは、千年村：佐渡に どのような影響を与えるのか？

—稲田玲奈

2026年10月11日から13日の3日間にわたり、新潟県佐渡島へ千年村調査へ訪れた。

筆者がこれまで参加してきた霞ヶ浦沿岸部などの千年村地域と比較すると、佐渡島は離島という地理的条件を有し、その環境特性が集落の成り立ちや維持のあり方に強く影響している点が特徴的である。佐渡島は面積約855 km<sup>2</sup>を有し、島内に山地、平野、湿地、海岸といった多様な環境が比較的小さな範囲にまとまって存在している。このような環境条件は日本の離島としても特異であり、生態系の多様性が高い。

これまでの千年村調査では、交通、産業、共同体といった側面から、集落が長期にわたり存続してきた要因を考察してきた。一方、今回の調査では、こうした特殊な自然環境を背景として、島内に希少な生態系・生物種が存在し、それらを保全しようとする様子が調査の中で目撃された。この生態系保全の意識・制度は佐渡現在の集落の在り方に影響を与えているのではないだろうか。

本報告書では、佐渡島における生態系保全の取り組みに着目し、それが千年村としての集落の持続性にどのような影響を及ぼしているのかを整理・考察する。

### 1. 各地域を巡って感じ取った環境的特性

#### 1.1 01. 加茂郡加茂郷

佐渡島で最初に訪れた集落は、01. 加茂郡加茂郷である。本集落は、海岸沿いから谷戸

上にかけて線状に集落が形成されており、谷戸の下部には広大な田園空間が広がっている。谷戸上部の集落空間と、谷戸下部の田園空間が明確に分かれているため、田園空間内には建築物などが混在せず、まとまりのある大規模な農地が確保されている点が特徴的である。



図 4-11-1 加茂郷歌代神社下から見た田園風景  
(筆者撮影)

#### 1.2 06. 羽茂郡須郷郷・星越郷

翌日に訪れたのは、06. 羽茂郡須郷郷・星越郷である。この集落の中心部を羽茂川が流れ、その周囲を集落と山林が囲む構成となっている。街道沿いには集落が密集している一方、その外周部には電化製品工場などの企業施設や、個人農業ではないカキやブルーベリーを扱う農業法人の農園が多く見られた。集落周辺には家庭菜園や利用されている田畑が点在する一方で、一部には耕作放棄地も確認された。

これらの民家や田畑に比して、新しく整備された印象を受けたのが河川空間である。羽茂川では、コンクリート製の連節ブロック護岸に加え、石を用いた床固工、片側には木工沈床工が採用されていた。床固工や木工沈床工は、河床や河岸の安定を図ると同時に、水生生物の生息空間を確保することを目的とした工法で

あり、治水と生態系保全の両立を意図した整備であると読み取れる。これらの工法が採用されていることから、羽茂川は過去に氾濫や洗掘が生じやすい河川であった可能性が高く、それに対応するための護岸・河床対策が行われてきたと考えられる。また安全性の確保だけでなく、生態系への配慮を伴う河川改修が行われてきたことが読み取れる。集落と人々の暮らしに大きく関わる河川が、生態系保全の観点から維持・管理されている点が特徴的である。



図 4-11-2 加茂川の様子(筆者撮影)

はセイタカアワダチソウである。セイタカアワダチソウはパイオニアプランツと呼ばれる植生遷移の初期段階に現れる植物であり、その存在は、年に1~2回程度の定期的な草刈りが行われている土地であることを示している。すなわち、農作物の生産は行われていないものの、田畑としての空間を維持するために、人為的な手入れが継続されていることの表れである。また、これらの田畑において除草剤が使用されていないことも読み取れる。



図 4-11-3 岡郷内にある民家横のため池  
(筆者撮影)

### 1.3 04. 雑太郡岡郷

04. 雑太郡岡郷は、台地上に立地する集落である。

この集落では、台地の下部に民家が点在し、その間に畑や屋敷林、ため池が配置されている。さらに台地上部には、まとまった田畑、大規模なため池、山林が順に広がっている。住民へのヒアリングによれば、民家周囲に点在するため池は、生活用水の確保などを目的として、住民自らが造成したものであり、小規模な池が複数存在しているという。ため池が存在することから、この地域では農業用水の不足しやすい環境であるということが読み取れる。

田畑の一部は耕作放棄されており、そこでは雑草が繁茂していた。確認された雑草の多く



図 4-11-4 岡郷の側溝に雑草が繁茂する  
(筆者撮影)



図 4-11-5 岡郷の建物際に雑草が繁茂する  
(筆者撮影)

これら3つの集落からは、

- ① まとまりのある広大な水田空間が確保されていること②河川や水路などにおいて、生態系に配慮した環境整備が行われていること③離島という地理的条件により農業用水が不足しやすく、ため池を用いた灌水が行われていること

などが読み取れる。これらの特性から冒頭で述べた野鳥や昆虫等の生物の生息環境としやすい場が存在することが分かる。

## 2. 佐渡島で取り組まれている生態系保護の動き

次に、これらの集落環境の背景にある、佐渡島内の生態系保全の取り組みについて整理する。

環境省の調査によると、佐渡島は国内最後のトキ(*Nipponoa nippon*)や里地里山の生態系シンボルであるオオタカの生息地である。また、和名に「サド」と冠する地域固有の動植物も多く、佐渡島が生物多様性の高い地域であることが示されている(1)。このような自然環境を背景として、島内では希少種の保全を目的とした取り組みが進められてきた。

ここでは特にトキについて考える。トキは渡り

を行わない留鳥で、山間部のマツや広葉樹の大木を営巣木とし、サワガニやドジョウ・昆虫などの水性小動物を餌とする。また、春から秋にかけては営巣地近くの沢や山間の棚田を主な採餌場とし、積雪する冬季は、雪のない水田や河川を採餌場とする(2)。環境共生研究所の大竹伸郎は「こうした習性を考えると日本におけるトキの生息環境は、古来より水田稲作農業にかかわってきた日本人の手によって改変された農村景観に他ならない。」と述べる。この文章からもトキの生息と農業環境は密接に関わっていることが分かる。

佐渡島においてトキは 1940 年以降、化学肥料や農薬が使用されるようになったこと、また島内の冬季灌水田が減少したことにより、段階的に個体数を減らし、絶滅の危機に瀕することとなった。これを受け、2003 年には環境省が「トキ野生復帰環境再生ビジョン」を策定している。このビジョンに基づき、2007 年には佐渡市がトキの餌場確保と生き物に優しい米づくりを目的とした「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」が設立し、3 年目の 2010 年には市内農家の 10%、生き物を育む農法を実施する水田面積は約 1200 m<sup>2</sup>(水稲作付農地の訳 20%)となった(3)。

また、佐渡島では耕作放棄された棚田を NPO 等の団体がトキの採餌場(ビオトープ)として整備を進めた。他にも、無農薬・無化学肥料や冬水田んぼの実践もおこなわれている(4)。これらの取り組みにより佐渡では、日本で初めて GIAHS(世界農業遺産)にも制定されている。

水田に限らず、川づくりにおいても 2006 年には「佐渡地域河川自然再生計画」が策定され、島内の複数の川で生態系を配慮した河川づくりの実践がなされていることが分かる(5)。本調査で観察した羽茂川について、個別に生態系

配慮の詳細を示す文献は確認できなかったものの、島内全体として河川改修に生態系への配慮を組み込む意識が共有されていることは読み取れる。

これらの取り組みの成果として、環境省によると 1981 年々までにわずか 5 羽まで減ったトキは 2024 年度には野生下で 500 羽以上の生息が確認されている。



図 4-11-6 トキ保護募金により、令和 6 年度 佐渡市トキビオトープ整備事業 位置図

### 3. 生態系保護の動きによって集落に与えていること

現地調査および文献調査を踏まえると、佐渡島はもともと山林・平野・湿地・海が狭い範囲にまとまって存在する地理的特性を有すること、さらには農業用水の確保が難しい環境であったことから、冬季灌水やため池の利用といった水利用の工夫が行われてきた。その結果として、佐渡島では日本で最後までトキが生息し得る環境が維持されてきたと考えられる。尚これらの環境特性は、今回調査したいずれの集落においてもその傾向が確認できた。

一方で、現代における希少種保全の取り組みは、農業や河川環境に対して新たな影響を与えている。今回の調査では、住民一人ひとりの意識や具体的な行動について詳細なヒアリングを行うには至らなかったものの、佐渡島内の多くの水田と山林の間にビオトープが設置され、農薬使用を抑えた農法が広く実践されていることは、農業の在り方や農村景観に大きな変化をもたらしているといえるだろう。

また、生態系保全を目的として、農業や河川整備に対して複数の補助金制度が設けられていることも確認された。例えば、佐渡市による「トキビオトープ整備事業」補助金や、農林水産省による「環境保全型農業直接支払制度」などが挙げられる。一方で、農薬の削減や水辺環境の創出に伴い、作業量や管理の手間が増加する側面もあり、これが農業の継続における新たなハードルとなっている可能性も指摘できる。

希少生物の保全が、なぜここまで人々の行動を変える力を持つのか。これまでの千年村調査でも、生き物や信仰をめぐる独自のしきたりや空間構成が確認されてきたが、佐渡島におけるトキへの意識は、それらに連なる現代的な形態の一つとも捉えられる。

今回の調査を通じて、「生態系保全」という価値が、特定の個人にとどまらず、島内の多くの人々の行動を変え、ひいては共同体や産業、集落そのものの在り方に影響を与える存在であることを強く感じた。

### 4. トキの目撃

調査最終日、10 月 13 日に加茂郡大野郷から両津湊へ向かう途中、車内からトキを目撃した。水田で地面を見つめていたトキは、やがて静かに飛び立ち、淡いピンク色の大きな身体

を空へと持ち上げていった。その姿は、親しみやすさと同時に、どこか崇高さを感じさせる存在であった。

目撃地点は、トキの保全を目的としたビオトープが多く整備されているエリアでもあった。人々が生物を意識し、制度を整え、日々の農業の中にその意識と技術を取り入れることで、空間や営みが変化していく。その結果として、再びトキが現れる環境が形成されていることを、実感として理解する体験となった。(了)

#### 出典

- (1)環境省『生物多様性保全上重要な里地里山(新潟県)[https://www.env.go.jp/nature/satoyama/15\\_niigata/no15-13.html](https://www.env.go.jp/nature/satoyama/15_niigata/no15-13.html)(最終閲覧日:2026年2月31日)
- (2)大竹伸郎(2010)「佐渡市におけるトキ放鳥と水田稲作農業の課題」、『環境共生研究』
- (3)豊田光世(2021)「新潟県佐渡市「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」参加農家を対象としたアンケート調査報告」、『野生復帰』
- (4)関島恒夫(2009.02)「トキの野生復帰を目指した自然再生シナリオの立案」、『ランドスケープ研究』,72巻,4号,p385-389.  
著者名(出版年)・「論文名」『誌名』巻数,号数, pp.始め-終わり.
- (5)山川雄太郎(2016.10)「地域住民と協働するトキの野生復帰に向けた河川の自然再生」、『国土交通省国土技術研究会概要論文集』,2016巻,p170-175

## 第 5 章 付記

### ■教員・調査協力者

中谷礼仁(歴史工学/早稲田大学教授)  
木下剛(造園学/千葉大学大学院教授)  
福島加津也(建築家/東京都市大学教授)  
林憲吾(東京大学生産技術研究所准教授)  
川井操(滋賀県立大学准教授)  
田熊隆樹(早稲田大学 中谷礼仁研究室卒業生)  
金盛晋也(千葉大学 木下剛研究室 卒業生)  
近藤真(千葉大学 木下剛研究室 卒業生)  
小林千尋(早稲田大学 中谷礼仁研究室 卒業生)  
永井朝樹(千葉大学 木下剛研究室 卒業生)  
稲田玲奈(慶應義塾大学 石川初研究室 卒業生)

### ■学生

#### 【早稲田大学】

碓氷創平・飯原彩絵・金珉廷・笹島里紗子・長山飛雄

#### 【千葉大学】

岩本志満・斎藤優介・佐藤雄河・成田紘太郎

#### 【慶應義塾大学】

井庭晴香・兼井佑大・木村佳鈴・富樫遼太・中村美佐・萩原世・原田馨子・三宅佳穂・  
渡邊芽

#### 【東京都市大学】

池田公輔、大谷祐貴、倉田萌花、嶋田舞、杉浦康晟、鈴木茉那美、珍田彩羽、萩谷峻史、  
深澤一弘、宮地愛美、森部雄仁、安江将輝)  
倉田萌花・杉浦康晟・池田公輔・鈴木茉那美

#### 【東京大学】

橋口登偉・堀米輝

#### 【滋賀県立大学】

上紺屋佑真

#### 【立正大学】

奥村敦至

### 5-1.謝辞

佐渡島を疾走調査するにあたり、調査対象地である 12 か所の集落とその周辺の地域にお住まいの方々には大変お世話になりました。心より感謝いたします。

5-2. 巻末資料

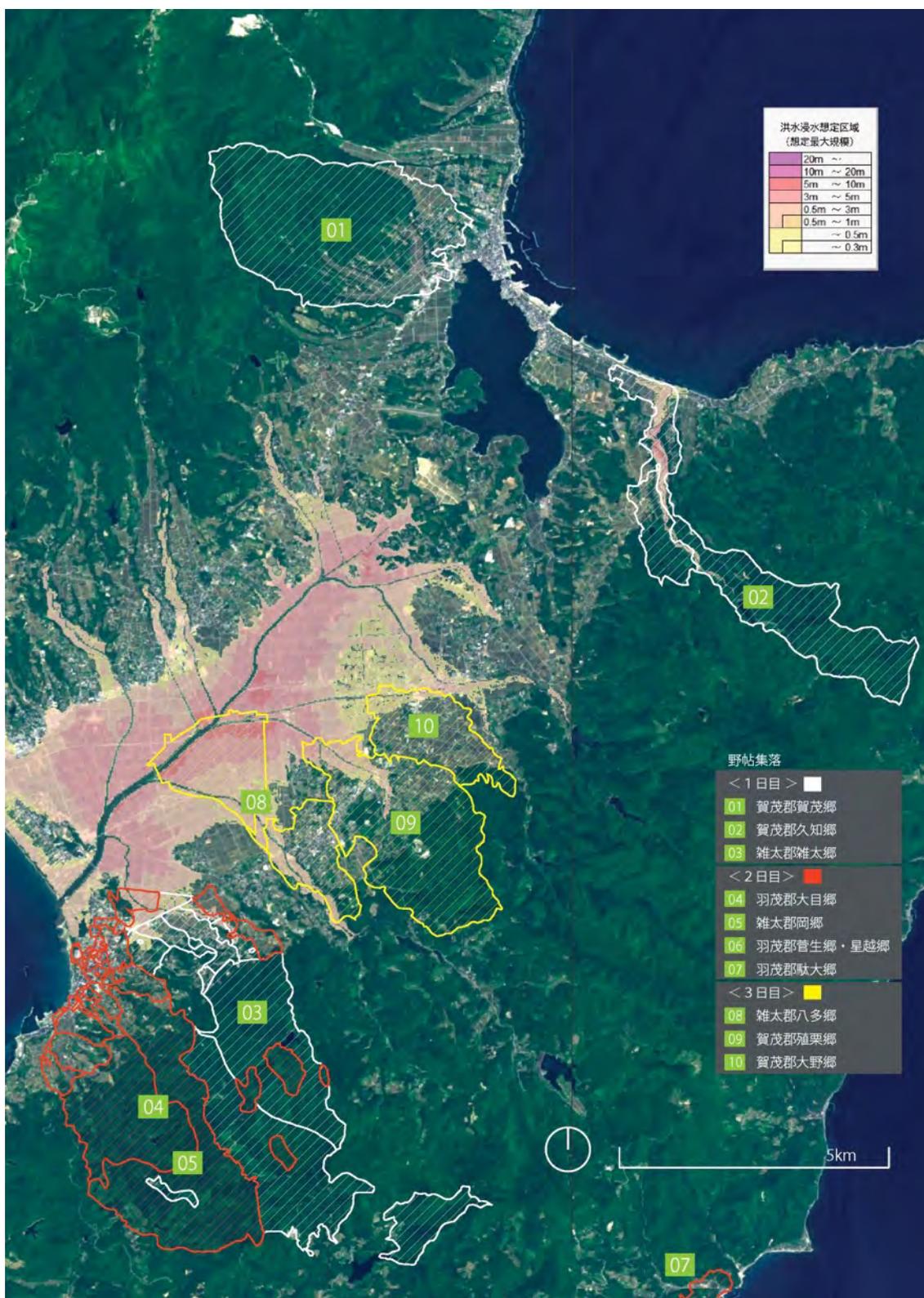


図 5-1 災害リスク情報図① (笹島里紗子作成)

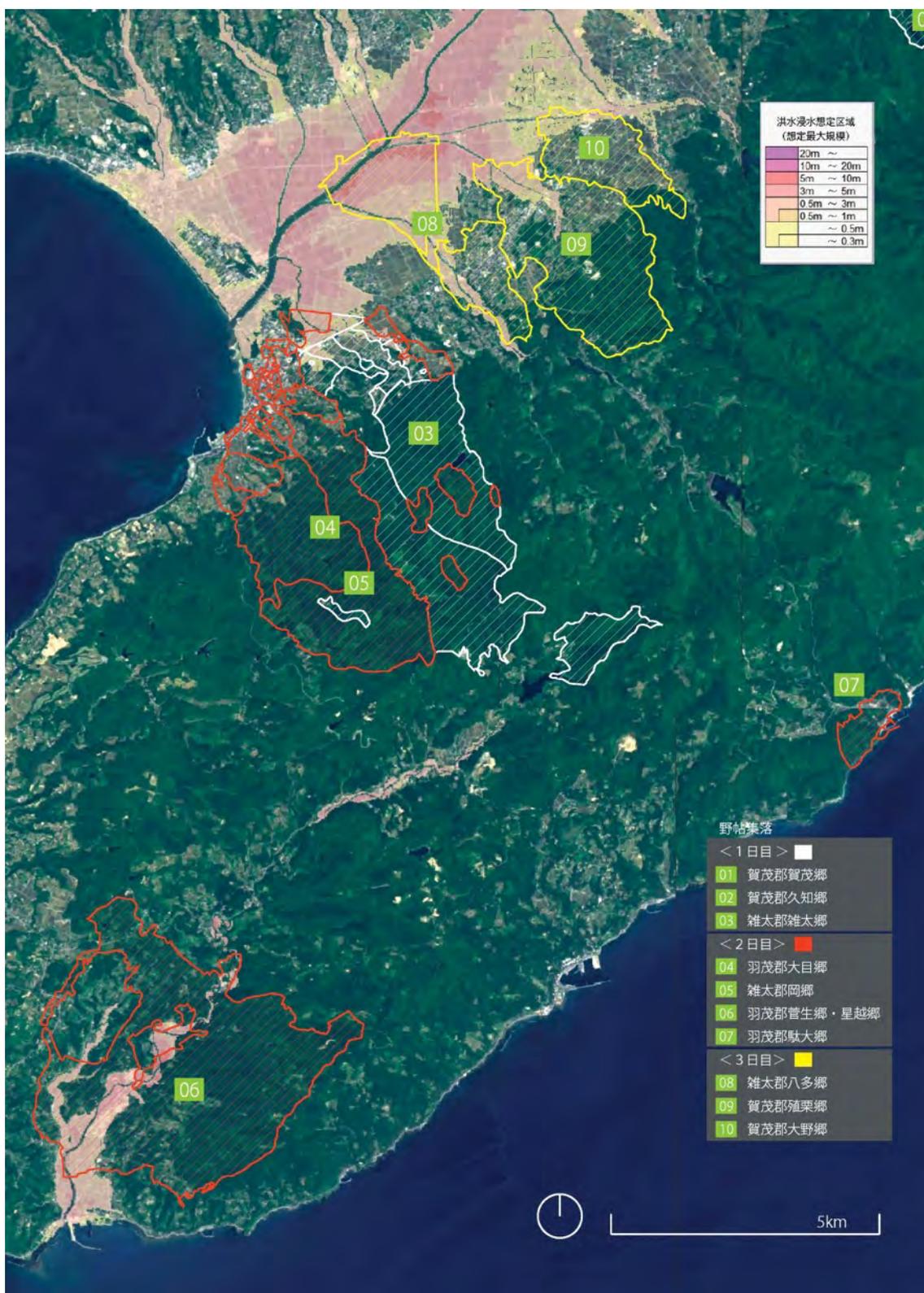


図 5-2 災害リスク情報図② (笹島里紗子作成)

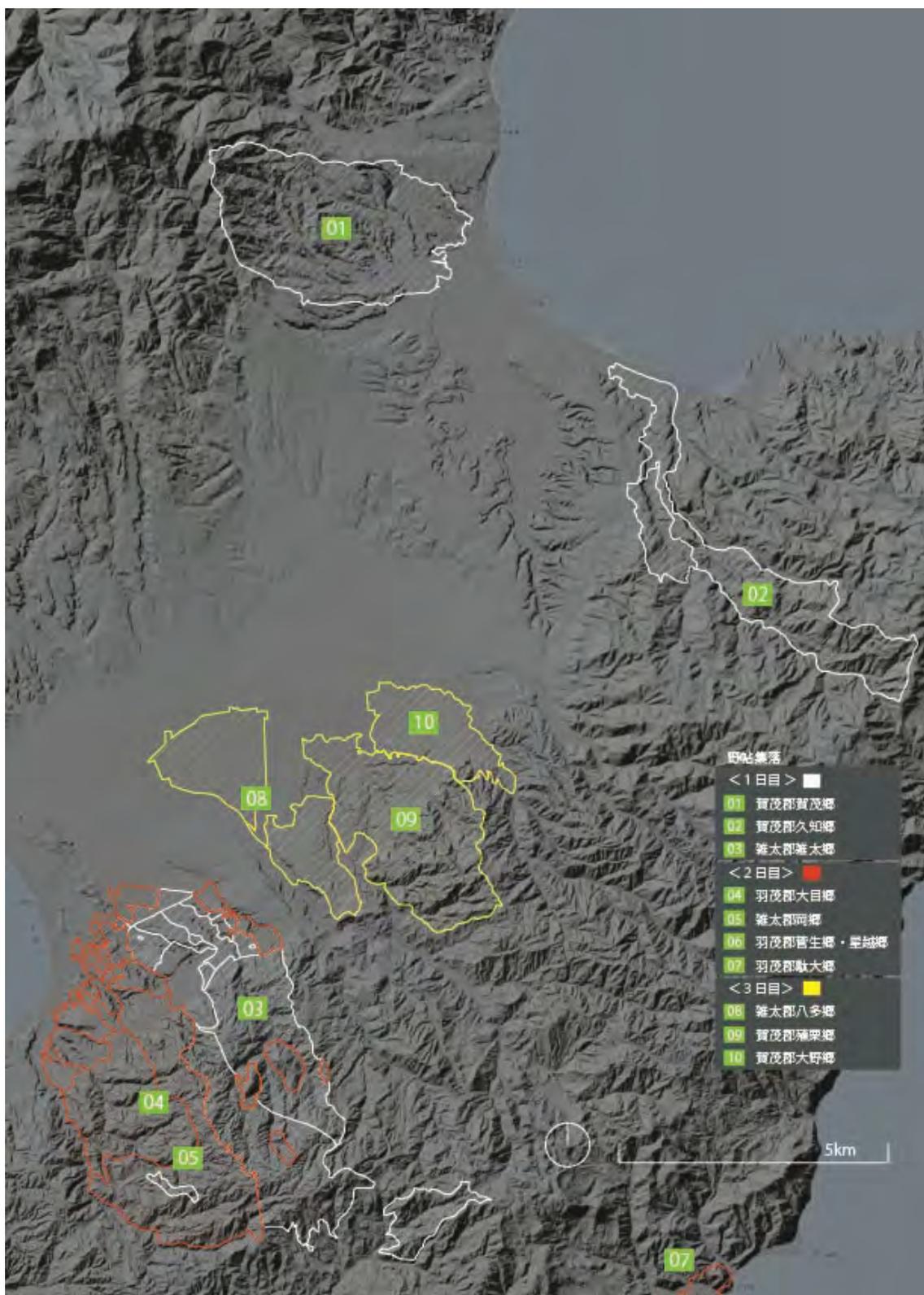


図 5-3 地形図① (笹島里紗子作成)

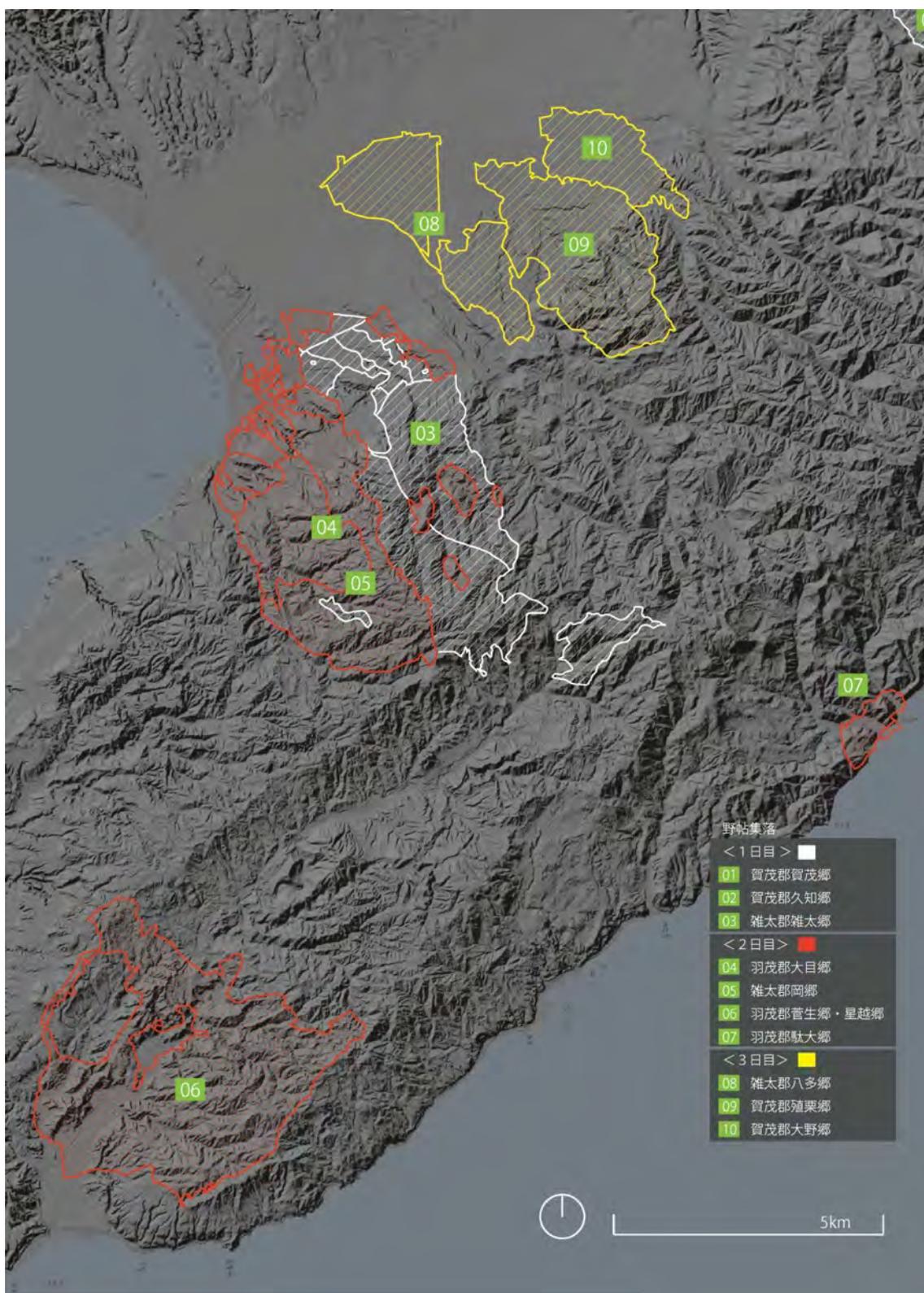


図 5-4 地形図② (笹島里紗子作成)

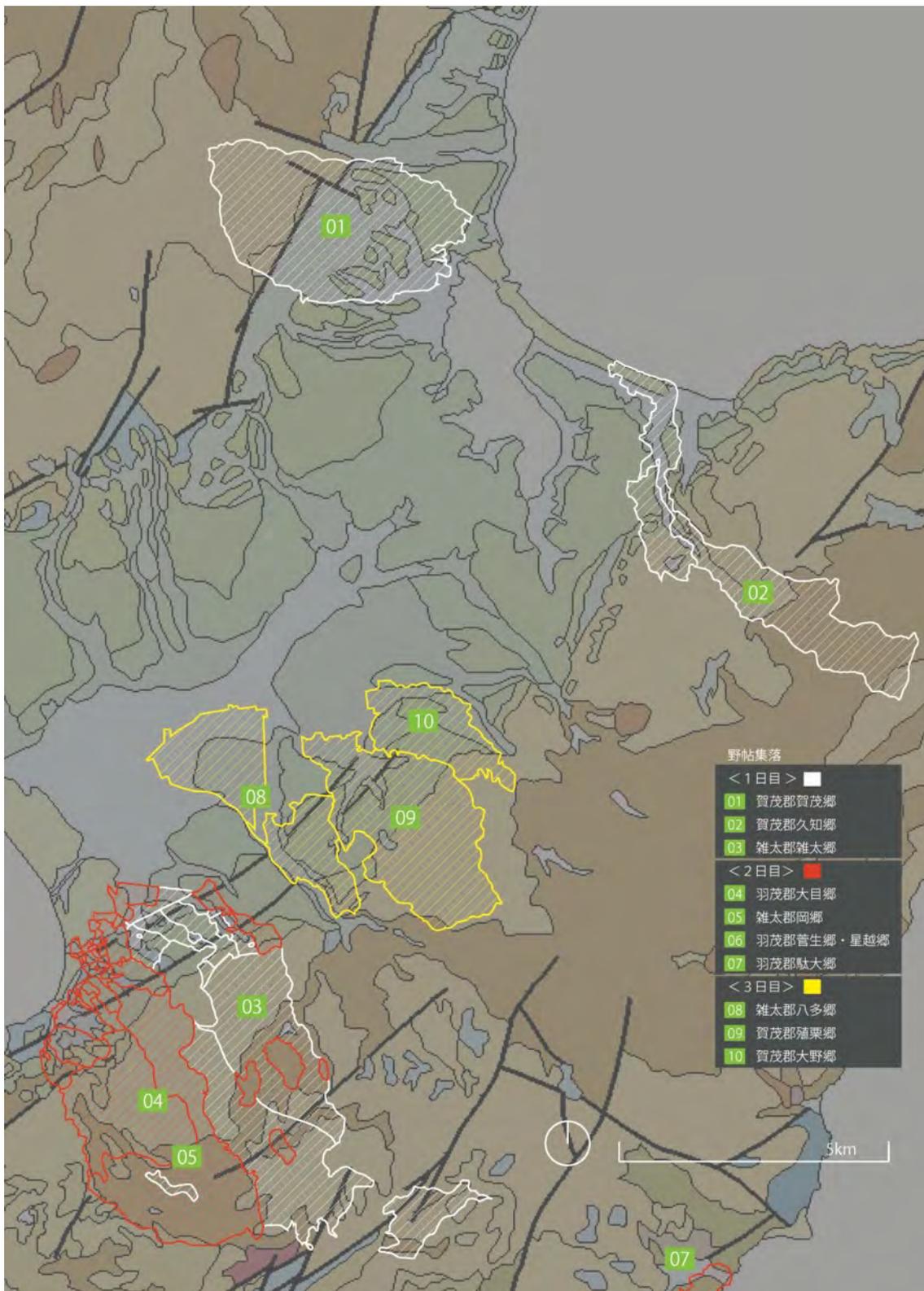


図 5- 5 地質図① (笹島里紗子作成)

(下図：20 万分の 1 シームレス地質図 V2 凡例は地理院地図を参照。)

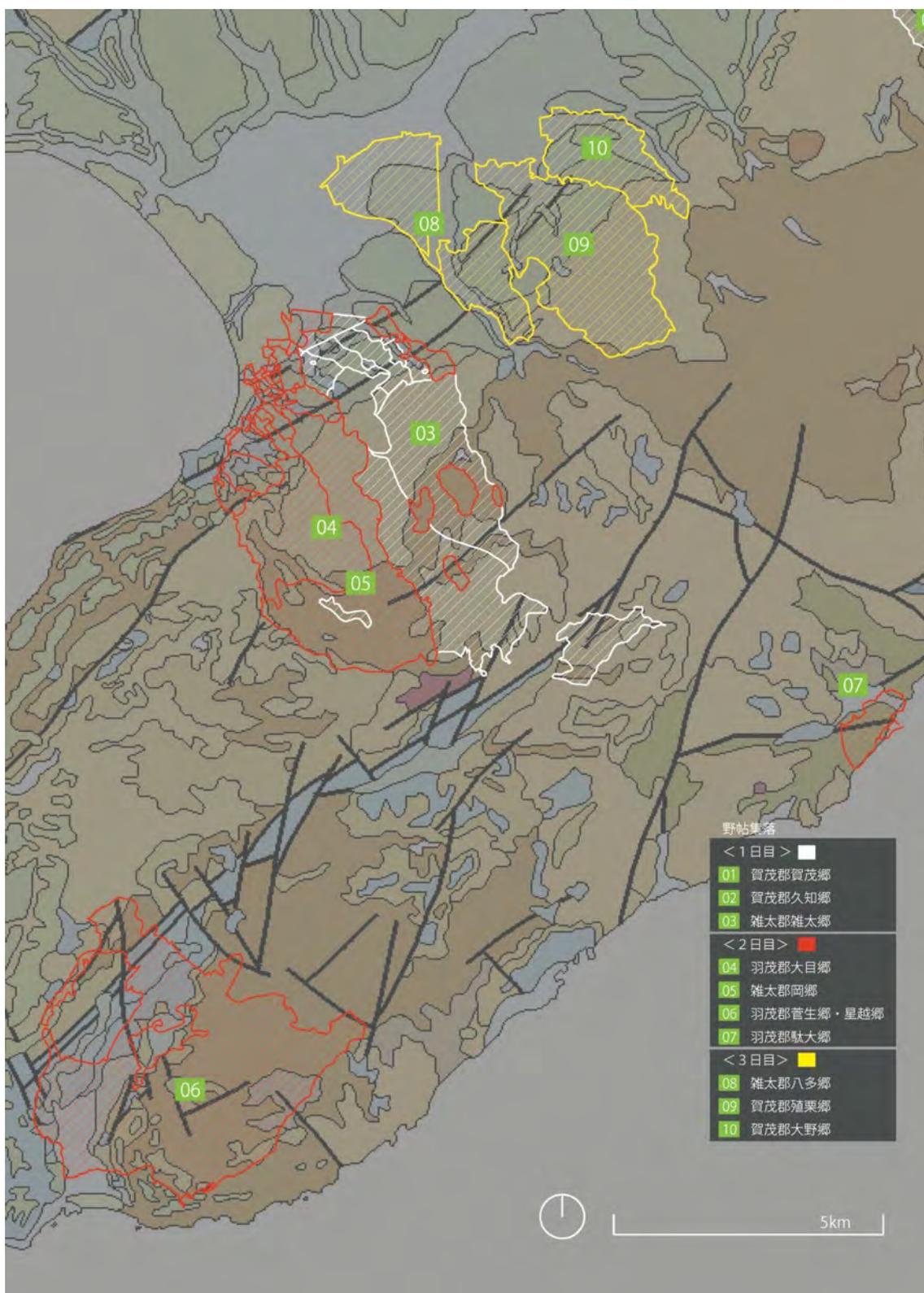


図 5-6 地質図② (笹島里紗子作成)

(下図：20 万分の 1 シームレス地質図 V2 凡例は地理院地図を参照。)

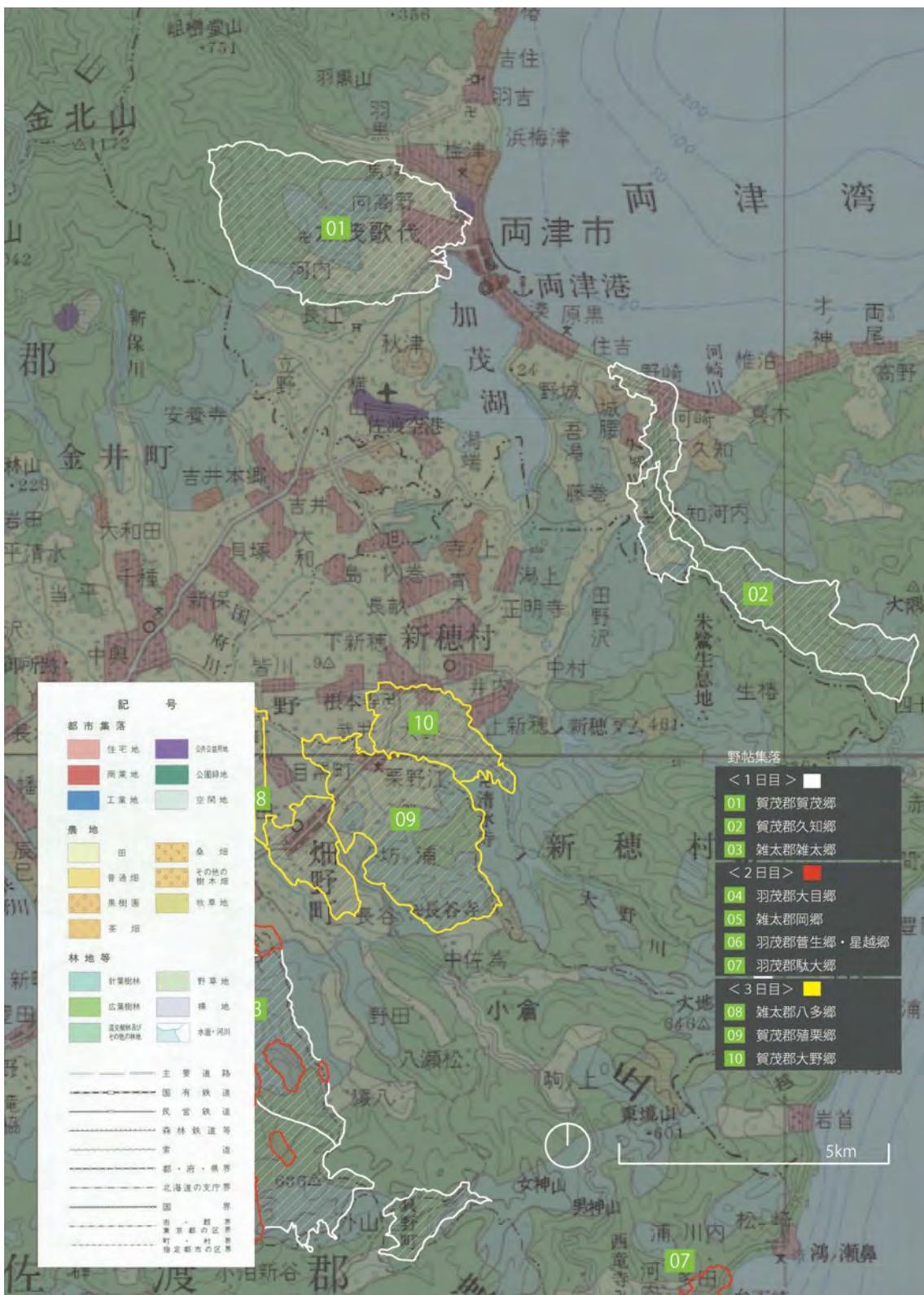


図 5-7 土地利用図① (笹島里紗子作成)

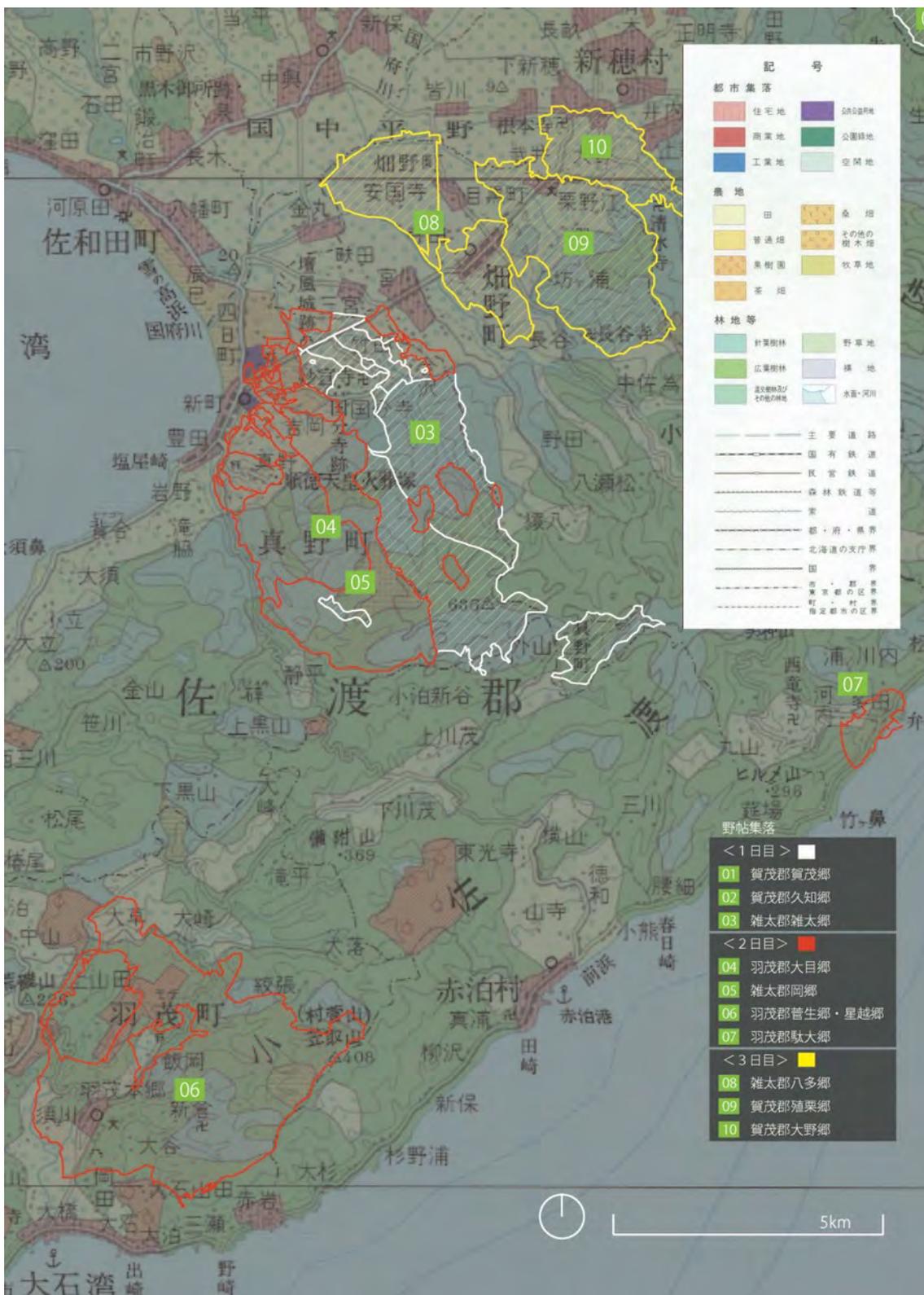


図 5-8 土地利用図② (笹島里紗子作成)



図 5-9 航空写真① (笹島里紗子作成)

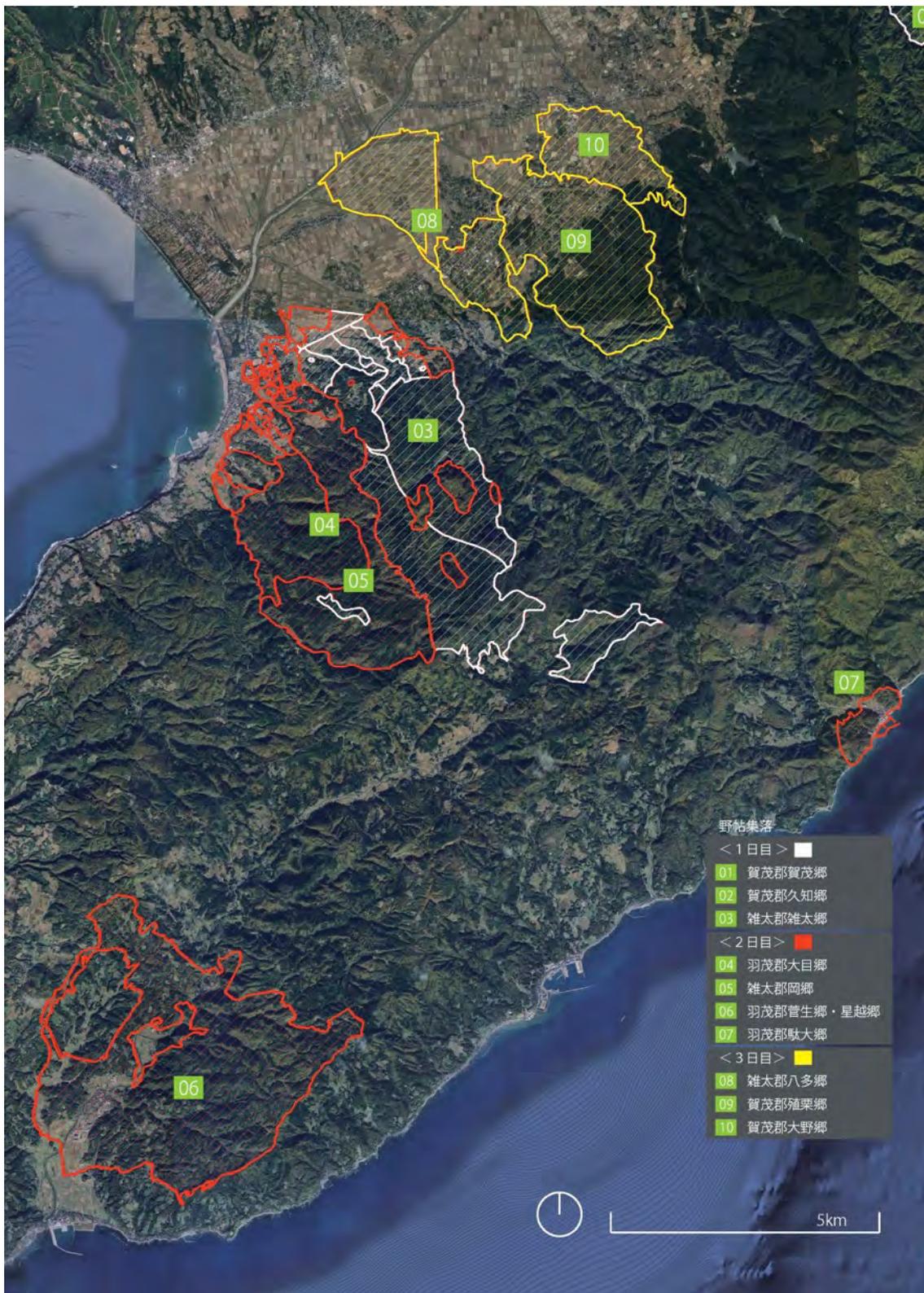


図 5-1 0 航空写真② (笹島里紗子作成)

5-3.成果物ポスター



図 5-11 1班 賀茂郡賀茂郷ポスター



図 5-14 4班 雑太郡岡郷ポスター



図 5-12 2班 諏訪郡久知郷ポスター



図 5-15 5班 羽茂郡大目郷ポスター



図 5-13 3班 雑太郡雑太郷・竹田郷ポスター



図 5-16 6班 羽茂郡菅生郷・星越郷ポスター



図 5-17 7 班 羽茂郡駄大郷ポスター



図 5-19 9 班 賀茂郡殖栗郷ポスター



図 5-18 8 班 雑太郡八田郷ポスター



図 5-20 10 班 賀茂郡大野郷ポスター

---

2025 年 2 月 20 日発行

## 2025 年度佐渡島調査報告書

執筆 (五十音順)

稲田玲奈

田熊隆樹

金盛晋也

永井朝樹

川井操

中谷礼仁

木下剛

林憲吾

小林千尋

福島加津也

近藤真

慶應義塾大学 環境情報学部 石川初研究室

滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科 川井操研究室

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース環境造園領域

都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京大学生産技術研究所 林憲吾研究室

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 福島加津也研究室

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

立正大学 奥村敦至

編集

笹島里紗子

発行

千年村プロジェクト

関東地域活動拠点

早稲田大学理工学術院 創造理工学部 建築学科 中谷礼仁研究室

〒 169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 55N-8-9

Tel. 03-5286-2496

---